

報告書 甲 第 号 - 3461 号

インドの後期仏教石窟の形態に関する研究

野々垣 篤

①

インドの後期仏教石窟の形態に関する研究

野々垣 篤

インドの後期仏教石窟の形態に関する研究

目次

序	・・・・・・・・	1
第I部 西マールワー地方の仏教石窟の形態		
第1章 西マールワー地方の仏教石窟成立の歴史的背景		
はじめに	・・・・・・・・	9
第1節 文献的史料	・・・・・・・・	9
第2節 西マールワー地方と政治勢力	・・・・・・・・	10
第3節 西マールワー地方と仏教	・・・・・・・・	11
3-1. 西マールワー地方で発見された仏教に関わる銘	・・・・・・・・	12
3-2. 玄奘の訪れた時代の西マールワー地方の仏教	・・・・・・・・	13
第4節 従来の記述に見られる西マールワー地方の 仏教石窟の年代	・・・・・・・・	14
第2章 ダムナール仏教石窟の平面と伽藍の基本構成		
はじめに	・・・・・・・・	23
第1節 ダムナール仏教石窟の平面構成	・・・・・・・・	24
1-1. 南群の位置づけ	・・・・・・・・	24
1-2. 南群石窟の平面構成	・・・・・・・・	25
1-2-1. 主要6窟以外の南群石窟の形態と機能	・・・・・・・・	25
1-2-2. 主要6窟の形態と機能	・・・・・・・・	26
第2節 主要6窟で見られる類似と「伽藍の基本構成」	・・・・・・・・	30
2-1. 列柱ベランダの構成の類似	・・・・・・・・	30

2-2. 第12窟チャイティヤ窟部分と第9窟における ホール空間の扱いに関する類似	31
2-3. 第11窟と第7窟におけるホール空間に関する類似	31
2-4. 石窟の類似と「伽藍の基本構成」	32
2-5. 「伽藍の基本構成」と第13窟・第14窟	32
おわりに	33

第3章 西マールワール地方の仏教石窟の平面形式

はじめに	45
第1節 各石窟群を構成する石窟の平面と機能	46
1-1. ポラドゥンガル仏教石窟群	46
1-2. ケジャディア・ボープ仏教石窟群	48
1-3. コルヴィ仏教石窟群	49
1-4. ピンナヤガ仏教石窟群	53
第2節 西マールワール地方の仏教石窟の平面形式	54
2-1. ストゥーパ・チャイティヤ窟・ブツダ像祠堂	54
2-2. 集会ホール	57
2-3. 僧房窟	58
2-4. 集会ホールの成り立ちと僧房窟の平面形式	59
2-5. 伽藍構成について	59
2-6. 石窟群間における傾向の違い	60
おわりに	61

第II部 エローラ仏教石窟の柱と空間

第1章 エローラ仏教石窟の柱のデザインと配列	73
はじめに	73
第1節 エローラ仏教石窟の編年について	74

第2節 エローラ仏教石窟に見られる	
柱のデザイン・モチーフと柱の種類	・・・・・・ 75
第3節 各石窟の空間構成と柱の位置	・・・・・・ 76
おわりに	・・・・・・ 80
第2章 エローラ仏教石窟の柱のデザインの由来と空間	
はじめに	・・・・・・ 98
第1節 エローラ仏教石窟の柱のデザイン・モチーフの由来	・・・・・・ 98
1-1. 蓮華柱	・・・・・・ 98
1-2. 壺葉飾り柱	・・・・・・ 100
1-3. クッション柱	・・・・・・ 102
1-4. コンポジット柱の位置づけ	・・・・・・ 105
第2節 エローラ仏教石窟の柱のデザインと空間	・・・・・・ 105
2-1. 3種類の柱と空間	・・・・・・ 105
2-2. 蓮華柱・壺葉飾り柱とエローラ仏教石窟の空間	・・・・・・ 107
2-3. クッション柱とエローラ仏教石窟の空間	・・・・・・ 109
おわりに	・・・・・・ 112
結	・・・・・・ 120
写真	・・・・・・ 124
あとがき	・・・・・・ 148

インドの後期仏教石窟の形態に関する研究

図版一覧

第 I 部第 2 章

図 1 インド仏教石窟群分布

図 2 ダムナールの丘

(*Archaeological Survey of India, Reports by A. Cunningham, Vol. II, plate LXXVII* を基に作成したもの)

図 3 ダムナール仏教石窟南群石窟 (第 1 ~ 15 窟) 石窟平面と配置

(*Archaeological Survey of India, Reports by A. Cunningham, Vol. II, plate LXXVIII* と Fergusson, J., *History of Indian and Eastern Architecture*, New Delhi, 1876, 図 86, そして *Archaeological Survey of India, Annual Reports, 1905-'06, plate XLI* を基に, 筆者が 1992 年 3 月に訪れた際の現状を反映させて作成したもの)

図 4 「伽藍の基本構成」 (第 10 窟 - 第 11 窟 - 第 12 窟)

図 5 「伽藍の基本構成」 (第 6 窟 - 第 7 窟 - 第 9 窟)

第 I 部第 3 章

図 1 西マールワー地方の仏教石窟群

(Rajasthan Tourism 発行 Tourist Map of Rajasthan の一部を基に作成)

図 2 ポラドゥンガル仏教石窟の平面模式図

図 3 ケジャディア・ボープ仏教石窟の平面模式図

図 4 コルヴィ仏教石窟群南面石窟 (第 1 ~ 10 窟) 平面と配置

(*Archaeological Survey of India, Reports by A. Cunningham, Vol. II, plate LXXXIV* を基に作成したもの)

図 5 コルヴィ仏教石窟の平面模式図

- 図6 コルヴィ第26窟・第28窟平面実測図
図7 ピンナヤガ仏教石窟の平面模式図
図8 西マールワー地方の僧房窟の平面形式と集会ホールの成り立ち

第Ⅱ部第1章

- 図1 エローラ仏教石窟で見られる柱のデザイン

(aとd: Bergess, J., *Report on the Elura Cave Temples and the Brahmanical and Jaina Caves in Western India*, Archaeological Survey of Western India, Vol. V, Varanasi, rpt. 1971, plate XIII-3とplate XVIよりそれぞれ転載, b: Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, 1880, plate LXIIIとplate LVIIIよりそれぞれ転載)

- 図2 エローラ第2窟, 第3窟, 第4窟平面図

(Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, 1880, plate LVIIより転載)

- 図3 エローラ第5窟, 第5右翼窟平面図

(Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, 1880, plate LIXより転載)

- 図4 エローラ第6窟, 第9窟平面図

(Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, 1880, plate LIXより転載)

- 図5 エローラ第7窟, 第8窟平面図

(Bergess, J., *Report on the Elura Cave Temples and the Brahmanical and Jaina Caves in Western India*, Archaeological Survey of Western India, Vol. V, Varanasi, rpt. 1971, plate XIV, 1より転載)

- 図6 エローラ第10窟平面図

(Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, 1880, plate LXIIより転載)

図7 エローラ第11窟第1層・第2層・第3層平面図

(Bergess, J., *Report on the Elura Cave Temples and the Brahmanical and Jaina Caves in Western India*, Archaeological Survey of Western India, Vol. V, Varanasi, rpt. 1971, plate XV より転載)

図8 エローラ第12窟第1層平面図

(Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, 1880, plate LXIV より転載)

図9 エローラ第12窟第2層平面図

(Bergess, J., *Report on the Elura Cave Temples and the Brahmanical and Jaina Caves in Western India*, Archaeological Survey of Western India, Vol. V, Varanasi, rpt. 1971, plate XIV, 2 より転載)

図10 エローラ第12窟第3層平面図

(Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, 1880, plate LXV, 1 より転載)

図11 エローラ仏教石窟各窟の柱のデザインと位置

(佐藤宗太郎「エローラ石窟寺院」木耳社, 東京, 1977 掲載の実測平面図を下敷きとして, 筆者が作成)

第II部第2章

図1 「砂時計」パターン(クダー第6窟)

(Burgess, J., *Report on the Buddhist Cave Temples and Their Inscriptions*, Archaeological Survey of Western India, Vol. IV., reprint, Varanasi, 1975, plate VIII, 6, より転載)

図2 アマラーヴァティー・ストゥーパのレリーフ

(Burgess, J., *The Buddhist Stupas of Amaravati and Jaggayyapeta in the Krishna District, Madras Presidency, Durveyed in 1882; Archaeological Survey of India, New Imperial Series Vol. 6*, London: 1887, reprint, Varanasi: 1970, plate XXXVII より転載)

図3 アジャンター第1窟壁画からの一場面

(Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, 1880, plate XLIII
から転載)

図4 エローラ第29窟(ヒンドゥー教石窟)平面図

(Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, 1880, plate LXXIX
から転載)

なお、特に記した図版以外はすべて筆者自身が作成したものである。

インドの後期仏教石窟の形態に関する研究

写真一覧

第I部第2章

- 写真 I-2-1 ダムナール仏教石窟南群概観 第13窟付近から西
- 写真 I-2-2 ダムナール仏教石窟南群概観 第10窟から東
- 写真 I-2-3 ダルマナータ寺院
- 写真 I-2-4 ダムナール第7窟ファサード
- 写真 I-2-5 ダムナール第7窟ホール内部
- 写真 I-2-6 ダムナール第7窟祠堂内ストゥーパ
- 写真 I-2-7 ダムナール第7窟祠堂前の天井
- 写真 I-2-8 ダムナール第9窟ファサード
- 写真 I-2-9 ダムナール第9窟ホール内部
- 写真 I-2-10 ダムナール第11窟ファサード
- 写真 I-2-11 ダムナール第11窟ホール内部
- 写真 I-2-12 ダムナール第12窟列柱廊
- 写真 I-2-13 ダムナール第12窟ファサード
- 写真 I-2-14 ダムナール第12窟チャイティヤ窟ホール内部
- 写真 I-2-15 ダムナール第12窟列柱廊, 左廊列柱
- 写真 I-2-16 ダムナール第12窟列柱廊, 左廊・後廊ファサード
- 写真 I-2-17 ダムナール第12窟列柱廊, 左廊から右廊を見る
- 写真 I-2-18 ダムナール第12窟列柱廊左廊ブツダ像
- 写真 I-2-19 ダムナール第12窟列柱廊後廊ヴォールト状天井を有する房室
- 写真 I-2-20 ダムナール第12窟列柱廊右廊ブツダ像付ストゥーパ
- 写真 I-2-21 ダムナール第12窟列柱廊, 後廊東隅
- 写真 I-2-22 ダムナール第13窟ファサード

- 写真 I-2-23 ダムナール第13窟内部
写真 I-2-24 ダムナール第14窟中庭を上から見る
写真 I-2-25 ダムナール第14窟中庭入口
写真 I-2-26 ダムナール第14窟中庭内側
写真 I-2-27 ダムナール第14窟ブツダ像祠堂
写真 I-2-28 ダムナール第14窟繞道西壁ブツダ立像
写真 I-2-29 ダムナール第10・11・12窟ファサード

第I部第3章

- 写真 I-3-1 ポラドゥンガル仏教石窟群北面概観
写真 I-3-2 ポラドゥンガル PO-a ファサード
写真 I-3-3 ポラドゥンガル PO-a ホール内部
写真 I-3-4 ポラドゥンガル PO-f ホール内部
写真 I-3-5 ポラドゥンガル南面僧房窟ヴェランダ
写真 I-3-6 ケジャディア・ボープ仏教石窟群西面概観
写真 I-3-7 ケジャディア・ボープ KB-e 概観
写真 I-3-8 ケジャディア・ボープ KB-e 中庭奥壁石窟内部
写真 I-3-9 ケジャディア・ボープ KB-b 内部
写真 I-3-10 コルヴィ仏教石窟群南面概観
写真 I-3-11 コルヴィ第2窟丘の下から見る
写真 I-3-12 コルヴィ第2窟全体
写真 I-3-13 コルヴィ第2窟ポーチ・ブツダ像祠堂
写真 I-3-14 コルヴィ第5窟
写真 I-3-15 コルヴィ第9窟（ストゥーパ）・第10窟（奥）
写真 I-3-16 コルヴィ第4窟
写真 I-3-17 コルヴィ北面丸彫りストゥーパ
写真 I-3-18 コルヴィ第7窟ストゥーパ側面

- 写真 I-3-19 コルヴィ第7窟ストゥーパ正面
写真 I-3-20 コルヴィ第33窟
写真 I-3-21 コルヴィ第10窟ホール内部
写真 I-3-22 コルヴィ第15窟ファサード
写真 I-3-23 コルヴィ第15窟ホール内部
写真 I-3-24 コルヴィ第35窟玄関ロビーとベッド
写真 I-3-25 コルヴィ第45窟
写真 I-3-26 ビンナヤガ仏教石窟群概観 (BI-g 付近)
写真 I-3-27 ビンナヤガ仏教石窟群概観 (BI-g より西)
写真 I-3-28 ビンナヤガ BI-g ストゥーパ形祠堂
写真 I-3-29 ビンナヤガ BI-g ストゥーパ形祠堂ポーチ
写真 I-3-30 ビンナヤガ BI-g ストゥーパ形祠堂側面
写真 I-3-31 ビンナヤガ BI-b 東から見る
写真 I-3-32 ビンナヤガ BI-d 玄関ロビー内部
写真 I-3-33 ビンナヤガ BI-d 祠堂
写真 I-3-34 ビンナヤガ BI-a 4柱ホール
写真 I-3-35 ビンナヤガ BI-f 玄関ロビー内部
写真 I-3-36 ビンナヤガ BI-e 内部
写真 I-3-37 コルヴィ第2窟 (奥) と第3窟 (右)
写真 I-3-38 ビンナヤガ BI-a と BI-b

第II部第1章

- 写真 II-1-1 エローラ第2窟ホール (クッション柱)
写真 II-1-2 エローラ第2窟ブツダ像ギャラリー前面 (壺葉飾り柱)
写真 II-1-3 エローラ第3窟ホール (壺葉飾り柱)
写真 II-1-4 エローラ第5窟ファサード付柱 (蓮華柱)
写真 II-1-5 エローラ第5窟ホール (クッション柱)

- 写真 II-1-6 エローラ第5右翼窟列柱廊付柱（壺葉飾り柱）
- 写真 II-1-7 エローラ第6窟祠堂前室前面（壺葉飾り柱）
- 写真 II-1-8 エローラ第6窟祠堂前室右端ニッチ（クッション柱）
- 写真 II-1-9 エローラ第7窟ホール（蓮華柱「砂時計」パターン）
- 写真 II-1-10 エローラ第8窟ホール前面（壺葉飾り柱とコンポジット柱）
- 写真 II-1-11 エローラ第8窟祠堂域前面（クッション柱と壺葉飾り柱）
- 写真 II-1-12 エローラ第8窟ホール右手前方ブッダ像小祠堂（クッション柱）
- 写真 II-1-13 エローラ第9窟ファサード（コンポジット柱）
- 写真 II-1-14 エローラ第9窟内部奥壁付柱（クッション柱）
- 写真 II-1-15 エローラ第10窟前庭概観
- 写真 II-1-16 エローラ第10窟ヴェランダ
- 写真 II-1-17 エローラ第10窟ヴェランダ
（付柱：コンポジット柱，独立柱：壺葉飾り柱）
- 写真 II-1-18 エローラ第10窟ヴェランダ左端部
ブッダ像小祠堂前室前面（クッション柱）
- 写真 II-1-19 エローラ第10窟チャイティヤ窟内部
（手前：コンポジット柱，奥：蓮華柱）
- 写真 II-1-20 エローラ第11窟第3層ファサード（蓮華柱「砂時計」パターン）
- 写真 II-1-21 エローラ第12窟第1層
（手前：壺葉飾り柱，奥：単純方形柱）

第II部第2章

- 写真 II-2-1 ナーシク仏教石窟第3窟列柱ヴェランダ付柱
- 写真 II-2-2 ストゥーパ大理石スラブ（ナーガルジュナコンダ）
National Museum, New Delhi 所蔵
- 写真 II-2-3 ベドゥサー仏教石窟チャイティヤ窟
- 写真 II-2-4 ウダヤギリ第1窟

写真 II-2-5 欄楯レリーフ (マトゥラー) Lucknow State Museum 所蔵

写真 II-2-6 アジャンター第2窟ヴェランダ

写真 II-2-7 Kodumbalur, Muchkundeswarar Temple 外壁付柱
(南インドのヒンドゥー教寺院の一例)

なお、以上の写真はすべて筆者自身により撮影されたものである。

インドの後期仏教石窟の形態に関する研究

序

序-1 研究対象

本論文はインドの後期仏教石窟の形態に関する研究であるが、最初に、石窟の形態を研究対象とする理由についてを挙げておきたい。

石窟は、インドの宗教建築の歴史上、その初期段階を飾る重要な要素であり、インドでは 3c. B.C. から A.D. 10c. 以降までの長きにわたり成立し続け、発展した。したがって石窟という形式がインドの宗教建築に必要な性質を満たしていたと考えられる。そしてインドの構築された石造・レンガ造寺院建築は一般に彫塑的である。それは平面図にも表れており、祠堂であるガルバグリハ *garbhagriha* の壁体が、前殿であるマンダパ *mandapa* の壁体に較べて非常に厚く、まるでガルバグリハは岩山に彫り込まれた部屋、すなわち石窟の如くである。つまり構築された寺院建築と石窟との形態上のアナロジーが考えられるのである。

また石窟では、掘削されることによって成り立つ性質上、構造的な問題から解放される部分が多く、石窟の空間において形づくられた柱や梁をはじめとする構造的要素が空間構成上の指向をストレートに表現している可能性が高い。したがって石窟を検討することによって、同等の空間を有すると考えられる構築的な石造・レンガ造寺院よりも、純粋な形でインドの宗教建築の特質を捉えることが可能と思われる。

さらに、現在残るインドの石造（レンガ造）の宗教建築の最も典型的なもので、シカラ *śikhara* と呼ばれる塔を持つことで特徴づけられているヒンドゥー寺院（特にナーガラ *Nāgara* 様式のもの）は建物を一つの彫刻のように造り上げるものであり、その建設技術は石窟に使われたものとほとんど同じものと見なされる¹⁾。また、エローラのカイラサナータ寺院に代表されるような、本来なら構築されるべき形態を岩山から丸ごと彫り出してしまふ岩石寺院²⁾もあるが、この際建設に使われる技術は彫刻に関わる技術のみなのである。もちろんヒンドゥー寺院の平面計画自体に関しては寺院の建築理論書³⁾が存在する例もあり、そのような理論書がその寺院の形態を決定する

際の重要な要素であったとされる点についての検討は必要であろう。しかし実際の寺院建築の空間的特質について考えるならば、このような建築理論書の文献研究からの解釈だけではなく、その石（またはレンガ）を材料とし、それを積み上げ、彫刻的に造り上げられる建築の持つ性質から捉えた解釈もまた重要であると考えられるのである⁴¹。

次に、インドの石窟のうち、後期仏教石窟を取り扱う理由について言及する。

神像を収めたガルバグリハが最重要なものとして位置づけられるインドのヒンドゥー教寺院建築が急速に発展し始めたのが 5c. 以降と考えられているが、ほぼ時を同じくして、ガルバグリハに相当するブツダ像祠堂を含んだ後期仏教石窟が成立している。つまりヒンドゥー教建築と後期仏教石窟は同じ概念の下で発展したと予想される。そして A.D. 5c. 以降の後期仏教石窟に関しては、A.D. 2c. 頃とされるブツダ像の出現以来の図像表現の発展が石窟芸術に影響を及ぼすようになったため、図像表現に関する研究、つまり彫像や壁画そのものに対して注目した研究はなされているが、その図像を配した空間の構成上の特徴についての評価は必ずしも進んでいない。また、2c. A.D. 以前の前期の仏教石窟の最大の特徴ともいえる木造建築細部意匠を空間のイメージとして写していた石窟空間の表現が後期仏教石窟においては影を潜めたことも起因して、建築側からの考察の欠如が顕著となっているのである。

序-2 本論文の目的と構成

後期仏教石窟を含む主要な石窟群には、①西デッカ地方ボンベイ近郊のコンディヴテ Kondivte, カンヘリー Kanheri, ②同じく西デッカ地方ではあるが内陸の、主にオーランガバード市近郊のアジャンター Ajantā, エローラ Ellora, オーランガバード Aurangabad, ナーシク Nāsik, ガトートカッチャ Ghatotkacha, そして③西マールワー地方のダムナール Dhamnar, コルヴィ Kolvi, ビンナヤガ Binnayaga がある。バグ Bagh の仏教石窟群は西マールワー地方の南端、ちょうど②と③の石窟群の間に位置している。しかしながら、先に挙げたように、後期仏教石窟のみでもあまりにも数が多く、網羅的に扱うことは現時点では不可能である。

そこで本論文の目的を次に挙げる2つに設定し、それぞれの目的別につくられた第I部、第II部の2つの部分で本論文が構成されている。

目的の一つ目は、インドの後期仏教石窟の全体像を把握するためには不可欠と考えられながら従来ほとんど研究されておらず、その実体さえ必ずしも正確に記述されたことのない地方に属する後期仏教石窟について調査・研究し、その形態的特徴について明らかにすることである。具体的には、先に挙げた石窟群のうち③の西マールワー地方の仏教石窟群の形態について取り上げ、その平面や配置について現地調査によって得られた資料を主に用いて明らかにし、従来典型なるものとして扱われた①や②に挙げられる西デッカン地方の仏教石窟との比較を通して検討して、インド仏教石窟全体における位置づけることである。そして本論文の第I部にまとめられている。

目的の2つ目は、インドの後期仏教石窟の形態を評価するための指標の一つを提示することにある。インドの後期仏教石窟の特徴の一つには彫像崇拜導入による空間の多様化が挙げられるが、石窟内で表現される柱のデザインも同じく多様化した。本論文では、その多様化した空間と柱のデザインとの相関性に着目し、石窟の空間を説明する。その対象としては、インド西デッカン地方の最後の仏教石窟の一つであるエローラ仏教石窟群を扱い、本論文の第II部としてまとめられている。多くの後期仏教石窟の中でエローラ仏教石窟群を取り上げた理由には、エローラ仏教石窟に含まれる十二を数える石窟が様々な平面形を有しているにもかかわらず、柱のデザイン・モチーフの配列については空間構成上節度を保ってなされていることがまず挙げられる。もう一つの理由は、仏教のみならず、ヒンドゥー教・ジャイナ教というインドの3大宗教すべての石窟がエローラでは見られることが挙げられ、今後研究対象を構築的な寺院が主であるヒンドゥー教・ジャイナ教寺院建築へ広げていく際に、その足掛かりとなることが期待されたからである。エローラ仏教石窟群近くには有名なアジャンター・オーランガバード仏教石窟群を始めとする後期仏教石窟も、さらに第I部の対象である西マールワー地方の仏教石窟群も含めて、同じ評価指標に基づいてそれぞれの石窟の空間を検討することが可能であり、かつ必要でもあるが、以上の理由からエローラ仏教石窟群をその研究の最初の対象として選択し、本論文第II部で扱った次第である。

以上、それぞれ目的を有した2つの部分について述べた。したがって本論文が現時点では独立した2つの論文によって成り立っているといっても過言ではない。なぜなら、同じインド後期仏教石窟の範疇に含まれるものでも、研究がほとんどなされていないものを扱う前者と、これまで建築や空間について評価したものがほとんど無いながらも美術学上および図像学上においては比較的研究が進み、その歴史的評価の進んだ後者とをまとめて論ずることは現時点では不可能だからである。しかしインドの宗教建築の形態の歴史を捉える上において重要な対象と見なされる後期仏教石窟を対象にしており、後期仏教石窟を通してインドの宗教建築の特質を検討するという全体の目的からはずれたものではない。

以下、その第I、II部の内容について記述する。

第I部は西マールワー地方に分布する仏教石窟群を取り上げ、現地調査によって得られた資料を主に扱い、主に西デッカン地方の仏教石窟との比較を交えつつ、それらの平面や伽藍構成を中心に形態的特徴について、3章にわたって論じている。

まず第1章では、西マールワー地方の仏教石窟の成立に関わったと考えられる、その地方の政治や宗教の状況について検討した。この地方の仏教石窟に直接関わる銘文は5-6c.に比定されるダムナールで発見された粘土製印章ただ一つであるため、その地方で発見された仏教に関係した奉献銘文および7c.の玄奘の記録を中心に検討した。これらの仏教石窟のパトロンとして考えられる政治勢力については、この地方に近い場所で仏教を後援したシャカ族カールダマカ家系とマイトラカ朝の2つを取り上げた。この地方の仏教に関しては、5c.末のマンガソールで発見された銘から部派仏教の大衆部に属する一学派の活動、7c.前半の玄奘の記述からは同じく部派仏教に属する上座部仏教の活動が考えられた。加えて、西マールワー地方の仏教石窟の成立年代について従来なされてきた記述を中心に整理し、20c.初頭以前の説では7-8c.とするのが大方の見方であったが、最近の説では4c.のグプタ期以降、特に西デッカン地方のアジャンターの後期石窟とほぼ同じ5-6c.の成立と見られていることを確認した。

第2章では西マールワー地方の仏教石窟の代表的な石窟群であるダムナール仏教石窟群の第7, 9, 11, 12, 13, 14窟の平面および配置に関して検討した。これらの石窟のそれぞれは、従来のインド仏教石窟の歴史の中で典型として扱われている西

デッカン地方のものとの比較すると、平面形態が特異である。ところが第7、9、11、12窟チャイティヤ窟部のファサードを構成する列柱ヴェランダの類似、そして第7、11窟とのホール空間に関する類似、そして第9窟と第12窟チャイティヤ窟部分におけるストゥーパを祠ったホール空間の類似が見られ、第6窟と第10窟が共に僧房として機能する点にも着目すれば、〔第6窟-第7窟ホール部分-第9窟〕の組合せと〔第10窟-第11窟-第12窟チャイティヤ窟部分〕の組合せに関して言えばほぼ同じであることが指摘された。そしてその組合せは〔僧房-集会ホール-チャイティヤ窟〕という仏教伽藍としての機能上一定のまとまりとして捉えられるものであり、ダムナール石窟群における「伽藍の基本構成」の存在が考えられた。

第3章では西マールワー地方に属するダムナール石窟群以外の4つの石窟群（ボラドゥンガル、ケジャディア・ポーブ、コルヴィ、ピンナヤガ各石窟群）を取り上げ、チャイティヤ窟および祠堂、集会ホール、僧房窟について、この地方で標準的な平面形式を抽出した。まずチャイティヤ窟に関しては、奥端部に配したストゥーパ位置の前後で空間表現が異なっている点が指摘された。ストゥーパ前方の空間では円筒ヴォールト状天井に垂木状のリブや柱、アーチ梁状の表現等の建築構造的細部が表現されているのに対して、ストゥーパ周囲の空間は仕上げのない不完全な半ドーム状であるのみであり、積極的な空間表現が見られないのである。そこからこの地方のチャイティヤ窟ではストゥーパを空間内に収めた建築的原形を持たなかったのではないかと推論された。また丸彫りストゥーパの方形基壇にブッダ像祠堂を刻み出したものの存在もこの地方の石窟群で見られる特徴の一つである。特にコルヴィの例はストゥーパの中心部にブッダ像が置かれるように祠堂が彫られており、仏舎利に相当するものとしてブッダ像が位置づけられていた可能性が指摘された。この地方の石窟群の集会ホールには、柱を全く持たないもの、4本の柱を有するもの（以下4柱ホール）、そして8または10本の柱を有する3廊形式の横長の列柱ホール（以下多柱ホール）の3タイプが確認された。4柱ホールと多柱ホールでは前廊とその奥に展開する柱のある空間との間には天井表現に変化が与えられており、前列の柱を境界として空間の性質の違いが予想された。この地方の僧房窟の多くは、西デッカン地方で見られるような大ホールと多くの房室を有したヴィハーラ窟形式のものにはほど遠い、1～3個の小さ

な部屋の組合せで成り立つ小規模なものである。その最も基本的な形式は玄関ロビーと房室の組合せであるが、最も注目すべき僧房窟の平面形式は玄関ロビーと2本の柱のある入口を有した矩形平面の部屋（以下2柱室）、房室の3つの部屋で構成されたものである。そして玄関ロビーと2柱室の組合せが4柱ホールや多柱ホールという集会ホールの成り立ちと関係していることが指摘された。

第II部では2章にわたり、西デッカ地方の後期仏教石窟の代表的なものであるエローラ仏教石窟（第1～12窟）を取り上げ、後期仏教石窟になり多様化した柱のデザイン・モチーフと空間との相関性をに着目し、その形態について検討した。

第1章では、エローラ仏教石窟で見られる柱をモチーフに着目して、蓮華を象った円形装飾を柱頭と柱身にモチーフとして有する柱（以下「蓮華柱」）、葉飾り装飾を付随した壺を柱頭のモチーフとして有する柱（以下「壺葉飾り柱」）、クッション状ものを柱頭のモチーフとして有する柱（以下「クッション柱」）、そして蓮華の円形装飾を柱身に、葉飾りを付随した壺を柱頭のモチーフに有した、いわば蓮華柱と壺葉飾り柱を組合せた柱（以下「コンポジット柱」）の4種類に分類し、第1～12窟の各平面におけるそれらの柱の配列を整理し、その傾向について検討している。蓮華柱・壺葉飾り柱・コンポジット柱はファサード・副ホール前面・祠堂前室前面等の空間の内外を仕切る位置に使われ、一方クッション柱は祠堂・副祠堂の前面やニッチ等、像彫刻の前面を飾る位置に使われる傾向にあることが確認された。

第2章では、蓮華柱、壺葉飾り柱、クッション柱、コンポジット柱のデザイン・モチーフの由来と空間構成との相関性についての考察を試みた。蓮華柱のデザインの由来は古代以来ストゥーパを始めとする聖なるものを囲む欄楯に求められた。壺葉飾り柱のデザインの由来はある空間の入口部分に置かれた吉兆の壺であった。クッション柱のデザインの由来はインドの木造建築で世俗で使われていた柱、特に王族などの高貴な人物のための宮殿建築の柱にあることが指摘された。コンポジット柱の由来は蓮華柱のデザインと壺葉飾り柱の単純な組合せに求められた。そして空間構成上、蓮華柱は聖俗の空間の境界を示す位置、壺葉飾り柱は内部空間に吉兆を呼び込む位置、つまり入口位置に配されていた。クッション柱はブッダ像を始めとする像彫刻と関わる祠堂やニッチの前面を飾るポーチとしての位置に配される傾向にあるが、それはブッ

ダ像を含む祠堂に宮殿建築の表現を適用したためと推論した。

結では以上の第Ⅰ、Ⅱ部の成果を総括し、今後の研究の展望を示した。第Ⅰ部では西マールワー地方の仏教石窟の形態的特徴を把握し、インド仏教石窟の典型の一つとして位置づけた。また第Ⅱ部では柱のデザインと空間との相関性を、エローラ仏教石窟を対象として、指摘した。今後の展望では、西北インドや中国を含めた他地域の仏教石窟と西マールワー地方の仏教石窟との関係を検討することにより、インドー中国間の仏教石窟文化の交流を明らかにする可能性を示した。また第Ⅱ部で試みた柱のデザインと空間との関係を読み解く作業について、エローラと同地域に成立したアジャンター・オーランガバードを始めとするその他の仏教石窟について検討する必要性を述べた。

註

1) 小寺武久「パーミヤンの石窟寺院と石窟の空間形態に関する考察」『建築史研究』1972,12., p.20.

2) Monolithic temple のこと。このような例がインドでは数例見られる。

3) 代表的なものに「ヴァーストゥ・シャーストラ (Vastu Sastra)」がある。ただしヒンドゥー寺院研究におけるこのような文献研究の有効性については、実際の寺院とのギャップが大きい場合が報告されるなど、議論が分かれるところであるという。小倉泰「南インドのヒンドゥー寺院の象徴性 (一) - Padma Samhita における寺院建築の過程と儀礼」『東洋文化研究所紀要』第百十一冊、東洋文化研究所、1990.2., p.136. 注 5.

4) 近代以降のインド宗教建築の研究の流れとして、建築理論書に基づく文献研究と実際の遺跡探検をもととするものの大きく2つが見られる。Ram Raz (著作 *Essay on the Architecture of the Hindus*, London, 1834) は前者の、そして James Fergusson (最初の著作は *Rock Cut Temples of India*, London, 1845) は後者の、それぞれ先駆者である。インドの宗教建築研究の近代以降の流れについては Chandra, Pramod, 'The Study of Indian Temple Architecture' Chandra, Pramod ed., *Studies in Indian Temple Architecture*, New Delhi, 1975, pp.1-39. に簡潔にまとめられている。

第 I 部

西マールワー地方の仏教石窟の形態

第1章

西マールワー地方の仏教石窟成立の歴史的背景

はじめに

現在に至っても、この仏教石窟に直接関わるその後援者や宗教の情報はほとんどなく、西マールワー地方の仏教石窟の形態を考える上において基礎になるとと思われる歴史的な背景を正確に把握することは非常に困難な状況に置かれている。本章ではそれらの成立に関わった社会的状況を少しでも把握するために、主に西マールワー地方周囲で発見された仏教に関わる銘や玄奘の記録を基に検討した。また第4節では、従来の文献から得られる、成立年代に関する見方について整理した。

第1節 文献的史料

現在西マールワー地方の仏教石窟群で直接発見された銘的史料は、ダムナール仏教石窟群で発見された "Chandanagiri-mahavihara" という銘の刻まれた粘土製印章が一つ報告されているのみである¹⁾。この銘の Chandanagiri とは現在ダムナール石窟群のある丘のすぐ近くにあるチャンドワサ Chandwasa 村と関連した名称と見られ²⁾、また mahavihara は大仏教僧院を示しているので、Chandanagiri-mahavihara とはダムナール仏教石窟群のことと見なしてよいであろう。そして、年代を示すような内容を含んでいないけれども、古文書学的な立場からの分析によって、その銘に使われた文字は 5c. または 6c. のものとされている³⁾。したがって現段階では、この粘土製印章をこの仏教石窟が 5～6c. に既に成立し、そこで仏教活動がなされていたと判断する史料として考えることができる。

しかしながら、この地方の仏教石窟群がいつ成立したのかを直接示すような文献的史料は全く見つからない。そのため、この地方に関係した歴史的事実を示す幾つかの銘文を基に、この地方の政治、宗教、他地域との交流の状況を検討することによ

って、この地方の仏教石窟成立に関わる歴史的背景を把握することが必要と考えられるのである。

しかしながら、この地方の歴史に触れた研究⁴⁾の中には、具体的に仏教石窟の成立に関わった政治や宗教の状況について明確な回答を与えたものは全くと言ってよいほど無い。そのため、実際に遺る仏教遺跡のみが現状の最も有力な史料といっても過言ではない。

第2節 西マールワー地方と政治勢力

この西マールワー地方は古くはアヴァンティ Avanti 呼ばれた地域であった。その政治・経済の中心都市ウッジャイン Ujjain は少なくとも紀元前 4 世紀前後に南インドを除くインド亜大陸のほとんどを治めていたと考えられるマウリヤ朝の首都である東インド・パータリプトラ Pataliputra (現ビハール Bihar 州の州都パトナ郊外) と西インド現グジャラート Gujarat 州カーティアール Kathiawar 半島のアラビア海に面した諸港とを結ぶ東西の大幹線道路の中継地であり、また南のデカン地方ともここを起点として繋がるという、交通の要所であった。したがってこのウッジャインを獲得することが、北インドで統一政権を達成しようとする際の条件でもあったようである。そのため多くの王朝がこの町と関わり、そしてこの西マールワー地方と関わってきた。しかし、支配した王朝が短い周期で頻繁に交替するというこの地方の特徴は、この地で栄えた文化の素性を曖昧にし、把握し難くしたのも、また事実である。したがって、ここでは仏教石窟の成立と関係した政治勢力について比定することも、論述することも、本論文の範囲を超えた大問題として遺っているのである。以上のこともあり、ここでは西マールワー地方の仏教芸術活動と関わりと考える幾つかの王朝の中から 2 つを列挙するに留める。

まずシャカ族 The Sakas⁵⁾ のカールダマカ家系 Kardamakas⁶⁾ が挙げられる。西マールワー地方の西隣のグジャラート Gujarat 州東部のデヴニモリ Devnimori のストゥーパ⁷⁾ で発見された舍利容器に見られる銘文には、マハークシャトラパ Mahakshatrapa の Rudrasena に比定される名が見られる⁸⁾。この Rudrasena が Rudrasena I 世 (3c. 初頃)

かⅡ世（3c.後半）かⅢ世（4c.末）⁹⁾かは特定されていない。また同じストゥーパからシャカ族の Visvasena（3c.末～4c.初）のコインが発見されている¹⁰⁾。このことから、少なくともシャカ族が、3～5c.において、西マールワー地方に極めて近い場所での仏教活動を後援していたと判断できる。また、ほぼ同じ時代、このカールダマカ家系の女性がイクシュヴァーク王朝 Ikshvaku へ嫁し¹¹⁾、アーンドラ・プラデーシュ州ナーガルジュナコンダ Nagarjunakonda の一大仏教組織を後援したことを伝える銘が多く発見されているなど、このシャカ族と仏教芸術活動との関わりを示す事実が多く伝えられている。

次に、グジャラート州のカーティアール半島 Valabhi を都としたマイトラカ朝 Mairakas が考えられる。この王朝はグプタ王朝の家臣が5c.末なつてに独立したものであるが、Valabhi の仏教僧院に対して、5～8c.の非常に多くの奉獻板を残している。これらの僧院は部派仏教¹²⁾に関わるものとされるが、残念ながら、一つの僧院建築も遺っていない。ただし、部派仏教に関わるとされる点は興味深く、西マールワー地方の仏教石窟が部派仏教に関わる可能性が高いことを考慮すれば、この王朝との関係は重要である。そしてこのマイトラカ王朝は西マールワー地方を収めた時期もあるという¹³⁾。さらには、このマイトラカ王朝の創始者である Bhatarka（5c.末）のコインが、先に挙げたデヴニモリ・ストゥーパから見つかっている。

以上2つの政治勢力に現在注目しているが、仏教を擁護した主要な王朝だけでも、4c.のグプタ朝から7c.のハルシャ・ヴァルダナ王のヴァルダナ朝に至るまで、歴史上この地方に絡んだものとしてが挙げられる。ただしいずれも西マールワー地方の仏教石窟との関係についてはは全くといってよいほど、不明である。更に検討を要する部分である。

第3節 西マールワー地方と仏教

西マールワー地方の仏教石窟群と直接関わった仏教の性質を直接説明する銘文等の史料は全くない。したがってその仏教の性質は石窟に表れている遺跡の現状から推測する他ない。

この地方の仏教石窟群で見られる特徴のうち、宗教の性質に関わるものとしては、ストゥーパ表現が氾濫している点、そしてボディサットヴァ及びシャクティとしての女性像の表現が皆無である点、そして崇拜対象を含まない小さな僧房窟が非常に多く見つかる点が挙げられる。また、独立した僧房が非常に多く見られる点も、その地で行われていた宗教活動を類推する基準として挙げられよう。

第2章以降で具体的に扱うダムナール及びポラドゥンガル、そしてケジャディア・ボープの仏教石窟群ではストゥーパが崇拜対象として中心的位置を保持していると言っても過言ではない。コルヴィヤビンナヤガの仏教石窟群ではストゥーパをデザイン・モチーフとして扱う傾向があるが、これらの場合もストゥーパの形が有する仏教上の記念性を重視している表現と考えることができよう。すなわちストゥーパを重要視している点から、そしてボディサットヴァ像および女性像が全く発見されない点から、大乘仏教に関わるものというよりは、伝統的な部派仏教に関わるものであると考えられてきた¹⁴⁾。ここでは、この地方と周囲で発見された仏教に関わる銘的資料および7c.の玄奘の記録から、この地方の仏教に関して触れる。

3-1. 西マールワール地方で発見された仏教に関わる銘

現在知られる限りにおいて、この地方で発見された5, 6c.の仏教に関わる銘文(特に奉献銘文)は以下の4つである。

① 411-12年サーンチー Sanchi 銘¹⁵⁾

グプタ帝国チャンドラグプタⅡの一陸軍官僚が、イーシュヴァラヴァーシャカ Isvaravasaka という名の村と金貨を、カーカナードボータ Kakanadabhota (サーンチーの当時の呼び名)の大仏教修道院の仏教サンガへ奉納したことを示している。

② 417-18年ビハール・コトラ Bihar Kotra 銘¹⁶⁾

この銘は、当時西マールワール地方の支配を行っていたオーリカラ朝 Aulikaras の王ナラヴァルマン Naravarman の治世において四方サンガに一つの貯水池が奉納されたことを伝えている。ただし、仏教の性質を示すような情報は含まれていない。また仏教石窟に関係した事柄は全く記されていない。

③ 450-51年サーンチー銘¹⁷⁾

この銘は、カーカナードボータ、つまりサーンチーの僧院に対して、比丘達の食事

のためと、宝物庫 ratnagriha および大ストゥーパ繞道に置かれた4体のブツ像に置かれるランプを維持する費用として金貨を奉納したことを記している。サーンチーの大ストゥーパブツ像がその銘の時代には既に付加され、崇拝されていた事実を示している。

④ 467-68年マンダソール Mandasor 銘¹⁸⁾

これはマンダソールで発見された最初の仏教に関わる銘であるとされる¹⁹⁾。この銘は、Dattabhataという人物が、おそらくマンダソール近くにあったであろう Lokottara-Vihara に対して、ストゥーパ、井戸、水飲み小屋、そして庭もしくは僧院を建設し、寄進したという内容のものである。Dattabhataは Govindagupta の軍を率いた将軍 Vayurakshita の息子である。この Lokottara という僧院名はたぶん Lokottaravadin sect、つまり部派仏教の一学派にちなんだものと考えられている²⁰⁾。Lokottaravadin sect は大衆部 Mahasanghika school の一派であり、その一派のテキストである Mahavastu の記述にはチャイティヤ崇拝の優位が説かれ、Caityakas と呼んでも差し支えないとある。つまり、Lokottaravadin sect と Caityakas は同一視できるとする意見が示されるのである²¹⁾。その Caityakas も大衆部から派生した一派で、アーンドラ・プラデーシュ Andhra Pradesh 州の、大ストゥーパで有名なアマラーヴァティー Amaravati やナーガルジュナコンダ Nagarjunakonda の大仏教遺跡と関係が深い。またこの奉獻銘の奉納物の中でストゥーパが最初に言及されていることは、ストゥーパ優位を示すものといえるだろう。したがって5世紀後半のこの地方には部派仏教の僧院が成立し、ストゥーパを祠る活動がなされていた可能性が、この銘からは考えられるのである。そして西マールワー地方でのストゥーパ表現の優位な点はこの宗派との関係において説明される可能性も考えられるのである。

3-2. 玄奘の訪れた時代の西マールワー地方の仏教

5～7c.の時代、この地方と中国との交流が盛んに行われていたようである。多くの仏教学者がこの地方から、仏教の伝承を学びに中国を訪れているという²²⁾。そして、よく知られるように、7c.前半玄奘は中国からインドを訪問している。その旅程の中で、西マールワー地方にも訪れている。彼の時代のこの地方の仏教について、この旅行に関する記述²³⁾から取り挙げてみよう。

まず Malapo の国に関して伝えている²⁴⁾。そこでは部派仏教の Sammitiyas という宗派の僧院が数千も見られ、2万人を越える信者がいたという。Sammitiyas という宗派は、同じ部派仏教ではあっても、先の Lokottaravadin sect とは異なり、上座部仏教の一つである。この宗派は、Avanti すなわち西マールワー地方の有名な僧 Mahakaccayana が起こしたとされている²⁵⁾。この地方にはゆかりの深い宗派であったようである。ただし、この Malapo は Malava すなわち Malwa 地方と関係した名であるとするものもあったが、実際には現在のマールワー地方と直接関係のない地域であり、今のグジャラート Gujarat 州の東の地域、つまりここで議論している西マールワー地方の直ぐ西の地域に比定されている。しかしながら、当時の交通網から考えれば全く関係ない地域ではなく、当時の西マールワー地方の仏教の状況をつかむ参考となるであろう。

その Sammitiyas という宗派は、玄奘の時代、西インドの当たるグジャラート、シンド地方で勢力を持っていたようである²⁶⁾。

玄奘は西マールワー地方の都ウヅジャイン Ujjain にも訪れ、その地における当時の仏教の衰退状況について伝えている²⁷⁾。そこでは「数十の仏教僧院があったが、大部分は廃墟であり、3～4個のみ活動している。小乗と大乘の両方の仏教の信者が300人以上いた」という。

なお、玄奘の時代、アフガニスタンのバーミヤン Bammiyan では、Lokottaravadin sect が行われていたという²⁸⁾。前出のマンダソールから発見された銘は、この宗派の僧院が 5c. 末にマンダソール近くにあったことを伝えているが、これは西マールワー地方とバーミヤンとの関わりを示すものかも知れない。

第4節 従来の記述に見られる西マールワー地方の仏教石窟の年代

これらの西マールワー地方の仏教石窟と直接関係した成立年代の決定に役立つような銘文等の歴史的史料は、先に触れたように、現在ただ一つである。それはダムナール仏教石窟の保存作業の間に見つかったとされる、'Chandanagiri - mahavihara' という銘を刻んだ粘土製印章である²⁹⁾。古文書学的立場から判断して、5～6c. の文字で

あるという。ただし、この粘土製印章の、はっきりとした年代の示されない銘のみで、これらの仏教石窟の年代を確定するのは危険である。ここでは、従来この地方の仏教石窟について触れた記述内で、どの様に年代づけがなされているか、一通り整理してみたい。

まず、A. Cunningham氏は約 A.D.500 - 700A.D.³⁰⁾、J. Fergusson氏は約 A.D.600 から A.D.700の間³¹⁾、そしてJ. Burgess氏は 8c. より以前のものではないとしている³²⁾。この3人の記述の年代に関する部分は、彼らの時代においてインド建築全体においても編年的研究があまり進んでいなかったこともあり、今ではほとんど参考にはならない。特に後者2人は仏教石窟の最後とする消去法的に位置づけたのみで、積極的な根拠に欠けている。

H. Cousens氏はダムナールの仏教石窟は同じ丘に刻み出された丸彫り単一石寺院であるダルマナータ寺院よりは前の時代に開窟されたと考えたいとしている。その理由としてあげられているのが、もし丘の南側にこれらの仏教石窟が無かったならば、ダルマナータ寺院の入口に通ずる通路はもっと短いものとなっていただろうと推測されるということである。以上の理由からこれらの仏教石窟の年代を 8c. 中葉と考えた³³⁾。なお、ダルマナータ寺院の年代に関しては、そのプランはマハーラシュトラ州エローラ石窟群の同じ丸彫り単一石寺院である第16窟カイラーサ寺院をモデルとしていると強く信じ、カイラーサ寺院より後のものだと考えている。そして当のカイラーサ寺院に対する年代を 8c. の中葉から第4四半世紀のものとして考え、ダルマナータ寺院の年代に関しては 800年 A.D. に位置づけている³⁴⁾。ダルマナータ寺院の装飾は、仏教石窟に見られるものより装飾的なものであり、前者を時代的に先に位置づけることには無理があると思われる。つまり、ダムナール仏教石窟の成立は、絶対年代を確定することはできなくとも、ダルマナータ寺院より先行するということは少なくとも言えそうである。

D. Mitra女史は、ダムナールで普遍のストゥーパ形に言及し、そのはっきりとしたモールディングが施されたベースや同様にモールディングが施された背の高い円筒形ドラムといったその発達した形態はグプタ期に属するものと判断している³⁵⁾。しかしながら彼女は僧房として機能したと考えられる単純な房室の存在を考えて、部分的

にはより早期の時代に属する可能性もあるとしている。一方、O.C. Kail氏はヒナヤーナに属する仏教石窟の最後のものとする以外、年代について言及していない。ただし彼の著書に掲載された仏教窟群の年代に関する表ではダムナール仏教石窟は大体A.D. 100 - 400の所に示されている³⁶⁾。またWalter. M. Spink氏はダムナールやコルヴィの仏教石窟の年代をバーク仏教石窟の盛期（A.D.460～480年）とほぼ同時代のものとする³⁷⁾。彼は根拠として、ブツダ像付丸彫りストゥーパの存在、また主なるブツダ像の脇侍として表される副次的なブツダ像やプラランバパーダーサナpralambapadasanaのブツダ像の存在を挙げており、バーク仏教石窟が栄えていたのと同時期に開窟が始められたとする³⁸⁾。G. Michell氏はグプタ期以降のものとした上で、4 - 5c.とする³⁹⁾が、全く根拠を示さない。C. Tadgell氏はダムナールの年代については直接言及していないが、コルヴィ・ピンナヤガにて見られる装飾的なストゥーパについては決して5c.よりは早くないものとしている⁴⁰⁾。以上のようにストゥーパの形から判断するもの、そしてSpink氏のように、主に図像学的な視点から判断するものと、大きく2つの年代に対する判断が示されている。

コルヴィ石窟を取り上げた最初の人物であるE. Impey氏はコルヴィ仏教石窟がダムナール仏教石窟より時代的に先行していると捉え、3または4c.としている⁴¹⁾。コルヴィ仏教石窟がダムナール仏教石窟より先だとする理由は、後者では中心的石窟としてのチャイティヤ窟が見られないこと、またダムナール第12窟のような「ヴィハラ窟」が全くないことを挙げている。ただし彼の年代設定の根拠は今では適切ではない。彼は、コルヴィ仏教石窟の最大の特徴である露天の丸彫りストゥーパ形祠堂がその内部にブツダ像を祠っており、それがサーンチー大ストゥーパの後補の部分である東西南北にブツダ像を置く形式を原形としていると考えている点については誤りであるということを経験において断定することはできない。東マールワール地方のサーンチーの大ストゥーパは紀元前から最も著名なストゥーパであり、西マールワール地方の仏教建築活動に影響があったと考えてもおかしくないからである。またこれら西マールワールの仏教石窟を解釈するにあたり、最も重要な仏教遺跡である。しかしそのコルヴィの露天のストゥーパ形祠堂が同じコルヴィの第7窟のように石窟内に置かれるようになり、更にダムナールで見られる明かり取りの機能を持たせた背の高いヴェラ

ンダを備えた長堂形式のチャイティヤ窟へと改良が加えられ、その後アジャンター等で見られるデザインされた明かり取りであるチャイティヤ・アーチをファサードに有するチャイティヤ窟へと発展した、と彼が考えている点については、当時 19c. 半ばの研究状況においては無理からぬことではあるが、現在一般に受け入れられているチャイティヤ窟の発展の歴史とは相容れないものである⁴²⁾。Mitra 女史は、ドラムにブツダ像やストゥーパのレリーフを含むニッチを有するこの地のストゥーパに関しては、6c. よりは早くないとしている⁴³⁾。

ケジャリア・ボープ仏教石窟に関しては、M.B. Garde 氏はその年代をダムナール仏教石窟とほぼ同じとした上で、7c. としている⁴⁴⁾。

ポラドゥンガル仏教石窟に関して、C.E. Luard 氏は、その地のチャイティヤ窟に対してのみ、外観から判断して、7c. に比定している⁴⁵⁾。ただし、その判断理由については具体的に示されていない。

以上のように、4-5c. と捉える説と 7c. 以降と捉える説の大きく分けて 2 つの説が今まで為されてきていることになるが、傾向として、20c. 初頭以前の説では 7, 8c. と考えられることが多かったが、最近の説では 5~6c. と見られているようである。ただし、これらの西マールワー地方の仏教石窟がどのような成立の背景を有しているのかについて歴史的に考察したものはほとんど無く、新たな歴史的資料が発見されることの必要性もあるなど、再考する余地は大いに残されている。

註

1) *Indian Archaeology: A Review*, 1960-'61, p.60.

2) Jain, K.C., *Malwa through the Ages*, Delhi, 1972, p.397.

3) *Indian Archaeology: A Review*, 1960-'61, p.60.

4) Sircar, D.C., *Ancient Malwa and the Vikramaditya Tradition*, Delhi, 1969. これはマールワー地方の 6c.B.C. ~ A.D.7c. にかけての政治史である。また、粘土製印章の示す 5-6c. の西マールワー地方は、知られる限りにおいて、主にグプタ王朝またはオーリカラ朝 Aulikaras の支配下に在ったとされているが、それらの歴史に関わる文献にもこの地方

の仏教石窟との関わりについて触れたものは皆無である。Maity, Sachindra Kumar, *The Imperial Guptas and their Times (cir. AD 300-550)*, New Delhi, 1975. および Chakraborti, Haripada, *India as Reflected in the Inscriptions of the Gupta Period*, New Delhi, 1978.

5) 'サカ族' と日本語記述が為される場合も多い。

6) このカールダマカ系は、ナーシク仏教石窟の銘から知られる同じシャカ族のナハパーナ Nahapana (2c. 初) の家系とは異なる。ただし、このナハパーナがサータヴァーハナ王朝によって滅ぼされた後、同じシャカ族のカールダマカ系がほぼ同じ領土を治めていたようである。

7) このストゥーパは、ミルプルカース Mirpurkhas に代表される南パキスタン・シンド Sind 地方の仏教遺跡、更にはガンダーラ地方をはじめとする西北インドに見られる仏教遺跡のストゥーパと造形に関して非常に類似した様式（特に彫像に関するものに関して、一般にガンダーラ様式と呼ばれる）を有しており、これらの地方間での仏教芸術の繋がりを示す上で非常に重要な存在であり、また西マールワー地方と西北インドとの仏教芸術の関係を示すものとも考えることができる。そして Fergusson や Burgess も指摘しているように（*The Cave Temples of India*, 2nd ed., New Delhi, 1988, p.397, n.1）、西マールワー地方の仏教石窟で普遍的な方形基壇と背の高い円筒形ドラムを加えた姿を有するストゥーパの形式が、西北インドのストゥーパに良く似ている。そしてそのことは西マールワー地方と西北インドは共にシャカ族が治めていた地域であることに関連するとさえ考えられるのである。

8) Metha, R.N., and Chowdhary, S.N., *Excavation at Devnimori*, Baroda, 1966.

9) Deva, Krishna, 'Buddhist Architecture in India' *Bulletin of tibetology*, vol. II, no.3, 1974, p.18.

10) *Indian Archaeology: A Review*, 1959-60, pp.19-21.

11) *Epigraphia Indica*, vol. XX, p.19.

12) 部派仏教とは以前小乗仏教と呼ばれたもののことである。「小乗」すなわちヒーナヤーナ Hinayana という言葉は、「大乘すなわちマハーヤーナ Mahayana」という言葉の成立した後に、大乘仏教徒が伝統的な部派仏教に対して用いた蔑視語であり、現在ほとんど使われなくなっているという現状がある。

13) Fergusson, J., *History of Indian and Eastern Architecture*, New Delhi, 1880, p. 24.

14) Mitra はコルヴィの石窟群に関する記述の中で, bodhisattva の欠如から判断し, 小乗仏教の影響が見られるとした。 Mitra, D., *Buddhist Monuments*, Calcutta, 1971, p.136. 一方, Tadgell はコルヴィやピンナヤガの装飾的な丸彫りストゥーパについて, 大乘の仏教地に造られた豪華なストゥーパに感化されて成立したもの, と評価している。 Tadgell, C., *The History of Architecture in India, From the Dawn of Civilization to the End of the Raj*, New Delhi, 1990, p.50. ブツダ像のある点から考えれば, 大乘仏教の影響を否定することは現状において不可能である。しかし大乘仏教の芸術におけるボディサッタヴァの位置づけの大きさから考えれば, 一体もボディサッタヴァ像が見つかっていない西マールワー地方の仏教石窟を大乘仏教地とは考えにくい。

15) *Corpus Inscriptionum Indicarum* II, p.247.

16) *Epigraphia Indica*, Vol. XXVI, p.130ff.

17) Marshall, J., *The Monuments of Sanchi*, vol. 1, first reprinted, Delhi, 1982, pp.389-390.

18) Garde, M.B., "Mandasor Inscription of Malava Samvat 524" *Epigraphia Indica*, Vol. XXVII, pp.12-18.

19) Chakraborti, *op.cit.*, p.167.

20) Chakraborti, *op.cit.*, p.167.

21) Dutt, N., *Buddhist Sects in India*, Varanasi, 1977, p.57.

22) Jain, K.C., *op.cit.*, pp.278-279.

23) この部分は Watters, Thomas, *On Yuan Chwang's Travels in India (A.D. 629-645)*, New Delhi, 1961. による。

24) Watters, *op.cit.*, p.242.

25) Dutt, N., *op.cit.*, p.182.

26) Watters, *op.cit.*, pp.242-259.

27) Watters, *op.cit.*, p.250.

28) Watters, *op.cit.*, p.116.

29) *Indian Archaeology: A Review*, 1960-'61, p.60.

30) Cunningham 氏はストゥーパの直径と高さの比率の違いに着目して, 仏教遺跡のストゥーパを編年する試みを行っている。しかし彼による年代設定が 200 年毎と大まか

であり、編年の基準となる遺跡の年代についても、例えば現時点では早くても 1c.B.C. のものとされるサンチーのストゥーパを 500-300B.C. に設定するなど、実状とかなりの食い違いを見せているため、彼の示す年代の数字自体には有効性は全く無くなっている。 *Archaeological Survey of India, Reports by Cunningham, A., vol. II, 1864-'65, p.287.*

31) ただし仏教石窟の中でかなり遅い時代に属するものとするのみで、特に根拠を示さない。 *Fergusson, J., History of Indian and Eastern Architecture, New Delhi, 1880, p.166.*

32) 彼は建築的細部やその配置からインド仏教石窟の最後のものとして判断して年代を与えているが、その具体的な説明は全くなされていない。なお単一の無装飾な房室の中にはより古いものも含まれる可能性があるかと付け加えている。 *Fergusson, J. and Burgess, J., The Cave Temples of India (以下 CTI と略), New Delhi, 1880, p.392.* 彼の仏教石窟の編年に関する記述から見る限り、ダムナール仏教石窟は西デカンのアジャンターを代表とする後期仏教石窟の形態とはかなり異なるが、それらより少なくとも時代的には先行しないものと判断し、後の時代に位置づけたと考えられる。 *Fergusson and Burgess, CTI, p.186*

33) *Cousens, H., 'The Dhamnar Caves and Monolithic Temple of Dharmanatha' Archaeological Survey of India, Annual Reports, 1905-'06, p.115.*

34) *Cousens, op.cit., p.112.*

35) *Mitra, op.cit., p.104.*

36) *Kail, Buddhist Cave Temples of India, Bombay, p.130. Appendix II.* ただし彼はその同じ表においてコルヴィの仏教石窟の年代を約 500 ~ 700 年としているが、これらはダムナール仏教石窟よりはやや時代が下ると考えられるとはいえ、同地方に存在し、類似した様式を有するものである。したがってこの差異を説明する根拠がまったく示されていないこともあり、疑問である。

37) *Spink, Walter M., "Bagh: A Study" Archives of Asian Art 30, 1976-77, p.62.*

38) バーグ仏教石窟はダムナール、コルヴィの仏教石窟よりはやや南西に位置しているが、西デカンの石窟群よりは北に位置し、独立して開窟されている。この仏教石窟群の図像の取扱いはスピック氏が指摘するようにダムナール仏教石窟と類似している。

しかしこの仏教石窟群自体もその成立年代について大きく意見が分かれており、アジャンターの後期窟と同時代の5世紀後半とする意見（Spink, *op.cit.*）や、また奉獻銘文を基に4世紀後半とするもの（例えば、Mirashi, V. V., 'The Age of the Bagh Caves' *The Indian Historical Quarterly* vol.21, 1945, pp.79-85）等があるが、いずれも決め手を欠いている。しかしアジャンターの仏教窟との時代的前後関係はさておき、その装飾様式からグプタ期のものであることはほぼ間違いないと判断される。ただ問題がない訳ではない。ダムナール仏教石窟も同様だが、ブツ像ではなくストゥーパが中心的崇拝物として位置づけられている遺跡であるために古い遺跡と捉えられ易いことが、判断を難しくしている。

39) Michell, G., *The Penguin Guide to the Monuments of India, vol. 1: Buddhist, Jain, Hindu*, London, 1989, p.159

40) Tadgell, *op.cit.*, p.50 and p.313 note 11.

41) Impey, E., 'Description of the Caves of Koolvee, in Malwa' *Journal of Bombay Branch Royal Asiatic Society* Vol.5, pp. 336-349.

42) チャイティヤ窟のファサードを飾るいわゆるチャイティヤ・アーチの形の発展に関してのみ取り上げても、最初期にはビハール Bihar 州バラバル Barabar 丘ローマス・リシ Lomas Rishi 窟（c.3c. B.C. 半ば）の入口のように、内転びの柱、尖頂アーチの屋根、垂木が表された、木造建築の実際に近い形で表現されたものから始まったが、後に木構造を細かく模倣することから離れて形式的に扱われ、アーチの形が半円形から円形へ変形し、かつそのアーチの開口部分が次第に小さくなり、7c.A.D.のエローラ第10窟に見られるように、ほんの小さな窓になった、とするのが一般的である。西マールワー地方の仏教石窟で見られるチャイティヤ・アーチはアーチ部分は完全に円形で、また窓としてさえ使われず、完全に装飾と化しており、特に新たな成立年代を明らかにする証拠が発見されない限り、この地方のチャイティヤ・アーチの形は仏教に関わるものとしては最後のものの一つとして扱われるべきものである。なおチャイティヤ窟の発展の歴史全般に関して、前期仏教石窟については Dehejia, V., *Early Buddhist Rock Temples: A Chronological Study*, London, 1972, pp.71-113. に詳しい。また Kail, *op.cit.*, pp.16-35. や Brown, P., *Indian Architecture: Buddhist and Hindu*, Bombay, 1959,

pp.21-22. 等にも仏教石窟の発展についての記述があるが、いずれも最初期の木構造を正確に模した形態からどれだけ離れているかを基準としている。

43)Mitra, *op.cit.*, p.136.

44)Garde, M.B., *Archaeological Survey of India, Annual Reports 1916-'17*, Part 1, pp.13-14

45)Luard, C.E., 'Gazetter Gleanings in Central India', *Indian Antiquary* vol. X X X IX , 1910, p.246.

第2章

ダムナール仏教石窟の平面と伽藍の基本構成

はじめに

現在のマッディヤ・プラデーシュ Madhya Pradesh 州の北西部のウッジャイン Ujjain を中心都市とする西マールワー Western Malwa 地方¹⁾のもの(図1)は、遺跡から判断する限り、石窟文化の中心である西デカンにおいては完全に大乘・金剛乗仏教へ移行したとされる時代以降にも、部派仏教の独特な一大石窟文化を発展させていたと見られ、西デカンの同時期のものと形態において異なっている。また、インドに残存する最初期の石造寺院建築の成立と関係の深いグプタ王朝と地域的に関係が深く、その成立年代もグプタ期前後と考えられている²⁾ことから、これらの形態が寺院建築の形態やその変遷と関係していることが予想される。しかし他の地方との関連についてほとんど検討されていないこともあり、これまで著されたインド建築・美術の一般的な歴史を扱った概説書³⁾で扱われたことがほとんど無い。したがって、まずこれらの特徴について検討する必要がある。

本研究ではダムナール Dhamnar 仏教石窟群を主に取り上げるが、これは西マールワー地方の仏教石窟の代表的存在であり、19世紀の遺跡調査の報告書⁴⁾をはじめとするこの石窟群に関する従来の記述⁵⁾では、特異な平面構成を持った石窟を有することが言及されているものである。しかしその特異な平面構成の成立について解釈を加えたものはなく、主に報告的に遺跡の実態が記されるのみであった。本研究ではこの特異な平面構成の成立過程について明らかにすることとそれらを歴史的に位置づけることを目的の一つとしている。

西マールワー地方の石窟群がほとんど扱われてこなかった理由には、第一に開窟されている岩質が多孔質のラテライトであるため、バージャー Bhaja やアジャンター Ajanta 等の主要石窟群が多く分布する西デカンの玄武岩質に較べて、細かな彫刻装飾には不向きであり、また風化等により残存状況も芳しくなく、現在彫像や装飾のでき

に見るべきものがほとんど無い点が挙げられる。そして彫刻に不向きな岩質を補うため、かつて内外部ともにプラスターによる表面仕上げ⁶⁾がなされていたが、現在は一部を除きすべて剥落しており、仮に壁画が描かれていたとしてもその姿を復元するのは不可能である。このように美術的な価値を考えた時、遺跡の状況が不十分である。第二に銘文等のこの石窟の成立と直接関連した歴史的事実を示す史料に全く欠けている点が挙げられる。そのためこの石窟群の成立年代を確定することが困難であり、この仏教石窟がどのような社会状況の下で成立したかについても明確ではない。つまり歴史的資料としては必ずしも十分な遺跡ではないのである。

以上のことから、本研究においては、基本的には遺跡の現状のみに基づいて考察を進めなければならない。そしてほぼ盛時の姿を伝えられる石窟平面や空間構成がその検討の対象である。本章ではダムナールの丘の南斜面に開窟された石窟群（以下では南群とする）に含まれる石窟の特異な平面構成とそれらの配置の特徴についての検討を行う。

第1節 ダムナール仏教石窟の平面構成

1-1. 南群の位置づけ

ダムナールの丘(図2)⁷⁾には総数で60～70⁸⁾の石窟が4群に分かれて存在する⁹⁾とされる。そのうちの一つが従来比較的詳細に記述されてきた数個の石窟の含む南群である(写真I-2-1, 写真I-2-2)。一方、丘の北西と西にある残り3つの石窟群を構成する石窟の形態および性格についてほとんど記述されていない¹⁰⁾。

さて議論の対象となるような重要な石窟が含まれるのは南群のみである。カニングムによればダムナールの小集落が丘の南、オマイルより近いところに位置する¹¹⁾。一般に石窟を含む仏教寺院の成立は主に世俗信者との関係が深いとされる。特に小乗仏教における比丘と在家信者との関係では、比丘は衣食住を在家信者から得て、見返りとして比丘は在家信者のために法を説くといったもの¹²⁾であったようである。そして仏教寺院のシンボルであったストゥーパは、在家信者にとり重要な崇拝対象であり、かつ最も功德の大きな寄進対象でもあった。南群には空間的な石窟以外にもニッ

チ内の高浮彫のストゥーパや完全に丸彫りされた奉獻ストゥーパが多い¹³⁾。このことは集落に最も近い丘の南斜面が、在家信者にとってストゥーパを寄進し、参詣するのに最も適した場所であったことを示していよう。更に南群の第12窟のすぐ背後の丘上には、丘の名の由来とされる¹⁴⁾現役のヒンドゥー教寺院のダルマナータ寺院 Dharmanatha Temple (c. 850¹⁵⁾) が丸彫りされている(写真 I-2-3)。ヒンドゥー教は正に世俗と一体をなす宗教である。この寺院が南群に近接して造られていることは、この丘の南斜面が世俗社会と密接であった証拠とも捉えられる。したがって、南群は集落との深い関係のもとで成立し¹⁶⁾、この仏教石窟群における世俗との接点であったと考えられるのである。

なお南群以外の石窟群は前述のように質素な小室のみであった。これは南群にストゥーパを有する石窟が集中していることとは対照的である。これは律典に見られるように¹⁷⁾、塔地(南群)と僧地(その他3群)との分離を示している可能性も考えられる。

1-2. 南群石窟の平面構成

さて南群には第1窟から東へ第15窟(図3)¹⁸⁾、そして南群西の石窟が更に少なくとも10以上存在し¹⁹⁾、総数25を超える石窟が開窟されている。しかしそのうち特に重要視されてきた石窟は第7, 9, 11, 12, 13, 14窟の6個の石窟(以下‘主要6窟’と呼ぶ)である。これらは規模が大きいうえに彫刻による装飾がなされ、更にそれぞれの平面や内部空間の形態は、西デカンの仏教石窟のそれとはかなり異なっている。また、それぞれが地方名を有し²⁰⁾、かなり以前からこの地方において重要視されていたことが窺える。これら各石窟の平面構成については後述する。

一方主要6窟以外の石窟がカニングムの報告以外の記述には全く触れられてないことが示すように、小規模で無装飾なものであり、個別に取り上げるだけの特徴を持たない。ただし、これらは南群全体の石窟配置を考える際に重要になるものであり、簡潔にその平面構成と機能についてのみ記す。

1-2-1. 主要6窟以外の南群石窟の形態と機能

第1, 2, 15窟は一つのベランダと2~3の房室を有する形式の小窟である。これらは装飾を有さず、またシンメトリーやプロポーション等に対する構成上の配慮が

欠如しており、僧房と考えられる。ただし内部にベッドを有するなどの僧房と断定するだけの証拠が特に無く、この地で行われていた宗教形態との関連で捉え直す必要は残されよう。第3窟は約3.7^m四方の平天井の部屋に丸彫りのストゥーパを有する。第4窟も同様に丸彫りのストゥーパを持つが、約3.2×6.1^mの馬蹄形平面の部屋で円筒ヴォールト状天井である。これらはストゥーパを祀るためチャイティヤ窟に分類されるものであろうが、小規模でかつ外観が無装飾であることから、中心的な石窟ではなく、副次的なものと判断される。なおストゥーパを有する小窟は番号付けがなされていないものにも数例あり、第14窟の入口左隣の小窟はその一例である。第6窟は内部の細長い部屋の左にカニンガムが'sleeping chamber'と記述する²¹⁾部屋を有しており、また平面構成が左右非対称で、東隣の第7窟と内部でつながっている。これも僧房と判断されよう。第8窟はかなり奥行きのあるポーチとその奥の小さな部屋から成る石窟である。礼拝対象物を持たないため僧房である可能性があるが、ポーチ形式の違いを考慮すると、現時点で同じ用途の石窟であると断定することは不可能である。第10窟は第11窟の西脇に掘られた石窟で、大小4つの部屋から成る。そのうち大きな部屋の西奥にはベッドが刻み出され、また内部壁面には柵と思われるくぼみが2つ確認された。以上から僧房であると判断される。なお第5窟は第4窟と第6窟の間にあるものであるが、崩壊していることもあるのか、従来の記述上無視されている。南群西の石窟はすべて無装飾の単独な房室である。ベッドと枕を内部に刻み出したものや、自然の洞窟に手を加えたものも含まれる。僧房として成立したものと思われる。

1-2-2. 主要6窟の形態と機能

以下では主要6窟の特徴、つまり典型的な西デカンの仏教石窟との違う点を挙げ、それらの平面構成の注目すべき点を明確にする。

(a) 第7窟

ファサード(写真I-2-4)を飾る開放的な列柱ベランダと非開放的な列柱ホール(約6.1^m四方)(写真I-2-5)があり、ホール奥壁中央からは祠堂、側壁からは数個の房室を開けるといふ平面構成である。西デカンの典型的な後期ヴィハーラ窟と同様な平面構成要素を持つため、ヴィハーラ窟と従来記述されてきた²²⁾。しかし以下の点で特異である。

まずホール内の柱は4本のみであり、西デカンの通常のヴィハーラ窟に較べ柱に囲まれた空間が小さい。そして祠堂は前室を持たず、ブツ像ではなくストゥーパを祀る²³⁾ (写真 I-2-6)。そして最も特異な点は、基本的に平天井であるホール天井のうち、祠堂入口とホール奥の2本の柱との間の部分のみが円筒ヴォールト状天井 (写真 I-2-7) になっていることである²⁴⁾。

(b) 第9窟

ファサードの列柱ベランダ (写真 I-2-8) と矩形ホール (約 4.6×7.2^M)²⁵⁾ とで成る平面構成のチャイティヤ窟である。そして円筒ヴォールト状天井を有するホールの奥にストゥーパを祀る (写真 I-2-9)。

この石窟の特異な点はホール内に列柱が無く、身廊・側廊の区別が無いことである。またファサードにチャイティヤ窟特有のチャイティヤアーチを持たない。そして最も注目すべき点は、ストゥーパ前後でホール天井の取扱いに違いがあり、前方が円筒ヴォールト状天井で垂木状のリブを刻み出しているのに対し、後方は不完全な半ドーム形天井で仕上げが全くなされていないのである。つまり半ドーム形にすることに對して特に積極的な意味がなかったと判断できるのである。ストゥーパ前後で空間表現を対比させることは必ずしもダムナールだけの特徴ではなく西デカン地方のチャイティヤ窟にも比較的よく見られる²⁶⁾が、空間性に影響するほど顕著なものは他に例が無い。

(c) 第11窟

ファサードの列柱ベランダ (写真 I-2-10) と内部に4本の柱を持つホール (約 7.0×7.6^M) (写真 I-2-11) のみの平面構成で、房室や祠堂を全く有しない。この構成を持つ他の石窟としてはバーグ第1窟があるとされるが、その詳細は不明であり、仏教石窟としては一般的なものではない²⁷⁾。それ以上に、従来の記述を引くまでなく²⁸⁾、第7窟のベランダやホール部分との類似の方が重要と考えられる。したがってこの石窟が本来第7窟と同じ平面構成を採るように意図されたものとも考えられる。ただし未完成であるような証拠も見当たらない。ホールの形は一致しないけれども、房室を持たない石窟としては他にも比較的多くの例があることから²⁹⁾、もともと房室を持たないものとして計画された集会ホール³⁰⁾と判断される。

(d) 第12窟

従来の記述ではチャイティヤ窟とヴィハーラ窟との統合³¹⁾と評価されることが多く、この石窟を特異な平面構成を有するものとする所以である。確かに平面図だけで判断すれば、あたかも典型的な後期ヴィハーラ窟の列柱に取り囲まれたホールの中にチャイティヤ窟を置いたような構成となっている。しかし実際にはチャイティヤ窟外壁と列柱廊との間の空間は外部であり(写真 I-2-12)、両者は平面構成上完全に分かれているため、チャイティヤとヴィハーラとの統合による産物とは全く考えられない。そして列柱廊前の通路とチャイティヤ窟との位置関係の不自然さから判断すれば³²⁾、同時に計画されたとも考えられず、列柱廊の方が後に造られたと考えられる。

チャイティヤ窟部分は不完全な馬蹄形平面を採るホール(約 4.1 × 10.7^M)とその前方の、現在はかなり崩れ落ちてしまっている列柱ベランダによる平面構成である(写真 I-2-13)。平面形や規模は若干異なるが、ホール天井に代表される内部空間の扱いに関しては第9窟と同じであり(写真 I-2-14)、同様に特異な形態を有するものといえよう。なお列柱廊に面する外壁は全くの無装飾である。

一方、チャイティヤ窟部分を取り囲む列柱廊部分は更に左・後・右廊は別々に成立したことが考えられる。まずファサードに見られる柱や梁、庇の構成や装飾方法に関して違いが見られる。柱身断面形に関しては、左廊(写真 I-2-15)の柱が四角形であるが、後廊(写真 I-2-16)の柱は柱身中間部で面取りした部分を持ち、右廊(写真 I-2-17)の柱に至っては未完成である。次にエンタブレチュアや庇部分の扱いに関して、左廊では梁部分には装飾列が無く、その上の二層の庇にチャイティヤアーチ形の浮彫のみで構成される装飾列を持っているが、後廊ではエンタブレチュアとその上のやや突き出した庇の各々にチャイティヤアーチ形とストーパー形の浮彫を組み合わせた装飾列を有している。右廊では再び未完成を示すかのように無装飾である。

更に平面構成からも3つの廊が別々に成立した証拠を示すことが可能である。左廊には6つの房室があるが、そのうち奥から4つ目のものは奥壁面に刻まれた2体のブツダ像を持つ(写真 I-2-18)。後廊には房室が4つあり、後廊への入口の奥正面に当たる房室(つまり西から2つ目の房室)は円筒ヴォールト状天井³³⁾を持ち、左右側壁足元にベンチ状の台を刻み出した大きなものである³⁴⁾(写真 I-2-19)。そし

て右廊からは3つの房室を開けているのであるが、中央のものはブツダ像を前面に刻んだストゥーパを持っている（写真I-2-20）。次に各列柱廊の房室の並びに着目すると、もし左廊の最北の房室の存在が無く、そして後廊の最東の房室の存在が無いと仮定したならば、各廊の有する2体のブツダ像のある房室と円筒ヴォールト状天井の大房室は各々左廊中央、後廊中央に位置することとなる。さらに後廊ファサードを構成している柱が奇数の7本、つまり柱間の数が偶数の6であり、そして後廊入口がファサード中央ではなく、西から3つ目の柱間に位置している。シンメトリー性を考慮すれば一般に入口はファサードの中央に位置するものと考えられるから、この後廊の構成は不自然であり、もともと最も東の柱間は計画されていなかったと考えられる。最も東角の柱のみ形が異なり、上方の庇の装飾列が東端まで連続していないこともそれを裏付けている（写真I-2-21）。

以上のように各廊がファサードに関して異なる扱いをなされ、またそれぞれが崇拜対象を含んだ房室や特殊な房室を中心位置に配するように成立したと解釈可能であることから、必ずしもこの列柱廊全体が当初からこの構成で計画されたものではないと考えられるのである。したがって第12窟の特異な平面構成はチャイティヤ窟、左廊、後廊、右廊の4つの独立した部分の集合体として成り立っているのである。更には各々の成立時期の違いさえ予想されるのである。

なお、その他の平面構成の要素として、チャイティヤ窟部分の前庭に丸彫りの小ストゥーパが数基見られる。これらは奉獻ストゥーパと思われるが、第12窟前庭側壁の岩を崩しながら刻み出したものと考えられる。

(e) 第13窟

この石窟は現状ほとんど装飾のないチャイティヤ窟である。平面構成はややずんぐりした馬蹄形平面のホール（約 7.6×8.2^M ）のみで、列柱ベランダを有しない（写真I-2-22）。この石窟の特異な点はホール奥のストゥーパと天井との連結部が不自然なことである。ストゥーパが天井まで達することは、ダムナールでは第9、12窟をはじめとして、普遍的に行われていることであり、アジャンターやその他の石窟群のチャイティヤ窟でも比較的一般的な特徴である。ただしこれらが普通上に伸びた傘竿部分で連結しているのに対して、この第13窟は平頭部分のすぐ上の部分で

連結しているのである（写真 I-2-23）。そのためかストゥーパの形が上下に引き延ばされたような変わった形を採っている³⁵⁾。そしてストゥーパとつながる天井側の連結部分には左右に架かる梁が刻み出され、その梁は左右側壁をつたってそのまま下り、一種の付柱になっている。また第9、12窟で見られたように、天井に刻まれた梁の前後、つまりストゥーパ位置の前後で天井形が異なり、前方は平天井であるのに対し、後方は半ドーム形である。

(f) 第14窟

この石窟は平面構成の中心として中庭内に露天の丸彫りストゥーパを配置するという他に例を見ないもの³⁶⁾（写真 I-2-24）であり、その成立について検討することはこの石窟群を建築学的に位置づけるためにも最も重要と考えられる。

その具体的な平面構成は前室、西側面にこの石窟の入口（写真 I-2-25）を持つ中庭（4.6^m四方、ストゥーパを置く）（写真 I-2-26）、そして中庭奥にブツダ坐像を収める祠堂（写真 I-2-27）とそれを取り巻く繞道³⁷⁾、更に中庭右壁には2つの祠堂（一方はストゥーパを、他方はブツダ坐像を含む）と性格不詳の像³⁸⁾を含むニッチを配置する。中庭奥の祠堂を取り巻く繞道の壁面にはブツダ像（西壁：立像、北壁：坐像、東壁：涅槃像）が刻まれ、図像学的にも他に例を見ない特徴を有している（写真 I-2-28）。

この石窟は露天ではあるがストゥーパを中心に持っており、一種のチャイティヤ窟であるといえよう。

第2節 主要6窟で見られる類似と「伽藍の基本構成」

前章で主要6窟の採る平面構成が西デカンで一般とされた石窟に較べて特異であることを記述したが、その主要6窟の中で比較すれば、一転して相互に非常に類似したものがある。本章ではその類似について検討し、この石窟群には「伽藍の基本構成」として、3タイプの石窟による一定のまとまりが存在することを示す。

2-1. 列柱ペランダの構成の類似

第7、9、11窟、第12窟チャイティヤ窟部のファサードを形づくる列柱ペランダ

は柱の形や手摺の取付き方、そして幅と高さの比率という全体の構成³⁹⁾にほとんど違いが無い。顕著な違いは列柱が支える梁やその上の庇に浮彫り装飾列が有る（第7窟と第12窟）か無い（第9窟と第11窟）かのみであり、平面構成上はまったく同じと捉えられる。

2-2. 第12窟チャイティヤ窟部分と第9窟におけるホール空間の扱いに関する類似

第12窟は全体の平面構成では唯一のものであるが、チャイティヤ窟部分のみを取り出して考えるならば、第9窟と非常に類似していることが指摘できる。確かに両者には規模やベランダ周りの装飾の有無、そしてホール平面が奥で丸まった馬蹄形であるか角ばった矩形であるかの違いがある。しかし前者2つは石窟群における重要度の違いや、成立年代のずれのためと考えられる。3番目の違いは、馬蹄形である第12窟の方が、ストゥーパ後方の壁面仕上げから判断して、その形をそれほど意識したものとも思われず、その両者の造形理念に違いがあるとは思われない。したがって、第12窟と第9窟との差異はチャイティヤ窟を取り巻く列柱廊の存在のみであるといえよう。

2-3. 第11窟と第7窟におけるホール空間に関する類似

2-1節で述べた列柱ベランダの類似に加え、第11窟と第7窟とはホール空間に関しても類似している。平面形や規模がほぼ等しい両窟のホール空間は、天井を支える4本の柱の形が四角断面の柱身、持送り形柱頭、線形付き柱基である点やその柱間に天井の梁形や床の敷居状のものが刻まれる点も共通である。ホール空間に見られる違いは第7窟がホール入口の左右に窓を有し、天井の一部が円筒ヴォールト状になっていることのみである。

ところで、第7窟は房室等を有することから僧房としての機能を有する面も持ち合わせ、その点は第11窟と大きく異なっている。しかしダムナールの僧房は南群西の石窟で見られるような直接丘の斜面から掘られた単独の房室や2～3個の房室をベランダを介して開けたものが普通であり、他の地域で一般的な‘ホールから房室を開ける’という僧房の形式は第7窟以外に無い。したがって第7窟の平面構成で注目すべき点は、房室等を有する点よりもホール空間を有する点と考えられる。第11窟とのホール空間の類似はそれだけに重要であるといえよう。

2-4. 石窟の類似と「伽藍の基本構成」

前節までに第12窟のチャイティヤ窟部分と第9窟のペランダとホール空間の類似、そして第11窟と第7窟のペランダとホール空間の類似について述べた。更に主要6窟以外の第10窟と第6窟に注目する。この2つの小石窟は平面形の上では全く同じではないが、共に僧房である点は同じであり、またそれぞれが類似する第11窟と第7窟のすぐ西隣に位置する点も同様である。

したがって〔第12窟チャイティヤ窟部分－11窟－第10窟〕という組み合わせ（写真I-2-29）と、〔第9窟－第7窟ホール部分－第6窟〕の組み合わせに関して言えば、ほとんど同じものと見ることが可能である。これら3窟ずつの組み合わせは〔チャイティヤ窟－集会ホール－僧房〕といった組み合わせであり、機能的にも一つのまとまりを有している。更には3窟単位でオリエンテーションが一致しており、まとまりがより強調される。以上のように、この組み合わせは伽藍の基本となる一定のまとまりとして、「伽藍の基本構成」（図4、図5）を表していると考えられ、これらの石窟は個別に扱うのではなく、3窟ずつのまとまりで捉えることが必要と思われる。

2-5. 「伽藍の基本構成」と第13窟・第14窟

第13窟はストゥーパ形も独特で、ダムナールの他の石窟との共通点に乏しく、「伽藍の基本構成」とは無関係に単独で成立した石窟と考えられる。ただし収めたストゥーパや空間規模が大きく、その位置がこの石窟群の中心と思われる第12窟の隣であり、さらに丘の上に至る主要階段の昇り口と近い、つまりこの石窟群の重要な動線と関係が深いと思われることから、この石窟群において大きな意味をもった石窟であることが予想される。

一方、第14窟は「伽藍の基本構成」に含まれる石窟とはストゥーパ形やチャイティヤアーチ装飾等に関して類似する部分も見られる。しかし複雑な平面構成に類似する例はなく、また「伽藍の基本構成」との関連も特に考えられないことから、第13窟同様単独で成立したものと思われる。そしてダムナールで唯一ブツダ像を平面構成上重要な位置に祀る石窟であり、「伽藍の基本構成」とは全く異なったコンセプトの下で成立した可能性も考えられる。

おわりに

第1節で記したように、ダムナール仏教石窟群に含まれる個々の石窟の平面構成は特異である。そして従来その点のみが強調されてきた。しかしほぼ隣あって開窟された3石窟をまとめて考えれば、そこには一定のまとまり、「伽藍の基本構成」が見出されるのである。更にそこに見られる〔チャイティヤ窟—集会ホール—僧房〕の組み合わせは何ら特異なものではなく、これまで知られる仏教伽藍においては、石窟や構築的建築を問わず、逆に基本的なものである。したがってこの「伽藍の基本構成」の存在は、一般的なものとしては捉えられてこなかったこの石窟群をインド宗教建築の歴史に位置づけるために非常に重要な意味を有していると考えられよう。

註

1) この地方の仏教石窟群としては、ダムナールの他ではラージャスターン州に属するコルヴィ Kholvi, ビンナヤガ Binnayaga の仏教石窟群について言及されることが多い。これらはダムナールと同様に非常に特異な形式の石窟を有する石窟群であり、機会を改めて言及するつもりである。なお、Marshall, J. et al., *The Bagh Caves in Gwalior State*, London, 1927. の口絵 ('Sketch Map of Malwa') には、更に3カ所 (Hategaon or Hathiagor, Ramgaon, Poladungar) に仏教石窟群の存在が示され、その一部は Archaeological Survey of India の報告書上にも確認されるが、これらに関する詳細な研究は確認されていない。なおダムナールよりやや南西で離れた位置にあるバーグ Bagh の仏教石窟群は西デカンの後期大乘石窟に形態上の強い類似が見られるため、ここでいう後期小乗仏教窟の範疇からは省く。ただし、共にストゥーパ崇拝が中心であり、これらの間に見られる類似点を無視できないのも事実である。バーグ仏教石窟群に対する研究の進展に期待したい。

2) その図像の形式やストゥーパ形などから、グプタ期以降、特にアジャンターの後期仏教石窟とほぼ同時期と見られている。本章で後期のものと判断した理由もここにあるが、建築的細部意匠の検討を加え、機会を改めて詳細に論述する予定である。

3) ここで参照したインド建築・美術の歴史の概説書の主なものは以下の通り。インド建築全般を扱うものは、① Fergusson, J., *History of Indian and Eastern Architecture*, New Delhi, 1876, 2nd ed. 1972 (以下 HIEA と略), ② Brown, P., *Indian Architecture*, Bombay, 1959, ③ Rowland, B., *The Art and Architecture of India, Buddhist/ Hindu/ Jain*, Harmondsworth, 1st Paperback ed. 1970, ④ Huntington, S. L., *The Art of Ancient India, Buddhist, Hindu, Jain*, New York, 1985, ⑤ Harle, J. C., *The Art and Architecture of the Indian Subcontinent*, London, 1986, rpt. 1990, ⑥ Tadgell, C., *The History of Architecture in India, From the Dawn of Civilization to the End of the Raj*, New Delhi, 1990。インド仏教石窟寺院全般を扱うものは、⑦ Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, New Delhi, 1880 (以下 CTI と略), ⑧ Kail, O. C., *Buddhist Cave Temples of India*, Bombay, 1975 (以下 BCTI と略)。また、インドの仏教関連遺跡について全般的にまとめたものに、⑨ Mitra, D., *Buddhist Monuments*, Calcutta, 1971 (以下 BM と略) がある。

4) *Archaeological Survey of India. Reports by Cunningham, A.*, vol. II, 1864-'65, pp.270-280. (カニンガムの報告書, 以下 ASC II と略) のこと。これは今では現状と異なる部分も少なからず見られるが、今日に至ってもこの遺跡状況に関して最も克明に記述したものである。なお, *Archaeological Survey of India. Annual Reports, 1905-'06* (以下 ASIAR, 1905-'06 と略), pp.107-115. では Cousens, H. により ASC II の内容の補足・訂正が報告されている。またこの遺跡について最初に言及したのは Tod, C. ('Annals and Antiquities of Rajasthan', 1821) であるが、その内容については上記の報告書で誤りが指摘されるなど、その後の記述が彼の記述の検討を行っているものと判断し、ここでは特に資料として扱わない。

5) 本章でいう「(この石窟群に関する) 従来 of 記述」とは註 3) に示した文献の① HIEA の pp.164-166. と p.200., ⑦ CTI の pp.392-395., ⑧ BCTI の pp.60-62., ⑨ BM の pp.104-106. の, それぞれファーガソン, バージェス (CTI はファーガソンと共著であるが, その後半部分である part II 'Cave Temples of Western India', p.165 ff. はバーージェスが担当), カイル, ミトラによる記述と註 4) に示した ASC II と ASIAR, 1905-'06 の 2 つの報告書を示している。これらはダムナール仏教石窟について一つのまとまった項目を有したものである。なおガイドブック的なものではあるが,

Michell, G., *The Penguin Guide to the Monuments of India, vol.1: Buddhist, Jain, Hindu*, London, 1989, pp.159-160. にも記述がある。

6) 石灰やコンクリート，泥による表面仕上げが確認されている。BM, p.106.

7) ASC II, plate 77 を基に作成したものである。しかし ASIAR, 1905-'06, p.108 にはこの図に示す丘の形状や南群以外の石窟群の位置に関して誤りの指摘がある。本稿は南群を中心に議論が終始するため，この正誤に関して特に検討しないが，確認のための現地調査は必要であり，今後の課題である。

8) 従来の記述の石窟総数は約 50 (BM)，50 以上 (Michell)，約 60-70 (HIEA, CTI, ASC II)，70 (BCTI) である。

9) CTI, p.392. また ASC II の plate 77 には 4 つの石窟群が示されており，Michell も同様な図を著書に記している。

10) カニンガムは「それ（南群）以外の北と西の石窟群は興味に欠けるもの」，「それぞれは小さく，数も少なく，興味に乏しいもの」と記述している。ASC II, p.271 fn. & p.275. また，バージェスは「それらのほとんどは小さく，単なるセル（房室）にすぎない」と記述し，ミトラはその存在にすら触れていない。1995 年 2 月の現地調査の際にはその北西と西にある小窟群を確認したが，小規模な露天の丸彫りストゥーパが二三確認されたが，石窟はそれぞれ小さく，また保存状況も芳しくないのがその現状である。

11) ASC II, p.270.

12) 奈良康明，「仏教史 I」世界宗教史叢書 7, 山川出版社，1979, p.315.

13) 第 6 窟の西の岩壁にはストゥーパを収めたニッチが多く刻まれている。また丸彫りの奉献ストゥーパは第 12 窟の周りと南群西の石窟に数基確認される。

14) BM, p.104.

15) Michael, W.M., Dhaky, M.A. ed., *Encyclopedia of Indian Temple Architecture, North India, Period of Early Maturity c.A.D.700-900*, Delhi, 1991, pp.311-314.

16) 重要な石窟が南群に集中している理由には，その‘南向き’であること関係しているかもしれない。つまりチャイティヤ窟が南を正面にする傾向が強かったためも考えられるのである。アジャンターの初期窟である第 9・10 窟は完全に南向きを意識

した位置であり、それらを中心としてアジャンター石窟群が構成されていったとする説明が定説となっている。またアウランガバード Aurangabad のものも南向き斜面に開窟されている。石窟ではないが、サーンチー Sanchi の大ストゥーパは南トーラナを正面としている。しかしバージャーヤ、ピタルコーラ Pitalkhora、エローラ Ellora、カーンヘリー Kanheri のチャイティヤ窟は西向き、一方ナーシク Nasik のものは北向き、更にはジュンナール Junnar では4つの石窟群各々にチャイティヤ窟を有しているが、その中には東向きであるものもある。このようにチャイティヤ窟の向きは必ずしも南とは限らないため、集落との関係で考えるのが妥当と思われる。ただし、チャイティヤ窟の向きの違いは、石窟に関係した宗派の違いでもある可能性もあり、更に検討すべき事項である。

17) 『摩訶僧祇律』には「僧地は仏地を侵すを得ず。仏地は僧地を侵すを得ず。」と両者の土地の不可侵を説いているという。平川彰、「初期大乘仏教の研究」, 春秋社, 1968, p.636.

18) この図は ASC II, plate78. と HIEA, 図 86, そして ASIAR, 1905-'06, plate41 を基に、筆者が 1992 年 3 月に訪れた際の現状を反映させて作成し直したものである。

19) この石窟群における文献上の番号付けについては、この石窟群に対する記述が南群の 10 ほどの石窟についてのみに終始しているために、その全体のシーケンスについて明確ではない。カニンガムの記述では地方名 Bhim's Bazar という石窟が第 11 窟となるように第 1 窟から東に向かって第 14 窟まで南群の石窟の番号付けがなされているが、最近の文献や遺跡では一般に Bhim's Bazar を第 12 窟と定義し、その左右に続きの番号を与えている。本稿でも後者の番号付けで記述する。ただしカニンガムの記す第 14 窟をこのシーケンスで番号を付けると「第 15 窟」となるが、実際の遺跡ではその第 15 窟は第 1 窟の西方の最初の石窟に付けられており、矛盾することとなる。この点に関して本稿においては、カニンガムの記す第 14 窟を第 15 窟とし、第 1～15 窟以外の南群の石窟のほとんどが個々に記述すべき特徴を持たない点も考慮し、まとめて「南群西の石窟」と記す。ちなみに遺跡の状況ではこの南群西の石窟には 15 から 25 までの番号付けが確認されており、特に必要な場合にはこの番号を使用し、南群西の石窟の第～番という表記の仕方をとることとする。

20) カニンガムの報告書には各石窟の地方名として、第7窟は Bara Kacheri (= great court house, '大宮廷'), 第9窟は Chhota Kacheri (= small court house, '小宮廷'), 第11窟は Rani-ki-makan (Todは Rajlok と記す, = queen's apartment, '女王部屋') または Kamaniya-mahal (= beautiful palace, '美しい宮殿'), 第12窟は Bhim's Bazar ('ビーム・シングのバザール' CTIでは Bhim Sing-ka Bazar と記される), 第13窟は Hathi-bandhi (= elephant's stable, '象小屋'), 第14窟は Chhota Bazar (= small bazar, '小バザール') と記されている。

21) ASC II, p.271.

22) HIEA, p.200., CTI, p.393.

23) ストウーバを祀る祠堂を有するヴィハーラ窟は初期仏教石窟ではマハド Mahad 第8窟とシェラルヴァディ Shelarvadi にある。しかしホールに柱を持たない。また後期仏教石窟ではダムナール以外ではバーク第2, 4, 7窟が挙げられるが、これらは西デカンの後期ヴィハーラ窟のように列柱に囲まれた大きなホールを有している。前室を持たない祠堂を持つ例はアジャンター第16窟とバーク第4窟, カーンヘリー第11窟, エローラ第2, 3, 5窟などが挙げられる。ただしストウーバを祀るものはバークの例のみである。アジャンター第16窟は文字どおりの前室ではないが、祠堂の左右に前室的な部屋を有している。

24) 類似の平面構成を持つ例としてアジャンター第11窟が挙げられる。ただし祠堂には、前方にブッダ像を刻み出した不完全なストウーバを有している。またホールの天井は完全な平天井であり、ダムナール第7窟のヴォールト天井の扱いに相当する部分では、床の高さに変化をつけている。また柱はホール内のものは完全な八角柱で柱頭の形式も異なる。この石窟はアジャンターの初期窟の第10窟(チャイティヤ窟)と第12窟(ヴィハーラ窟)の間に挿入するように開窟されており、その特異な平面形式の成立と石窟群全体の構成上の意味についてはダムナール第7窟と共に検討すべき事項であり、今後の課題である。

25) 矩形平面のチャイティヤ窟は初期仏教窟に数例見受けられる。例えば西デカンのジュンナールでは c.AD.2c. のものに比較的多く見られる。しかしこれらはすべて平天井のものであり、空間表現に関して大きく異なる。矩形平面でヴォールト天井を有す

るものはアジャンター第9窟、アウランガバード第4窟がある。しかしこれらは身廊と側廊を分ける内部列柱が馬蹄形平面を構成するように配列された馬蹄形平面を指向したものであり、ダムナールのものとは全く異なる。更にヴィハーラ窟内の祠堂として成立したものはほとんど矩形平面であるが、それらは単なる房室と異なるものであり、このダムナール第9窟と第12窟チャイティヤ窟部分の空間性を考えれば、全く性質の異なるものといえよう。

26) 身廊と側廊を分ける列柱に関して、ストゥーパ前後で柱頭柱基の取扱いに差異をつける例が見られる。このようにストゥーパ位置前後で空間表現の違いが見られる点はコンディヴテ Kondivte のチャイティヤ窟に見られる最初期の形式を伝えていると考えられ、チャイティヤ窟空間の発展を考察する一つの重要な視点を含んでいる。

27) Marshall, *op.cit.*, p.6. ただしこの石窟の用途に関しては何も言及していない。また、ヒンドゥー窟ではあるが同じマディヤ・プラデーシュ州のウダヤギリ第19窟も同様な形式である。しかしこちらはこの形式の空間を祠堂として使っており、4本の柱で囲まれた内側に崇拜物（リンガ）を置いている。

28) 例えばカニンガムは第11窟に関する記述の所で、「正面のポーチコ（列柱ベランダのこと）は、第6窟（つまり本稿における第7窟）のものと類似しており、説明の必要がない」と記述している。ASC II, p.272. パージェス, ミトラも同様である。CTI, p.393., BM, pp.105-106.

29) このようにチャイティヤ窟やヴィハーラ窟に分類できない石窟が他の石窟群にも見られる。ジュンナールのシヴネリ丘第26窟は房室を全く持たないホールを有するが、これは銘によれば応接用の部屋として意図されたことがわかっている（Dehejia, V., *Early Buddhist Rock Temples; A Chronological Study*, London, 1972., p.96, p.113）。またバグ第5窟も大きな列柱ホールを持ちながら房室を持たない。これはベンチ状の長い台を床に刻み出していることから食堂として使われたものと言及されることがある。この類似例はコルヴィにも見られる。またグジャラート Gujarat 州のタラジャ Talaja 第30窟は 22.8×20.7^m もの大ホールであるが、房室を全く持たない。同様なものが同じグジャラート州のサナ Sana にもある。

30) アーンドラ・プラデーシュ Andhra Pradesh 州の大仏教遺跡であるナーガルジュナ

コンダ Nagarjunakonda には構築的な集会ホールが僧院伽藍毎に建設されている。その機能は比丘が在家信者に説教を行うためのものであるとも、得度式等の比丘達に関連した儀式を執り行うためのものであるともされる。こういった機能はその地の仏教の性質との関連で定義されるものであり、稿を改めて検討を加えたい。

31) ASC II, pp.272-273. またカイルは馬蹄形状に並ぶ列柱を持つ典型的なチャイティヤ窟の平面形を念頭に置き「チャイティヤ [窟] をヴィハーラで取り囲み、[身廊と側廊を分ける] 列柱がここでは壁の外側に並び、代わりにヴィハーラの列柱廊の柱を構成している」と述べ、チャイティヤを独特な形で発展させたものと評価している。BCTI, p.62. 更にタジェルは「チャイティヤグリハとヴィハーラとの幾らか不格好な統合」とする。Tadgell, *op.cit.*, p.313, n.11. ファーガソンは「全体が房室とチャイティヤグリハとが混ざり合ったされた集合体となっており、そこでは本来の部分のすべてが混乱し、デザインと配置の原初的な単純さが失われ、先行する知識がなければ、ほとんど見覚えのないものになってしまうほどである。」と述べている。HIEA, p.166. バージェスも「他では見ることのできない独特な構成」とした上で「事実、ヴィハーラによって取り囲まれたチャイティヤ窟」と定義している。CTI, p.393.

32) 例えば、チャイティヤ窟部分の中心軸と後方の列柱廊部分の中心軸がずれている点が挙げられる。更にチャイティヤ窟のベランダに左壁面に刻まれたストゥーパを収めたニッチはその奥が抜けてしまっており、後から通路を刻んだ際、穴が開いたと考えられる。

33) ファーガソンはリブ付きヴォールト天井であるとしている。HIEA, p.166. しかし現状を見る限りリブは無い。

34) カニングムはこの他のものより大きな房室について、head monk (僧院長) の住居であった可能性を示している。ASC II, p.273.

35) 第13窟は註20) で記されるように、地方名‘象小屋’であるが、このストゥーパにも Hathi-ka-mekh (= elephant's peg, すなわち‘象の杭’) という地方名がある。ASC II, p.273. この石窟の大きな入口や、ストゥーパの丸められた杭のような姿から判断すれば、仏教衰退後に、地方名の示す通りこの石窟が象小屋として使用され、奥のストゥーパが象をつなぎ止めておくことに使われたのではないかと推測される。

したがって推し量るすべを持たないけれど、この石窟が本来の姿と現在とでかなり異なっている可能性がある。

36) ミトラはその平面に対して 'singular (無二の)' と述べている。BM, p.104.

37) ブッダ祠堂の周りに繞道を設ける石窟はアウランガバード第6, 7窟, エローラ第8窟に見られ、これらの成立はヒンドゥー寺院から影響を受けたものとする説がある。Huntington, *op.cit.*, p.265. ただしこれらは壁面に図像を配さず、房室を開ける点で異なっている。更にアウランガバードのものにはシャクティ Saktiとしての女性像が存在することから、金剛乗仏教に属するものとされており (Huntington, *op.cit.*, p.267., Berkson, C., *The Caves at Aurangabad; Early Buddhist Tantric Art in India*, Ahmedabad, 1986), 小乗仏教に属するとされるダムナール仏教石窟との関連性は非常に薄いと判断される。

38) 西マールワー地方の仏教石窟群ではブッダ像以外の像彫刻は2つのみ見つかっている。その一つがダムナール第14窟のこの像である。残存状況が良くないが、その腹部の膨らんだところからヤクシャ yaksa 像として見なすのが妥当なところであろう。しかし、クシャーン朝 Kushanas の王の像のスタイルとして有名である倚像スタイルで表現されているなど、ヤクシャ像以外である可能性も捨て切れていない。なお、西マールワー地方の仏教石窟で見られるブッダ像以外のもう一つの例はコルヴィ第7窟にある。こちらも残存状況が芳しくないが、ブッダ像祠堂入口両脇に配されていることから守門神 dvarapala もしくは菩薩と見なされる。ただし菩薩として比定される場合には西マールワー地方の仏教が部派仏教である点と矛盾することとなり、慎重に扱う必要がある。

39) ミトラはこのペランダの構成をこの石窟群の特色と評価している。BM, p.105.

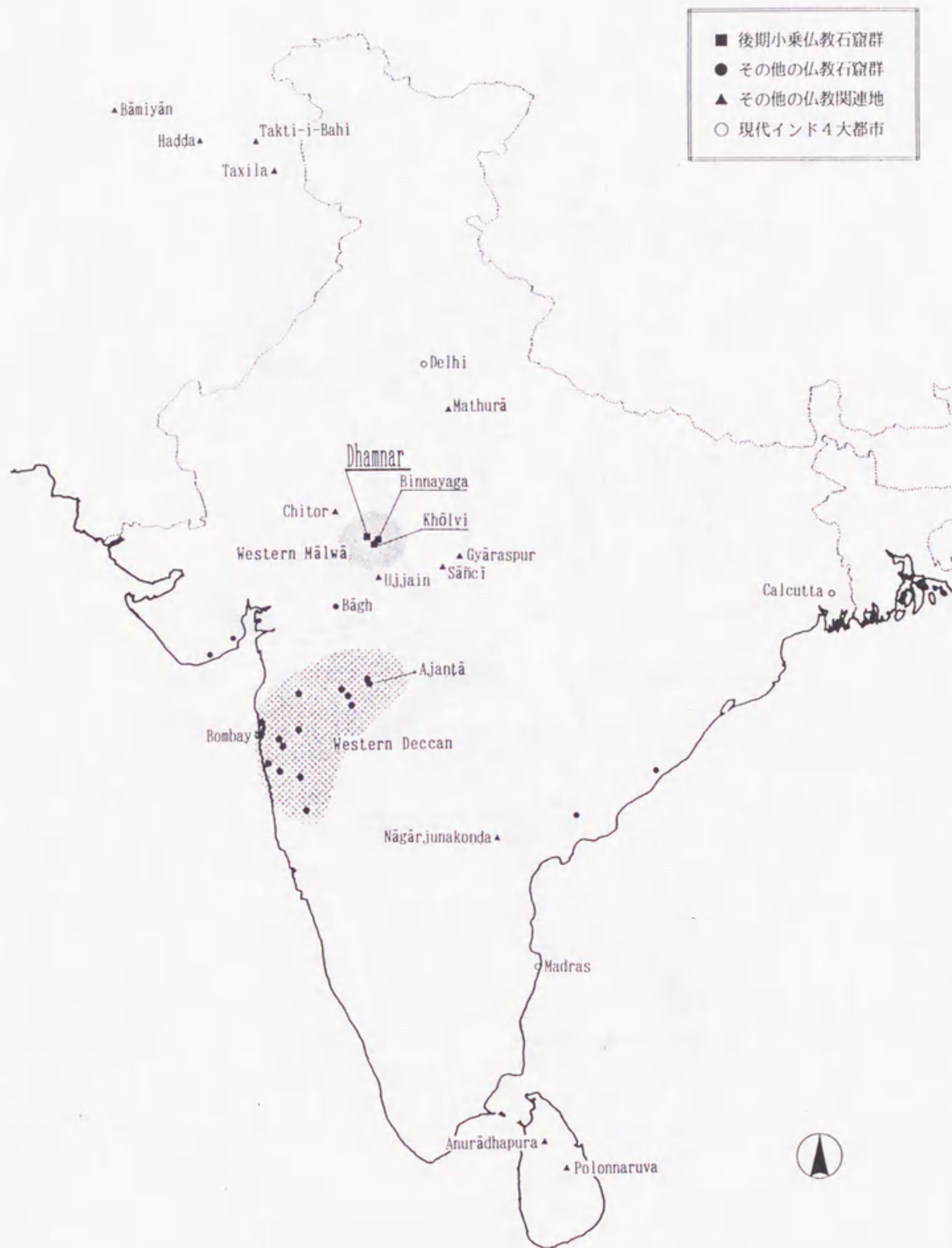


図1 インド仏教石窟群分布

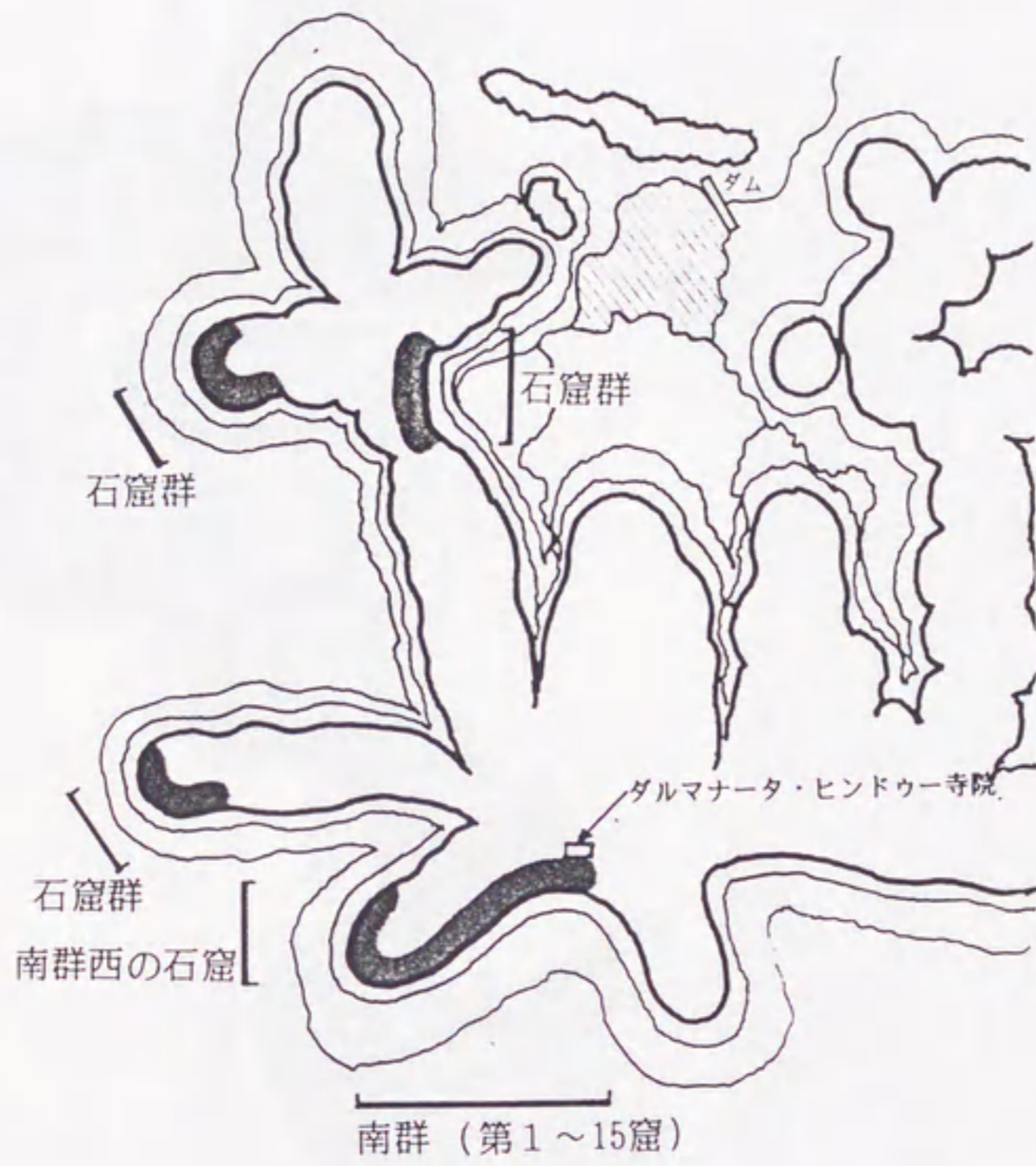


図2 ダムナールの丘

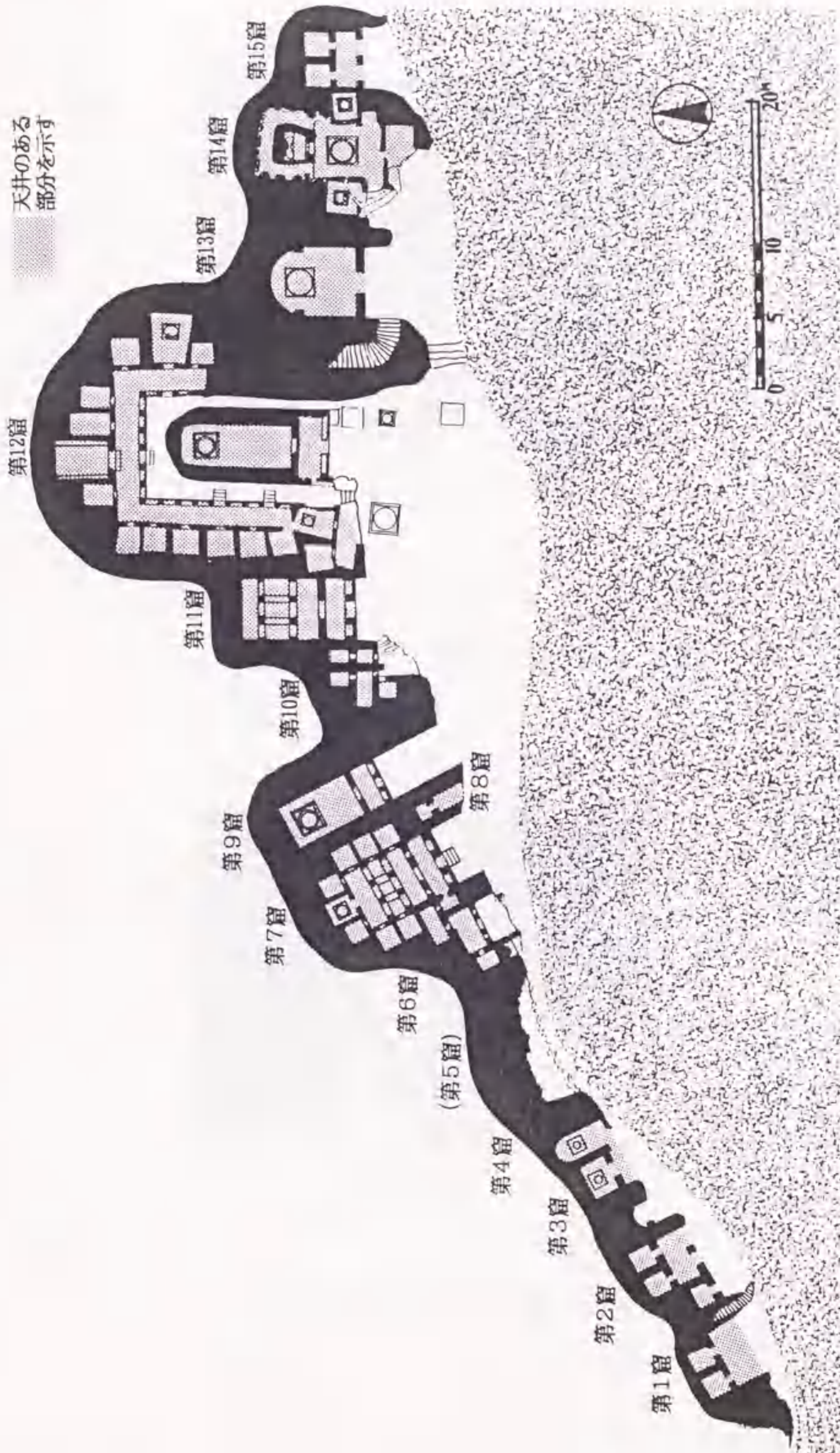


図3 ダムナール仏教石窟南群石窟 (第1～15窟) 石窟平面と配置

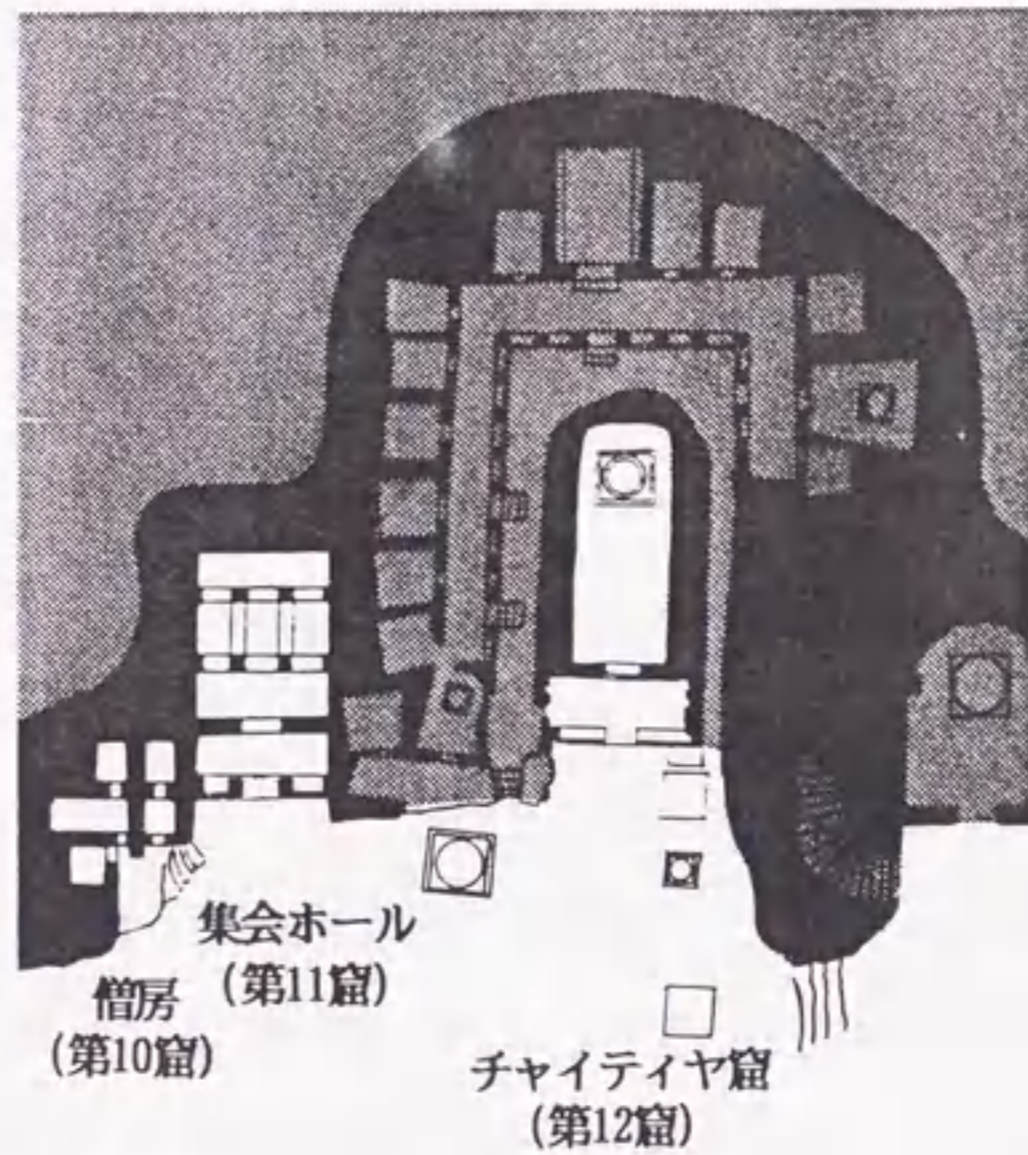


図4 「伽藍の基本構成」 (第10窟-第11窟-第12窟)

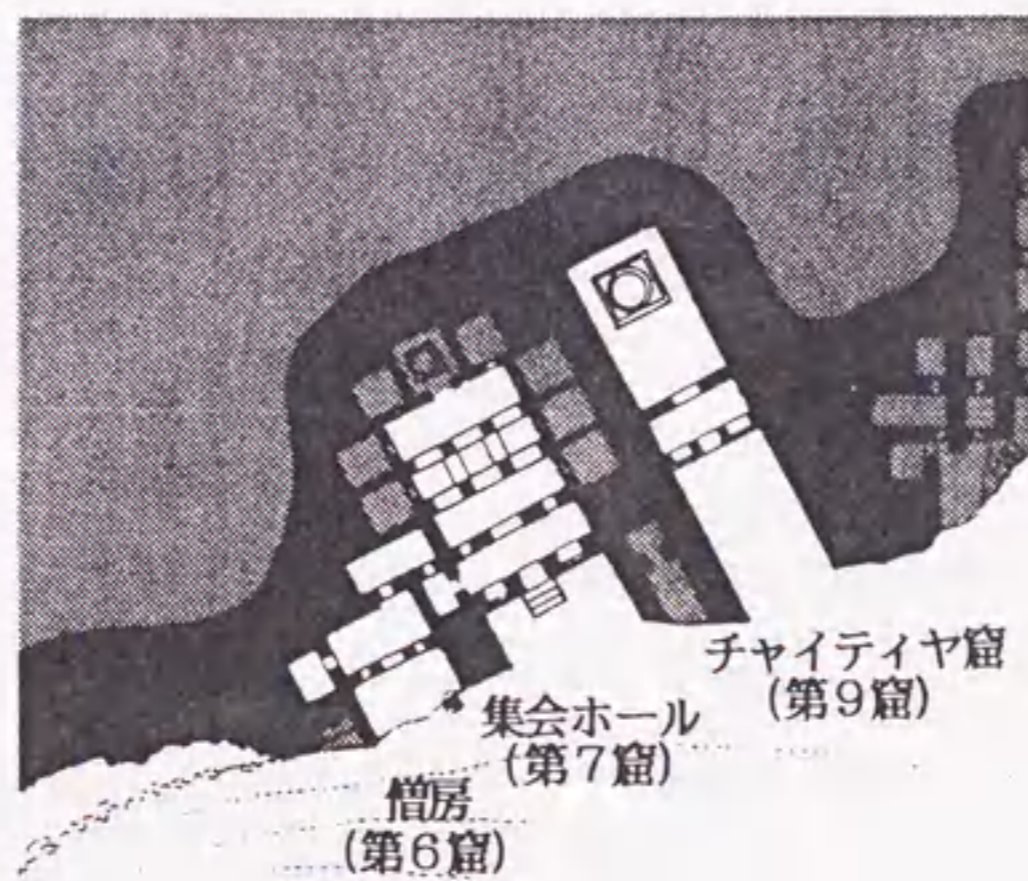


図5 「伽藍の基本構成」 (第6窟-第7窟-第9窟)

第3章

西マールワール地方の仏教石窟の平面形式

はじめに

第2章では、西マールワール Western Malwa 地方の代表的仏教石窟群であるダムナール Dhamnar 石窟群を取り上げ、チャイティヤ窟と集会ホール、僧房による伽藍の基本構成の存在について記した。本章では同じ地方に点在するダムナール石窟群以外の4つの仏教石窟群を取り上げ、その地方で標準的に成立していた石窟平面形式を抽出することを目的とする。これは前章で扱ったダムナール仏教石窟群の主要6窟の平面構成の成り立ちを理解するための基準を提示することになると考えられる。

西マールワール地方ではダムナール仏教石窟群の他に、20以上の石窟を有するものだけでも更に4つの仏教石窟群が存在する。マッディヤ・プラデーシュ Madhya Pradesh 州に属するポラドゥンガル Poladungar、ケジャディア・ボープ Khejadia Bhop 両石窟群、およびラージャスターン Rajasthan 州に属するコルヴィ Kolvi¹⁾、ビンナヤガ Binnayaga 両石窟群である(図1)。ただしこれらの石窟群に含まれる石窟の多くが損壊しており、ここでは現地で平面形の確認できた石窟を中心に取り上げ、議論する。また、こうした背景のもと、多くの石窟については実測が困難であった。ここで提示した(図2, 3, 5, 6)は基本的に平面上におけるホール・房室等の部屋の繋がりを示す模式図であり、実測図ではない²⁾。

なお、ダムナール仏教石窟群を含めた以上の5つの石窟群の他にも、ビンナヤガ石窟群近くにハティアゴル Hatiagor、ラーマーガオン Ramagaon、アーワル Awar に仏教石窟群が確認されている。しかしこれらはインド考古調査局 Archaeological Survey of India (以下、ASIと記述)の報告書でも取り上げられておらず、本研究では重要視しない。

第1節 各石窟群を構成する石窟の平面と機能

1-1. ポラドゥンガル仏教石窟群³⁾ (図2)

マディヤ・プラデーシュ州マンダソール Mandasor 地区ガロット Garot から東南東へ 10km 足らずの平原の中にある孤立した小高いラテライトの丘の頂上周囲に取り巻くように開窟された石窟群である(写真 I-3-1)。石窟の総数は独立した小さな房室を含めて 100 以上であると ASI の報告書⁴⁾では記述されるが、そのほとんどが、主に天井の崩落が原因で、原形を留めない破壊された状態となっている。また現在 ASI による保存対象遺跡でもなく、石窟の番号付けも確認できない。そのため、ここで議論する石窟には便宜的に PO-a~h の番号を振る。なおこの石窟群ではブツ像等の偶像は全く発見されていない。

(a) チャイティヤ窟

この石窟群には丘の南面と西面にチャイティヤ窟が一つずつ存在する⁵⁾。西面のものは、筆者は未確認だが、崩壊した状態で、南面のチャイティヤ窟の正確なレプリカであるとされている⁶⁾。

その南面のチャイティヤ窟 PO-a⁷⁾は、全体的に荒廃した石窟群の中で最も保存の良い状態が維持されているものであるが、その空間形態は他には例のないものである。平面は列柱ヴェランダと矩形ホール、そしてストゥーパを祠ったアプスという3つの部分で構成されている。ファサードは2本の柱と2本の付柱、そして柱と付柱を足下で繋ぐ手摺で構成されたダムナールで見られるものに非常に類似した構成を示す⁸⁾(写真 I-3-2)。ヴェランダは間口方向の円筒ヴォールト状天井を有するが、これはダムナールでは見られない特徴である。ただし後述のケジャディア・ボープやコルヴィヤピンナヤガの石窟群ではヴォールト状天井を有するヴェランダもしくは前室を比較的多く見ることができる。内部の矩形ホールでは、ちょうど身廊に相当する4本の柱で挟まれた空間のみ、奥行き方向の円筒ヴォールト状天井に形づくられ、身廊を挟んで向かい合う柱はヴォールト面に沿って刻み出されたアーチ状の梁形で繋がられている(写真 I-3-3)。なお、その身廊左右の側廊に当たる部分は平天井である。最深部にあるアプスは不完全な馬蹄形の平面で、その中央付近に平頭も傘蓋も持たないストゥーパ⁹⁾を配している。アプスの天井形は、部分的に崩落しているが、大まか

な半ドーム形である。ただしそのドームは前方の身廊のヴォールト状天井の端部に連続したものではない。またドームの仕上げもほとんどなされた形跡がない。このようなストゥーパを祠る空間とその前方のホール空間との取り扱いに違いが見られる点はダムナールの第9窟や第12窟のチャイティヤ窟と共通した特徴である¹⁰⁾。

(b) 集会ホール・僧房窟

この石窟群には僧房に関わる、少なくとも4タイプの石窟を見ることができる。まず、前述のPO-aの西隣には、天井が完全に崩落しているほぼ正方形平面のホールを持つヴィハラ形式の僧房窟PO-bがある。ホール内の柱の有無は確認できない。ホールの残存した左と奥の各側壁からは房室が3つずつ開けられているが、奥壁中央の部屋のみ大きく、その入口も大きいことから、祠堂であった可能性が高い。また丘の西から北面に沿って、多くの僧房窟が開窟されている。その幾つかは奥行きが浅い玄関ロビーを介して房室を開けるもので、ホールを持たないタイプである(PO-d, e, h)。PO-gは奥にやや長い矩形のホールを有し、その左右側壁からは房室を2つずつ、奥壁から祠堂と思われるやや大きな部屋を1つ開けるといふ、左右対称の平面形を有するものである。ただし同じように奥に長い矩形ホールを持つが、側壁の一つからは、未完成ながら、2本の柱を有する入口を有する矩形の部屋(以後2柱室と記述)を開け、残りの側壁からは房室を開けた非対称平面の僧房窟(PO-c)もある。2柱室はコルヴィヤピンナヤガの僧房窟でも見られるが、その用途ははっきりしていない。

以上の他にも、平面形に関しては天井の崩落によってほとんど議論できないけれども、他の地方の仏教石窟との関係を考える上で重要な僧房窟が丘の北面と南面にある。北面のPO-fはヴェランダが崩壊し、ホール入口を開けた壁が露出した状態である。入口を挟んだ両脇に大きな窓を開けている。内側のホールは奥半分が天井の崩落により跡形もなくなっているが、最前列のマッシヴな2本の柱と両端部の付柱で構成された列柱が残存している(写真I-3-4)。そしてその柱・付柱のデザインがバークやアジャンターで使われているものと非常に類似しているのである¹¹⁾。これは南のバークや、更にアジャンターなどの西デカン地方の石窟との関係を示すものとして評価すべきものである。南面の方もホール天井が完全に崩れ落ち、ホールを支えていた柱は柱頭のみ確認できる状態であるが、その柱の大きさやデザインからPO-fとほぼ

同じ特徴を有していたと判断される。ただしこちらは単純無装飾な四角柱で構成された列柱ヴェランダを持っており（写真 I-3-5）、PO-fのヴェランダの当時の姿を示している可能性がある。

1-2. ケジャディア・ポーブ仏教石窟群¹²⁾（図 3）

マッディヤ・プラデーシュ州マングソール地区のスワスラ Suvasra 駅から東南方向へ 15km ほどの所にあるケジャディア・ポーブ村近くの丘の西面から北面にかけて掘られている（写真 I-3-6）。ASI の報告書¹³⁾では 30 以上の石窟が含まれているとされるが、そのほとんどは僧房として機能したと考えられる小窟である。彫像は全く発見されていない。この石窟群も ASI による保護対象として扱われていない。石窟番号は数窟で確認できたのみであり、ここで取り上げるものについては、便宜的に、KB-a～f の番号を付ける。

(a) チャイティヤ窟

KB-e¹⁴⁾はストゥーパを含んだ唯一の石窟である（写真 I-3-7）。この石窟群の中央位置にあり、明らかにこの仏教組織の中心的石窟だったと考えられる。空間構成は、丸彫りされた門と壁で囲まれた中庭内右端に露天の丸彫りストゥーパ¹⁵⁾を配し、中庭奥の壁面から 4 つの部屋からなる石窟を更に組合せたものである。その石窟は入口は奥に長い矩形の小さな玄関ロビーへ繋がり、その左壁からは一つの房室を開け、右からは柱と付柱各 2 本¹⁶⁾で仕切られた前室へ繋がる（写真 I-3-8）。その前室からは更に房室が開けられている。この前室を伴った房室の方が祠堂であった可能性も否定できないが、崇拝対象も見つかっていない。この石窟では玄関ロビーの奥へ部屋を展開しないで、左右方向に非対称に展開している点を考えれば、単なる僧房であったと考えられるが、特にこの地の仏教組織上重要な僧のためのものかも知れない。

(b) ブッダ像祠堂

西面の北端に近い位置に玄関ロビーとほぼ正方形平面の部屋から成る石窟 KB-b があある。玄関ロビーは間口方向の、そして奥の正方形平面の部屋は奥行き方向のそれぞれ円筒ヴォールト状天井を有しているが、天井高は比較的高い（写真 I-3-9）。奥の部屋にはモールディングのある台座があるが、その上には現在何も遺らない。こうした台座を有する例は、この地方では広く見られ、その内ブッダ像を刻み出したものが

ダムナール、コルヴィでは見られることから、この石窟でもブツ像を置いていたと考えられる。

(c) 集会ホール

北面の石窟の中に、規模から考えて間違いなく僧房窟ではない石窟 KB-f がある。約 4m 四方の天井の高いホールで、内部に柱はない。また房室を開けていないが、奥壁に沿って低い台が刻み出されている。この台にはモールディング等の装飾が全く無く、比丘の生活上の実用的なものであった可能性が高い。このような低い台を設ける例はダムナール第 12 窟後廊にある円筒ヴォールト状天井の部屋がある。また集会ホールであると考えられるコルヴィ第 10、15 窟も側壁に沿って低い台を設けている。したがって、KB-f は集会ホールと考えられよう。

(d) 僧房窟

僧房窟の多くは、KB-a のように、玄関ロビーから左右非対称に 1～3 個の房室を開ける単純な平面構成を示すものであるが、奥に長い玄関ロビーから左右対称に 2 つずつ房室を開け、更に玄関ロビーの奥端部に空間的なニッチを有する形式の石窟 (KB-c) も見られる。ニッチが何らかの彫像を含んでいたかどうかは明確ではない。また KB-d のような玄関ロビーのみのもも見られるが、玄関ロビーの一角が房室の機能を兼ねていると考えられる。

1-3. コルヴィ仏教石窟群¹⁷⁾ (図 4, 図 5)

ラージャスターン州ジャーラワール Jhalawar 地区ダグ Dag の町から北へ 13km に位置する。石窟は丘の頂上部分の南面から東面、北面にかけて連続的に開窟されている。ダムナールでは丘の南面に沿って重要な石窟が開窟されていたが、コルヴィにおいても最も装飾的かつ、ストゥーパのような大きな崇拜対象を有する石窟が南面に集中しており¹⁸⁾ (写真 I-3-10)、東面、北面にかけての石窟は南面のものより時代が後と考えられる。石窟総数について、ASI の番号付けでは第 48 窟まで確認できる。なお図版では、例えばコルヴィ第 1 窟を KO-1 と表記している。

(a) ストゥーパ・チャイティヤ窟

もしストゥーパを空間内に祠る石窟をチャイティヤ窟と定義するならば、この仏教石窟群にはチャイティヤ窟が全く無いと言っても過言ではない¹⁹⁾。第 7 窟が空間内

にストゥーパを配しているけれども、後述するように、決してストゥーパを祠った石窟とは言えない。代わりに、この石窟群の景観上の特徴ともなっているのが露天の丸彫りストゥーパである。丘の南面に集中して第2、4、5、9窟の4つ、北面に大小2つ（石窟番号は不明確）あるが、その内第2、5、9窟が台基の側面から祠堂を開けたストゥーパ形祠堂と言えるものである。

さて、丘の下から頂上の石窟群へ通じる階段の登り切った所にある第2窟の東向きの丸彫りストゥーパは、明らかにこの石窟群の最も重要で装飾的なモニュメントであり、また最初期に計画された石窟であろう（写真I-3-11）。覆鉢部分を失っているが²⁰⁾、基本的にはこの地方のストゥーパで普遍的に見られる方形台基と円筒形ドラムを載せたものであり（写真I-3-12）、さらにその東面正面に内部の祠堂へ導く2本柱のポーチを刻みだしたものである（写真I-3-13）。内部に掘られた祠堂は円筒ヴォールト状天井を有し、奥壁のモールディングを有する台座上にブッダ倚像²¹⁾を刻んでいる。こうした第2窟の構成はストゥーパであるというよりも、高塔シカラsikharaを頂く祠堂とポーチ、そしてポーチ上の大きなチャイティヤ・アーチ装飾²²⁾で構成されるヒンドゥー教寺院の基本スタイルに極めて近いものとなっている。

一方、第5窟（写真I-3-14）、第9窟（写真I-3-15）は台基の南側面に祠堂を有すが、第2窟とは違い、ポーチは持たず、また方形台基上端のモールディングが祠堂のある部分のみ不自然に途切れていることから判断すれば、独立ストゥーパとして既に完成していたものの方形台基部分に、後から祠堂を開けたと考えられるものである。第5窟の祠堂はヴォールト状天井を有している。なお第5、9窟は円筒形ドラム部分側面の東西南北の位置に、前者はストゥーパのレリーフを、後者はブッダ坐禅像²³⁾を含んだニッチを有している。第4窟は小規模な丸彫りストゥーパであり、円筒形ドラム側面の東西南北位置にブッダ立像を含むニッチを有している（写真I-3-16）。この地方のストゥーパで台基が八角平面である唯一の例である。丘の北面に隣り合って刻み出された大小2つの露天丸彫りストゥーパ（写真I-3-17）は、大きい方のみが円筒形ドラムの北側面にチャイティヤ・アーチ形のニッチを有している。ただしニッチには何も含まれていない。また、この石窟群には馬蹄形平面の石窟空間内にストゥーパ形祠堂を持つものが一つ（第7窟）ある（写真I-3-18）。ただし、実際には円

形平面のストゥーパ前部に矩形平面の祠堂を付加したことによって成立した馬蹄形平面を有するストゥーパ形祠堂の形がそのまま石窟平面の輪郭に現れたものであり、ダムナール第12窟で見られるような奥に長い矩形ホールの奥端部にストゥーパを祠ったチャイティヤ窟とは大きく異なっている。またストゥーパを取り巻く空間に余裕が無く、人一人がようやく巡ることのできるほどの幅で隙間が設けられているのみである。したがって、内部にブツ像を含んだ祠堂を大きな石窟空間内に刻み出し、その祠堂周りを巡るための繞道を備えたもの²⁴⁾（写真 I-3-19）と見なしてよいであろう。

以上のような祠堂を含むストゥーパは後述のビンナヤガ仏教石窟群でも非常に似たものが見られる。一方ダムナールでは方形台基に祠堂を含むものは全く見られない²⁵⁾。またダムナールの露天丸彫りストゥーパはコルヴィヤやビンナヤガのものに較べて概して小規模である。

(b) ブツ像祠堂

ブツ坐禅像を収めた単純な祠堂が5つ（第14、16、28、33、37窟）見られるのは東面から北面にかけてである。そして第7窟内部のストゥーパ形祠堂もブツ坐禅像を含み、機能としては同じものとして見る必要があるだろう。これらは通常奥壁に沿ってモールディングを施した台座を備え、その内の第7、33窟の祠堂は天井を円筒ヴォールト状にしている（写真 I-3-20）。

(c) 集会ホール

この石窟群には第10窟と第15窟という房室を全く有しない矩形平面の大きな列柱ホールがある²⁶⁾。第10窟は丘の南面、第9窟の後方に開窟され（写真 I-3-15）、第15窟は丘の東面に開窟されている。両者いずれも2つの列柱で横長の矩形ホールを3分割し、3本の列柱廊を設け、また側壁に沿って低い台が巡っている。これらの特徴から、これらは集会ホールであったと考えられている²⁷⁾。なお、第10窟は3つの列柱廊とも円筒ヴォールト状天井を有しており（写真 I-3-21）、中央の列柱廊の左（西）端部の壁面にチャイティヤ・アーチと付柱で枠取られたニッチを設けているのが特徴である。一方、第15窟（写真 I-3-22）は天井のほとんどが崩落しているが、遺った部分から判断して、入口に近い前廊のみ平天井で、奥の2つの廊は円筒

ヴォールト状天井である（写真 I-3-23）。

(d) 僧房窟

ゴルヴィの僧房窟の平面は玄関ロビーと房室、そして玄関ロビーとは2本の柱で仕切られた矩形平面の部屋（2柱室）という3つのタイプの部屋で構成されており、その組合せによって次の5つの平面パターンを見出すことができる。①房室のみ（12例）②玄関ロビー+房室（13例）③玄関ロビー+2柱室+房室（3例）（図6）④玄関ロビー+2柱室（1例）⑤玄関ロビーのみ（1例）である。一般に玄関ロビーは左右に長い廊下状のもので、ほとんどが戸口を唯一の開口部とした暗い空間となっているが、外に面して窓を持つもの（2例）や2本の柱を有する大きな開口を持つもの（3例）もある。また、この玄関ロビーの端部にベッドを彫り出す場合が多い²⁸⁾（写真 I-3-24）。⑤のパターンは玄関ロビーの一部にベッドを設けているもの（第36窟）である。なお、②に含めたものの内、第3窟と第6窟の平面は幾らか特殊である。第3窟は第2窟の左前方の壁面に2層にわたり開窟されている。その下層は玄関ロビーとその奥壁中央から直角方向に開けられた奥に長い部屋の2つの部屋を基本とした空間を有し、平面形ではT字形を示している。この2つの部屋は共に円筒ヴォールト状天井を持つ。そして玄関ロビーと奥の細長い部屋はそれぞれ一つの房室を開けている。また奥の部屋の側壁の一部を彫り、ベッドを造り出している。第3窟上層はトンネル状の廊下の先に比較的広い矩形の部屋を開け、外部に面した南側には大きな開口を持つ。その部屋の北側壁に沿ってベッドを掘り出している。またトンネル状の廊下の手前にはベッドを有する矩形の部屋が造られ、その空間からは更に房室を開けている。ただし下層上層共に②の平面パターンを基本としたものと考えられる。第6窟は開放的な玄関ロビーの奥壁からはベッドを持つ部屋を、そして玄関ロビーの左端部から房室を開けるといふ平面構成である。これも第3窟上下層と同様に玄関ロビー以外にベッドを設けた僧房窟である。

なお、その他に丘の北面の石窟の中に円筒ヴォールト状天井を有する矩形部屋のみ
の石窟（第34、45窟）がある。前者は部屋の奥端部の床面を若干高めた座を設け、
後者（写真 I-3-25）は側壁から人が座れるほどの大きさの空間的なニッチを開けて
いる。円筒ヴォールト状天井を有していることを考慮して、特殊な僧房か、小規模な

集会ホールとして機能したものと考えられよう。

1-4. ビンナヤガ仏教石窟群²⁹⁾ (図7)

コルヴィ仏教石窟群から北東へ8kmの地点に位置するラテライトの丘の南面に開窟されている(写真I-3-26, 写真I-3-27)。石窟の数は確認された範囲で20ほどである。なおASIによる石窟の番号付はなされていないため、ここでも議論する石窟について便宜的にBI-a~hの番号を与える。

(a) ストーパー

石窟空間内にストーパーを収めた石窟は無いが、露天丸彫りストーパーが3つある。その内、丘の南面の中央位置にあるBI-g(写真I-3-28)はコルヴィ第2窟同様にポーチと内部祠堂を有するストーパー形祠堂³⁰⁾で、規模及びロケーションから石窟群の中心と考えられるものである(写真I-3-29)。東を正面としている点もコルヴィ第2窟と同じであるが、浮彫装飾が幾分簡素である(写真I-3-30)。また最も西にあるBI-bは祠堂を持たないものではあるが、円筒形ドラムの東面にのみチャイティヤ・アーチ浮彫を刻むことから判断して、これも同様に東向きに造られたと考えられる(写真I-3-31)。残りの一つは無装飾の小さなものである。

(b) ブッダ像祠堂

祠堂として機能したと思われるBI-dがある(写真I-3-32)。それは横長の玄関ロビーと奥壁に沿って台座を設けた部屋の2つの部屋からなり、共に円筒ヴォールト状(ただし前者は間口方向、後者は奥行き方向の円筒ヴォールト)の天井を成形している。なお台座上には何も遺っていない(写真I-3-33)。

(c) 集会ホール

この石窟群にはコルヴィ第10窟のような、房室を持たない独立した集会ホールは見つかっていない。ただし、左右に長い玄関ロビー(両端に房室)と平面上正方形を成すように並べられた4本の柱を含む比較的大きなホール(その左右側壁から各1個の房室)によって構成された僧房窟BI-a³¹⁾がこの石窟群の西端近くにある(写真I-3-34)。

(d) 僧房窟

ビンナヤガの僧房窟もコルヴィの僧房窟に見られるものと同じ3タイプの部屋(房

室、玄関ロビー、2柱室)の組合せで成り立っている。その組合せパターンは①房室のみ②玄関ロビー+房室(例: BI-f) (写真 I-3-35) ③玄関ロビー+2柱室+房室、の3つである。ただし①②がほとんどで、③は2例しかない。BI-hはストゥーパ形祠堂 BI-gの左前方に刻まれたもので、玄関ロビー(両端に房室)とその奥の2柱室(左端に房室、右端にベッド)から成る。BI-eは祠堂 BI-dの左前方の壁面に刻まれた石窟で、玄関ロビー(天井形が円筒ヴォールト状)で奥に2柱室(両端に房室)から成り、平面形が左右対称である(写真 I-3-36)。

第2節 西マールワール地方の仏教石窟の平面形式

2-1. ストゥーパ・チャイティヤ窟・ブッダ像祠堂

西マールワール地方の仏教石窟群で見られるストゥーパに関わる石窟の平面形式は、ブッダ像との組み合わせと関係して、非常に多様である。まずストゥーパが、石窟空間内に刻み出したものと、露天に丸彫りされたものとの、置かれる位置によって大別される点について考察してみよう。前者は更に2つの形式に分けることができる。奥端部にストゥーパを置き、その前方にホールを有するものでチャイティヤ窟として定義しうるものと、房室の中にストゥーパを刻み出したのみの小さなものである。

チャイティヤ窟に定義しうるストゥーパとホールを組み合わせた石窟はダムナール第9窟、第12窟やポラドゥンガル PO-aで見られる。これらの共通した特徴はストゥーパを配している奥端部とストゥーパ前方のホールとの間で空間表現に極端な違いがあった点である。つまりストゥーパ前方の空間は、円筒ヴォールト状天井に垂木状のリブ³²⁾、柱やアーチ梁状の表現等の建築構造的細部が、たとえ装飾だとしても、表現されるのに対し、ストゥーパの周囲は不完全な半ドーム形で、積極的な空間表現も見られないのである。西デッカン地方のチャイティヤ窟の場合では、身廊と側廊とを区別している列柱の柱頭表現等に関してストゥーパの前後で変化をつける場合もない訳ではないが、天井表現は一貫して木構造を写した垂木を刻み出すなど、空間としての統一性が計られている。西マールワール地方と西デッカン地方のチャイティヤ窟の間に見られるこのような違いは、無論刻まれている岩の性質が細かい彫刻に適してい

るか否かにも関係する部分も考えられない訳では無いが、本質的な部分では、チャイティヤ窟の原形の違いによるものと指摘される。つまり西デッカン地方のチャイティヤ窟の場合は木造で造られていたチャイティヤ堂の空間を原形として、それを岩の中に実現したと考えられる一方で、西マールワール地方の場合では、ストゥーパ自体の原形はあったが、それを含む空間の構築的な原形を持たなかったと考えられるのである。そして、もし構築されたチャイティヤ堂を原形とするならば、ダムナール第12窟チャイティヤ窟が丸彫りされた際、その外観に構築された建築の表現が為されてもよいと思われるのだが、実際にはそうではないのである。この地方では、サーンチーの大ストゥーパをはじめとする構築的な露天のストゥーパが紀元前から成立しており、ストゥーパを建築空間内に祠ること自体一般的でなかった証拠と捉えることができよう。

ただしストゥーパ前方のホールでは積極的な空間表現が見られ、そこには具体的な空間に対するイメージが実現されていると考えるべきであろう。したがってダムナールやポラドゥンガルに見られる西マールワール地方のチャイティヤ窟は露天のストゥーパと建築的なホールを組み合わせた形式と捉えることができよう。

小さな房室内にストゥーパを刻み出したものはダムナールのみで見られるが、これらもストゥーパを含んだ直方体の空間に建築的な表現は全く皆無で、ストゥーパ実現の手段として石窟という形式が採用されているのみである。決して特定の建築空間の実現を指向したものとは到底考えられない。

以上のことから、この地方の仏教石窟群では、石窟内部に実現されたストゥーパも、露天に丸彫りされたストゥーパも、その意味においては差がないと考えられ、そこに露天丸彫りストゥーパと石窟内に収められるストゥーパの両者が併存する理由を見つけることができる。なお、石窟内部にストゥーパを収めたチャイティヤ窟を中心とする石窟群（ダムナール・ポラドゥンガル）と露天ストゥーパを中心とする石窟群（コルヴィ・ビンナヤガ）とに分けられる点は、各石窟群間におけるストゥーパとブッダ像の立場の違いを表したものと考えられる。時代的な差あるいは宗派の違いと関係したものと考えられる。

この地方の仏教石窟のストゥーパのもう一つの特徴は、ブッダ像と様々なレヴェルで関わっていることである。ストゥーパ本体に表れているヴァリエーションには、台

基や円筒形ドラムの側面に小さなニッチを設けてブツダ像（あるいはストゥーバ）を収めたもの、ストゥーバの前面にそのままブツダ像を刻み出したもの、そして空間的なブツダ像祠堂を有するもの、すなわちストゥーバ形祠堂の3つのタイプがある。1つ目のタイプのニッチを有するものは、ダムナール第14窟の左隣の小窟内のものやコルヴィの北面に面した露天ストゥーバ、ピンナヤガの最西部にある露天ストゥーバでも見られるが、主体はストゥーバであり、装飾として小さなニッチが加わったものと捉えられる³³¹。しかしながらダムナール第12窟右廊に開けられた石窟内に唯一見られる2つ目のタイプのものはストゥーバ前面一杯にブツダ像を刻み出し、明らかにブツダ像が中心のストゥーバとなっているのである³⁴¹。つまり2つ目のタイプはストゥーバの持つ重要性が1つ目のものより小さいと見ることができるだろう。ただし以上の2つは石窟の平面形式にではなく、ストゥーバに関わる事柄である。しかし3つ目のタイプは、単独で彫られているブツダ像祠堂の平面形式とも関わり、ここでの議論の対象として重要である。

まずこれらのストゥーバ形祠堂の平面形式で重要な点は、コルヴィ第9窟を除く総てのものでは、方形であるストゥーバ台基平面のほぼ中央にブツダ像が置かれるように祠堂空間が造られている点である。構築されたストゥーバでは仏舎利に代表される聖遺物を中心部に収めていたが、それと同じ位置にブツダ像を配しているのである。それは、取りも直さず、ストゥーバに収めるべき仏舎利に相当するものとしてブツダ像が位置づけられていた可能性を示している。もしそうならば、ブツダ像を収める祠堂建築のデザインにストゥーバが採用されたのは至極当然であろう。そしてコルヴィ第2窟の場合は、祠堂の入口にポーチを備え³⁵¹、擬窓を表現する等、ブツダ像を祠る「建築」の外観デザインとなるように、ストゥーバを適応させているのである。

ストゥーバと組み合わせられないブツダ像祠堂は、ダムナール第14窟や第12窟左廊でも見ることができるが、コルヴィで5例と最も多く造られている。ただしこれらはコルヴィの丘の東面から北面にかけて見られるのみで、ストゥーバと組み合わせられたものがこの地で最初に石窟が造られ始めたと考えられる南面に集中している点と対比される。つまりデザインされた外観を持たない単独の祠堂の方がストゥーバ形祠堂より後発であると考えられ、ストゥーバあつてのブツダ像が、ストゥーバから離れて単

独で意味を有するようになった、崇拜形式の変化の過程を示している可能性も考えられるのである。なお、ブツダ像祠堂自体の構造は非常に単純であり、房室内奥壁に沿って台座（多くはモールディングがある）を彫り出し、その上にブツダ像を配すものである。その天井形には平天井と円筒ヴォールト状天井の2種類見られる。幾つかの祠堂は玄関ロビーを有しており、その天井は円筒ヴォールト状である。またブツダ像は無くとも、台座を有している点からブツダ像祠堂と考えられる石窟はピンナヤガやケジャディア・ボープで見られた。この場合ブツダ像は、細かな彫刻に適さないラテライトから直接彫らないで、別材から造られて収められたと考えられる³⁶⁾。

2-2. 集会ホール

集会ホールと考えられる石窟の平面形式には、ケジャディア・ボープのKB-fの柱を全く持たないもの、ダムナール第11窟の4本の柱を有するもの（以下、4柱ホールと記述）、そしてコルヴィ第10、15窟の2本の列柱による3廊形式の横長の大ホール（以下、多柱ホールと記述）の、3つのタイプが挙げられる。そしてホール側壁から祠堂や房室を開けたものまで含めれば、ダムナール第7窟（祠堂、房室付）やピンナヤガBI-a（房室付）も4柱ホールを基本とする石窟である。なお、ポラドゥンガルでは独立した集会ホールは確認できないが、大きな方形ホールから僧房を展開するという、いわゆるヴィハーラ形式の石窟が多く見られた。その内、PO-fは柱の残存状況から判断して、4柱ホールであった可能性もある。

4柱ホールと多柱ホールの空間構成上で重要なのは、前廊と、柱の刻まれたその奥の空間との間で天井表現を変える傾向のある点である。ダムナール第7、11窟とピンナヤガBI-aの4柱ホールでは前廊部分の天井に梁形は刻まれない。特にBI-aは、前廊部分のみ奥の空間より左右の幅が長くなっている。コルヴィ第15窟の多柱ホールでは、3つ並んだ列柱廊の内、前廊の天井のみ平天井であるが、奥2本の列柱廊は円筒ヴォールト状天井となっている。つまり前廊部分とその奥に展開する柱のある空間との間には前列の柱により境界が造られ、空間の性質の違いが予想されるのである。

2-3. 僧房窟

この地方の僧房窟の多くは西デッカン地方で見られるような大きな列柱ホールと多くの房室を持ったヴィハーラ窟にはほど遠い、1～3個の部屋の組合せで成り立つ小

さなものである。その理由は開窟されたラテライトの強度に関係したものと考えられ、特に大ホール指向の強いポラドゥンガル石窟群の多くの石窟が、前述したように、天井を崩落させていることから判断すれば、大ホールを実現するには不向きだったのであろう。そしてそれらは横長の玄関ロビー、房室、矩形平面の2柱室という3タイプの部屋の組合せで成り立ち、ほとんどが左右非対称の平面形式を採っている。

まず、房室一室のみで完結する僧房窟も多いが、これの空間構成については特に議論する必要は無かろう。ただし幾つかはヴォールト状天井持つ場合がある。

そして最も基本的な僧房窟の平面形式は玄関ロビーと房室の組み合わせで成り立つものである。平面は非対称で、石窟入口と玄関ロビーを介して開けられた房室の入口とが一線に並ぶことはない。玄関ロビーの多くが外からの入口のみを内部に明かりを取り入れる開口としているが、小窓を入口両側に設けるもの、また柱のある大きな入口を有するもの（ダムナール第6窟、コルヴィ第6窟など）も少ないながら、見られる。また玄関ロビーにベッドを刻む例が多々見られる。なお、玄関ロビーには奥に長いものと左右に長いものとの2種類がある。前者はコルヴィ石窟群の北面に集中してみられ、前者と後者の成立の時代的な違いによるものと考えられる。

もう一つの僧房窟の平面パターンは、玄関ロビーと2柱室そして房室の3つの部屋で構成されたものである。そしてそのタイプのほとんどが2柱室から房室を開け、その房室の位置は2柱室の横長矩形の短い辺、つまり2つの柱の並んだ長い辺に対する直角な面が選ばれており、この場合も直接房室内に外光の入らない様になっている。2柱室自体の性質や機能ははっきりしないが、そのほとんどが房室と結びついていることから、ブツ像やストゥーパ等の崇拜対象物を収めた空間とは考えにくい。ただし2柱室と関係なく玄関ロビーから直接房室を設けるものが確認され、更にコルヴィ第1窟のように房室を持たず、玄関ロビーと2柱室のみで成り立っているものがあり、単に房室の前室的な空間と言うよりは、房室で生活していた比丘の活動と関係した、独立した機能を有する空間と考えるべきであろう。

また左右対称の平面形態を有した僧房窟が少ないながら見られる。ケジャディア・ポープ KB-cは奥に長い玄関ロビーの奥端部にニッチ、左右側壁からは房室を左右対称に設けたものである。一方、コルヴィ第1窟とピンナヤガ BI-eでは、祠堂やニッ

チの代わりに、横長矩形の玄関ロビーの奥に2柱室が置かれている。つまりこれらの石窟では、2柱室が空間構成上の中心となっていると考えられよう。このことが僧房窟内における2柱室の機能の重要性の変化によるものなのか、単純に幾何学上のものなのかは定かではないが、少なくとも小規模な僧房窟の玄関ホール+2柱室の組み合わせは、2-2.で述べた集会ホールにおける前廊部分とその奥の空間との空間表現の違いと併せて考えれば、集会ホールの成り立ちと関係していると考えられるのである。

2-4.集会ホールの成り立ちと僧房窟との平面形式(図8)

2-2.および2-3.ではこの地方で見られる集会ホールと僧房窟の平面形式について考察した。集会ホールの4柱ホールや多柱ホールの空間構成上の特徴の一つは、ホール前廊部分と前列柱より奥の空間とは天井の扱いが異なっていたことである。そしてピンナヤガBI-aの前廊部分は奥の空間より左右に長く、2-3.で整理した僧房窟のほとんどで見られる玄関ロビーの空間と非常に類似している。更にこのBI-aと左右対称に玄関ホール+2柱室+房室を組み合わせた平面形を有するBI-eを比較すると、前者の前列柱より奥の空間と2柱室が、柱の数は異なるが、平面形式上、非常に近い立場にあると指摘できる。したがって、時間軸上の発展を示すかは定かではないとしても、4柱ホールおよび多柱ホールの平面形式がこの地方で多く見られる玄関ロビー+2柱室の組合せを基礎にして成立したものと考えられるのである。そして同時に2柱室が集会ホールで要求されたものに相当する機能を担っていた空間である可能性が考えられるのである。

2-5.伽藍構成について

ケジャディア・ポーブKB-eはストゥーパと僧房窟とを一つの中庭周りにセットで配したものと見なすことができる。また、コルヴィ第2窟と第3窟(写真I-3-37)、ピンナヤガBI-aとBI-b(写真I-3-38)そしてBI-gとBI-hの3つの組み合わせは、東を正面とするストゥーパの左手の壁面から大きな僧房窟を開けている。コルヴィ第8窟僧房、第9窟ストゥーパ、第10窟集会ホールは一つの組み合わせを示しているかも知れない。また、コルヴィではブツダ像祠堂と集会ホール又は2柱室のある僧房とが対面位置に置かれる例が多い³⁷⁾。第15窟集会ホールと対面する第16窟ブツダ像祠堂の組み合わせ、第26窟と第28窟の組み合わせはその例である。第36窟

と第 37 窟においても、前者は 2 柱室を持たないが、一つの組み合わせを示している可能性がある。またピンナヤガ BI-d と BI-e は、コルヴィのように対面配置ではないが、ブツ像祠堂と 2 柱室を有する僧房窟との組み合わせである。なおポラドゥンガルでは遺跡の状態が悪く、組み合わせは確認できなかった³⁸⁾。

第 2 章でダムナールにおける「伽藍の基本構成」の存在を論じたが、この地方ではストゥーパ（チャイティヤ窟・ブツ像祠堂）と集会ホール、僧房という 3 タイプの石窟による組み合わせの伽藍構成が一般に存在していた可能性が高いのである。

2-6. 石窟群間における傾向の違い

以上、西マールワー地方の仏教石窟群でみられる石窟の平面形式について、ストゥーパ等の崇拝対象物に関わる石窟と集会ホールそして僧房窟に分けて考察したが、どちらかと言えば、共通項を探ることが目的であった。ここではそれを補完する意味で、石窟群間で見られる平面形式の傾向の違いについて考察する。

ダムナールで見られる傾向の一つは、第 7, 9, 11, 12 窟という中心的な石窟では、外部空間と内部の主空間との間に緩衝部分の空間として吹き放ちの列柱ヴェランダを設けていることである。ポラドゥンガルでも、形態は若干異なるが、列柱ヴェランダを主空間の前方に設け、直接内部空間へは入れないような平面形式を採っている。一方、コルヴィ³⁹⁾やピンナヤガ、ケジャディア・ポーブでは外からの入口から直ぐ内部空間へ繋がる形式を標準としており、その代わりに緩衝部分の空間としては非開放的な玄関ロビーが設けられている。

またポラドゥンガルでは西デッカン地方で典型的なヴィハーラ窟タイプの平面を有する石窟が多く見られ、柱のデザイン等を考えれば、この地方の仏教石窟群の内、バーク以南のアジャンターを中心とする西デッカン地方の後期仏教石窟に最も近い特徴を備えたものといえよう。

部屋の天井形に関しても、ダムナールやポラドゥンガルではチャイティヤ窟以外ではほとんど見られなかった円筒ヴォールト状天井が、コルヴィとピンナヤガでは広く使われている。

ストゥーパとブツ像の扱い方も石窟群間で異なる傾向を示している。ダムナールとポラドゥンガルでは、中心的な石窟としてストゥーパを祠ったチャイティヤ窟を据

えている。ここでは明らかにストゥーパは最重要な崇拝対象物となっている。ブツダ像は第12窟左廊と右廊、そして第14窟では13体も集中して見られるが、ストゥーパ周囲に置かれるもので、副次的な立場である。それに対してコルヴィやビンナヤガでは、ストゥーパがブツダ像祠堂の外観デザインとして使われており、またコルヴィではブツダ像祠堂が満遍なく石窟群全体に配されていることなどを考えれば、ブツダ像を中心崇拝物として重要視した石窟群であるといえよう。なお、ケジャディア・ポーブやポラドゥンガルではブツダ像は見られない。

以上のような石窟群間の差異が、時代的な違いを示すのか、それとも各石窟群で行われていた宗教活動の違いを示すものかは、この地方の仏教石窟群成立の歴史的背景のはっきりしないこともあり、容易く判断できる問題ではない。しかしながらダムナル・ポラドゥンガル両石窟群とコルヴィ・ビンナヤガ両石窟群との間では、幾らか異なる造形活動が行われていたと言えそうである。つまり、同じ地方の仏教石窟群であっても、その成立に影響した文化の伝わり方や性質などが異なっている可能性が考えられるのである。とは言っても、一方ではこの地方で共通するデザインの特徴も強く存在する。柱の柱頭のモールディングのデザイン、そしてストゥーパのデザイン、チャイティヤ・アーチ装飾のデザイン等はほとんど全石窟群共通と言ってもよい。これらはこの地方である時期に様式化された形であったと考えられる。そして外観デザインを決める際にはその様式化された形を採用しながら、仏教活動に大きく関わる空間構成決定のレベルでは石窟群によって異なる特徴が与えられたのではないかと考えられるのである。

おわりに

本章では西マールワー地方の仏教石窟の平面形式を取り上げた。まず、この地方のストゥーパに関わる石窟の平面形式には様々なタイプが考えられたが、それは、露天であれ、石窟内であれ、ストゥーパの形を彫り出すためのみに石窟による方法が使われたためであり、構築された木造チャイティヤ堂のような、ストゥーパを空間内に祠するための形式を有した建築を原形に持たなかったと考えられた。また4柱ホールや多

柱ホールといった集会ホールの平面は玄関ロビー+2柱室の組み合わせを持った僧房窟を基本として成立したものと捉えられた。4柱ホールとその奥のストゥーパ祠堂を有するダムナール第7窟の平面は西デッカン地方で見られる祠堂のある後期ヴィハーラ窟に極めて類似していたが、この地方の小さな僧房窟を基本に成立した可能性がある。したがって、もし現在不明確な西マールワール地方の仏教石窟の成立した年代が西デッカン地方の後期仏教石窟より古いならば、後期ヴィハーラ窟の典型ともいえる祠堂を奥に配した列柱ホールのあるヴィハーラ窟さえ、西マールワール地方の僧房窟の平面形式を基本としている可能性もあるのである。また複数の小さな石窟による伽藍の存在からは西北インド・バーミヤンや中国・キジル等の仏教石窟の特徴との関連も考えられるが、さらに考察を必要とし、今後の課題である。

註

1) 第2章では Kholvi と表記したが、インド測量調査局 Survey of India の地図や石窟群を扱った最近の文献では Kolvi に表記統一されているため、本章では訂正した。

2) なお、模式図の作成に当たり、従来の報告書で記された寸法および現地で数カ所当たった柱の太さ、天井高さ等を参考にしている。いずれにしても、本格的な実測調査が待たれる。

3) この石窟群に関する従来の記述には次の2つがある。Luard, C.E., "Gazetteer Gleanings in Central India" *Indian Antiquary* vol. XXIX, 1910, pp.245-246. と *Progress Report of the Archaeological Survey of India, Western Circle (PRASIWC)*, 1918-19, pp.81-82.

4) Luard, *op.cit.*, p.245.

5) Luard, *op.cit.*, p.245.

6) Luard は「西面に位置するチャイティヤ窟は崩壊している」と記述。Luard, *op.cit.*, p.245. また PRASIWC 1918-19 には全く記述されない。

7) 地方では Suraj-Pol-ka-Gupha (=Cave of the Gate of the Sun 「太陽の門の石窟」) と呼ばれていたという。Luard, *op.cit.*, p.245.

8) ただし、未完成なのか、入口とその両脇の窓の3つの縦長の開口が平坦な壁面から

開けられているに留まり、柱や付柱、手摺の表現上の区別が明確にはなされていない。Luard, *op.cit.*, p.245. や PRASIWC, 1918-19, p.82. では、このファサード構成について、戸口とその両側の窓であると記述している。

9) 全体が漆喰で塗り固められているが、この地方特有の方形台基と円筒形ドラム、卵形覆鉢の構成を有している。現在ストゥーパ周囲に三叉等のシヴァのシンボルが確認でき、仏教衰退後にヒンドゥー教シヴァ派の崇拝物リングアとして最近まで崇拝され続けていたと考えられる。

10) 第2章, pp.27-28

11) 柱は高さは2mほどで、直径はおよそ1mである。現在この地の石窟の多くが崩壊していることから判断すれば、開窟当時に既にこの丘の岩質が大きなスパンの石窟空間の天井を支える柱に対する構造上の配慮がなされていたと考えられる。西マールワ地方の南部にあるバグ Bagh 石窟群でも、同様にマッシヴな柱を使い、岩質を補おうとしたと思われる構造上の配慮を見ることができる。また柱のブラケットおよび付柱の蓮華の円形装飾に関してバグ第2窟やアジャンター第2窟等で見られるもの類似している。

12) この石窟群に関する従来の記述は、*Archaeological Survey of India, Annual Reports (ASIAR)*, 1916-17, pp.13-14. と Garde, M.B., *Archaeology in Gwalior*, pp.96-98. がある。

13) ASIAR, 1916-17, pp.13-14.

14) 現地で記された番号は BC-16 で、たぶん Buddhist Cave の第16窟ということの意味している。

15) 円筒形のドラムを上下に2つ重ねたものであるが、この地方で一般的に見られる丸線形で構成された大きなモールディングは有しない。アング部分より上は欠如しているが、後述のゴルヴィの丸彫りストゥーパ同様、別材で造られたと考えられる。

16) 現在柱は柱頭の一部を除いて失われている。

17) この石窟群を扱った従来の主な記述には、Impey, E., "Description of the Caves of Koolvee, in Malwa" *Journal of Bombay Branch Royal Asiatic Society* Vol. V, 1853, pp.336-349., Fergusson, J., *History of Indian and Eastern Architecture*, New Delhi, 2nd ed., 1972, pp.166-167., Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India* (CTI), New Delhi, 1880,

pp.395-398., Kail, O. C., *Buddhist Cave Temples of India* (BCTI), Bombay, 1975, pp.58-60.,
Mitra, D., *Buddhist Monuments* (BM), Calcutta, pp.136-139., *Archaeological Survey of India,
Reports by A. Cunningham*, vol. II (ASC II), 1864-65, pp.280-288., Tadgell, C., *The History of
Architecture in India: From the Dawn of Civilization to the End of the Raj* (HAD), New Delhi,
1990, p.50&p.313, n.11. がある。

18) この図は ASC II, plate L X X X IVを基に作成したものである。

19) Impey はコルヴィの特徴の一つにチャイティヤ窟の欠如を挙げている。 Impey,
op.cit., p.340.

20) アンダ部分はレンガもしくは石等の別材で造られたと考えられている。 Mitra,
BM, p.136.

21) pralambapadasana buddha のこと。 Spink 氏は ダムナールやコルヴィの石窟群をアジ
ャンターのヴァーカータカ期 (5c. 末) の石窟と同時期のものと考えているが、その
決め手の一つとして、このブツダ倚像の存在を挙げている。 Spink, Walter M., "Bagh: A
Study" *Archives of Asian Art* 30, 1976-77, p.62.

22) 正確にはガヴァークシャ gavaksa と呼ぶべきもの。

23) dhyana mudra buddha のこと。

24) ストーパー形のブツダ像祠堂を石窟空間内に持つものはコルヴィ第7窟以外他に
ないが、ブツダ像を収めた祠堂を石窟空間内に独立して刻みだし、その周囲を繞道と
した石窟はオーランガバード第7窟、エローラ第8窟等で見られる。またアジャンタ
ー第19窟や第26窟ではストーパーの前部のニッチ内にブツダ像を祠するという形式を
有しているけれども、これはストーパーの表面にブツダ像が張り付いた形のものであ
り、ストーパー自体を器としていない点に違いがある。

25) ダムナールでは台基側面を付柱で壁面分割しニッチを設けた例が丘の西面に刻ま
れた第26窟前にある。また露天ではなくセル内に刻まれたものまで含めれば、第14
窟の左隣の小窟内に、円筒形ドラムの南側面にチャイティヤ・アーチ形のニッチを設
け、そのニッチ内にブツダ座像を刻んだストーパーの例がある。

26) 第10窟と第15窟は形態上全く同じではない。第15窟は石窟への入口にポーチを
設けその両脇には窓を開けるなど、この仏教石窟群最初期の石窟と考えられる第2窟

ストゥーパ形祠堂の正面ファサードに極めて近い表現を有しているのに対し、第10窟の方はポーチを持たない代わりに入口を枠取る2本の付柱、そして入口のまぐさ石に相当する部分には大きなチャイティヤ・アーチをレリーフで表している。また両者共2つの柱廊で横長の矩形ホールを3つに分割しているが、その柱列を構成する柱の数は第10窟では4本であるのに対し、第15窟では6本である。

27) Impey, *op.cit.*, p.340. や ASC II, p.285. など。非常によく似た平面を有する石窟がバグ第5窟にもある。これに対しては食堂として機能したのではないかと考える説がある。 Marshall, J. et al., *The Bagh Caves in Gwalior State*, London, 1927, pp.14-15.

28) ボンベイ近郊カンヘリーやクダーの僧房窟で同じような平面を持つものが比較的多く見られる。ただし西マールワール地方の仏教石窟との関係は不明である。

29) この石窟群について記述している文献には Mitra, BM, pp.139-140. と Kail, BCTI, p.60., Tadgell, HAI, p.50., ASIAR 1922-23, reprinted ed., New Delhi, 1990, p.124. がある。なお Mitra, Tadgell, Kail はこの石窟群の名をピンナヤガ Binnayaga と示しているため、本稿でもその名で表記するが、ASIAR 1922-23 では Binaika, また Marshall, J. et al., *op.cit.*, Sketch Map of Malwa では Benaiga と示されている。

30) このストゥーパ形祠堂はコルヴィ第2窟とはデザイン上異なる点も少なくない。例えば、コルヴィ第2窟は大きなチャイティヤ・アーチ装飾の内側にストゥーパの高浮彫を有するが、ピンナヤガの方は蓮華の浮彫を有している点、またポーチの取り付け方に関してもコルヴィ第2窟はストゥーパ本体と調和するように取り付けられているのに対して、ピンナヤガのこの例はストゥーパ本体とポーチが独立している点などが挙げられる。概してピンナヤガの方がストゥーパの本来の形を保持している。

31) この僧房窟は ASIAR 1922-23, p.124. の中で「柱や側室 side chamber を含む特に空間的な石窟」と記述されたものと考えられるが、「集会ホールとして使われたであろう」と判断されている。

32) 実際には溝を刻むことによって造られたもので、リブを刻み出したというものではないが、明らかに西デカン地方のチャイティヤ窟で見られる垂木状のリブを意識したものと考えられる。

33) 台基および円筒形ドラムの側面にニッチを設ける構築的ストゥーパの例は西北イ

ンド・ガンダーラ地方及びその地方と関係の深い南パキスタンのシンド Sind 地方で多く見られる。そして西マールワール地方に近いグジャラート Gujarat 州デヴニモリ Devnimori ではガンダーラ様式のストゥーパが発掘されており、西マールワール地方とガンダーラ地方との関係を考える上で重要であろう。サーンチー大ストゥーパでは台基側面の東西南北の位置に、5c. の後付けではあるが、ブツダ像を配している。これはストゥーパ表面にブツダ像を表現するという点において、ストゥーパ表面にニッチを設けるものと同等に捉えることが可能である。ただし、中北インド・マトゥラーや東インド・ボドガヤー等で見られる小さな奉献ストゥーパの中にもニッチを持つものが多く見られることなどから、その由来を辿るのは簡単ではない。

34) 背後のストゥーパを隠すほどのブツダ像を前部に刻む例には、他にアジャンター第 11 窟、エローラ第 10 窟のものが挙げられる。

35) アジャンター第 19、26 窟で見られるストゥーパでは前面にニッチを含んだ突出部をポーチ状に表現している。ただし、これも表面上のレリーフ表現に留まっており、コルヴィなどのストゥーパ形祠堂とは大きく異なっている。

36) 例えば、ダムナールの丘に丸彫りされた大きなヒンドゥー教寺院ダルマナータ寺の祠堂内のかつての本尊ヴィシュヌ像は別材で造られたものが収められている。

37) Mitra 女史は既にコルヴィにおけるブツダ像祠堂が別の石窟の対面位置にしばしば置かれる点を指摘している。Mitra, BM, p.137.

38) ポラドゥンガルでは祠堂を奥に有するヴィハーラ窟形式のものが多く、アジャンターのヴァーカータカ期のヴィハーラ窟同様、一つの石窟の中に祠堂、集会ホール、僧房の組合せたものと見なすことができるかも知れない。

39) コルヴィ第 2 窟の背後（西側）に横たわっている石窟の残骸は、ダムナールの列柱ヴェランダに非常に類似した建築細部を示している。これはダムナールとコルヴィ間の影響関係を示す貴重な資料となることが予想されるが、詳しい現地調査を待たねばならない。

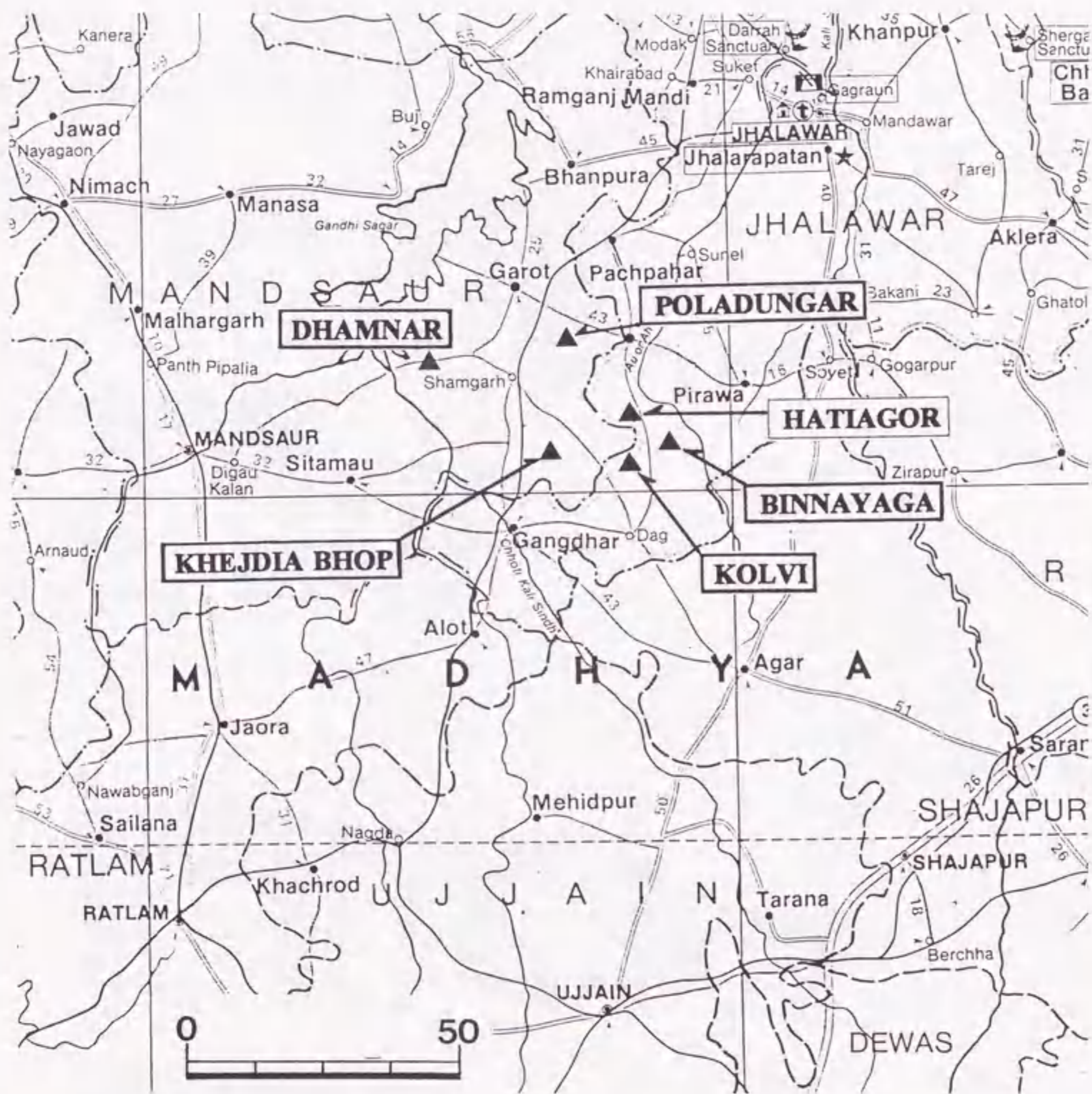


図1 西マールワール地方の仏教石窟群

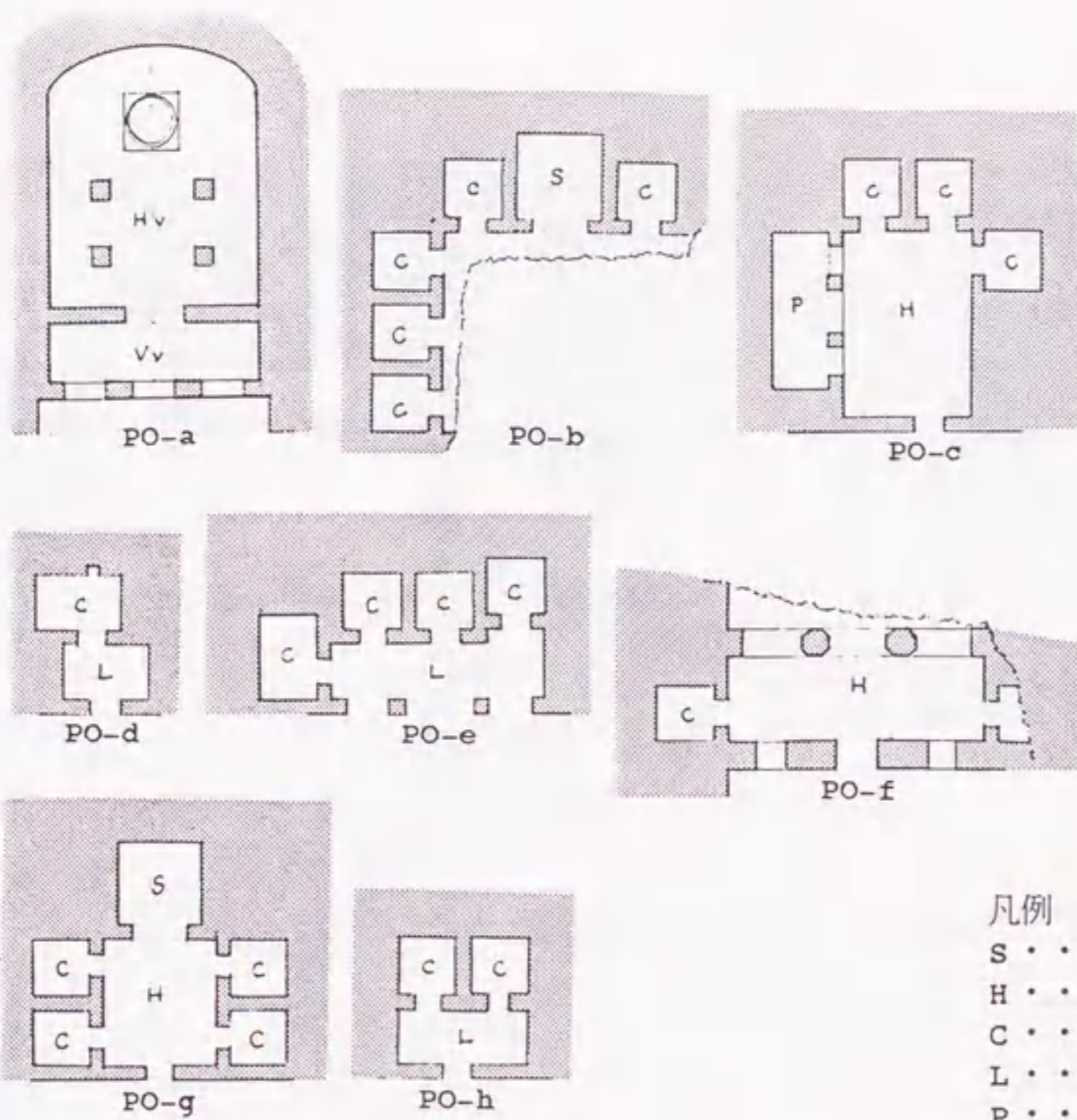


図2 ポラドゥンガル仏教石窟の平面模式図

- 凡例
- S . . . 祠堂
 - H . . . ホール
 - C . . . 房室
 - L . . . 玄関ロビー
 - P . . . 2柱室
 - V . . . 列柱ヴェランダ
 - B . . . ベッド
 - N . . . ニッチ
 - v . . . 円筒ヴォールト状天井

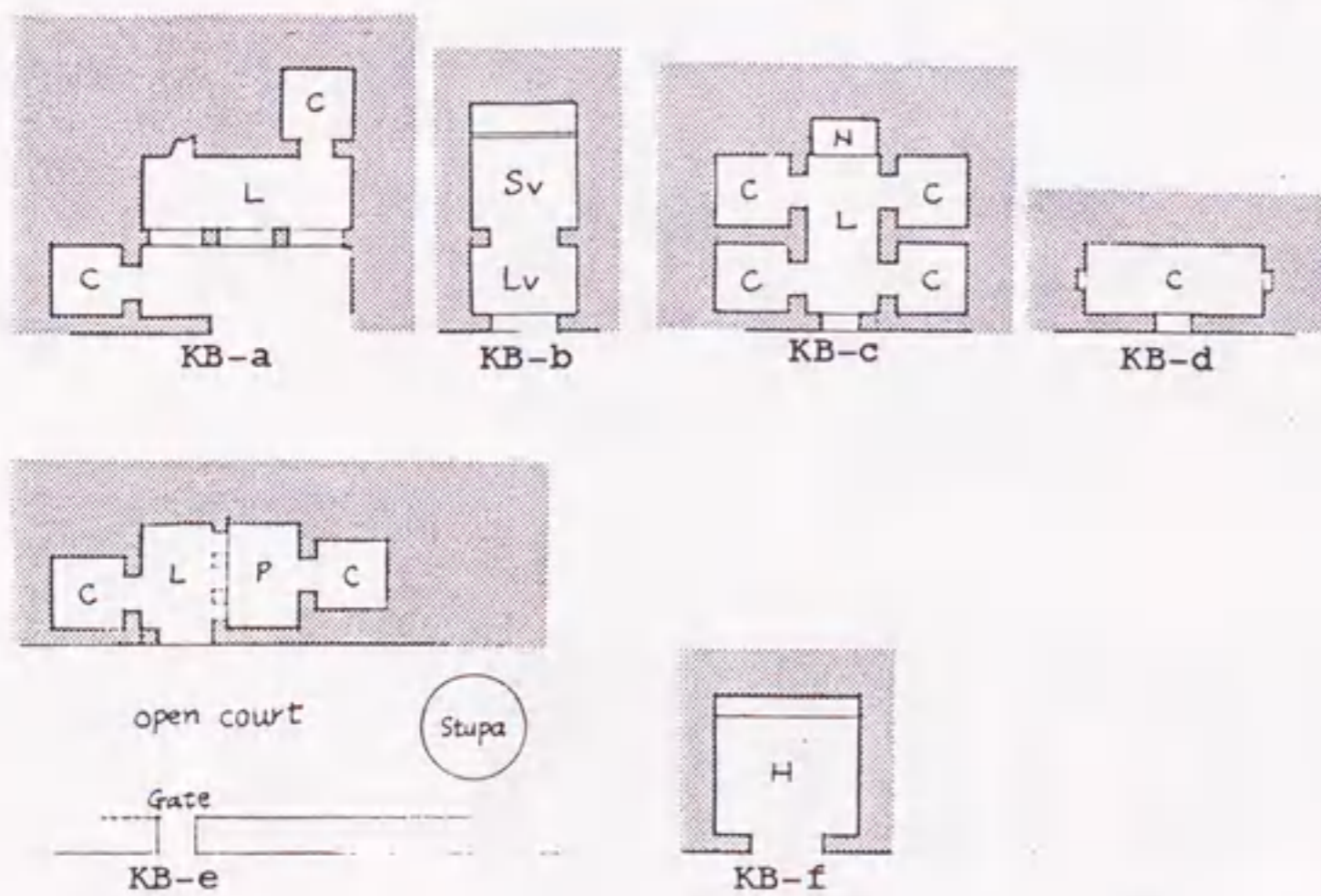


図3 ケジャディア・ボープ仏教石窟の平面模式図

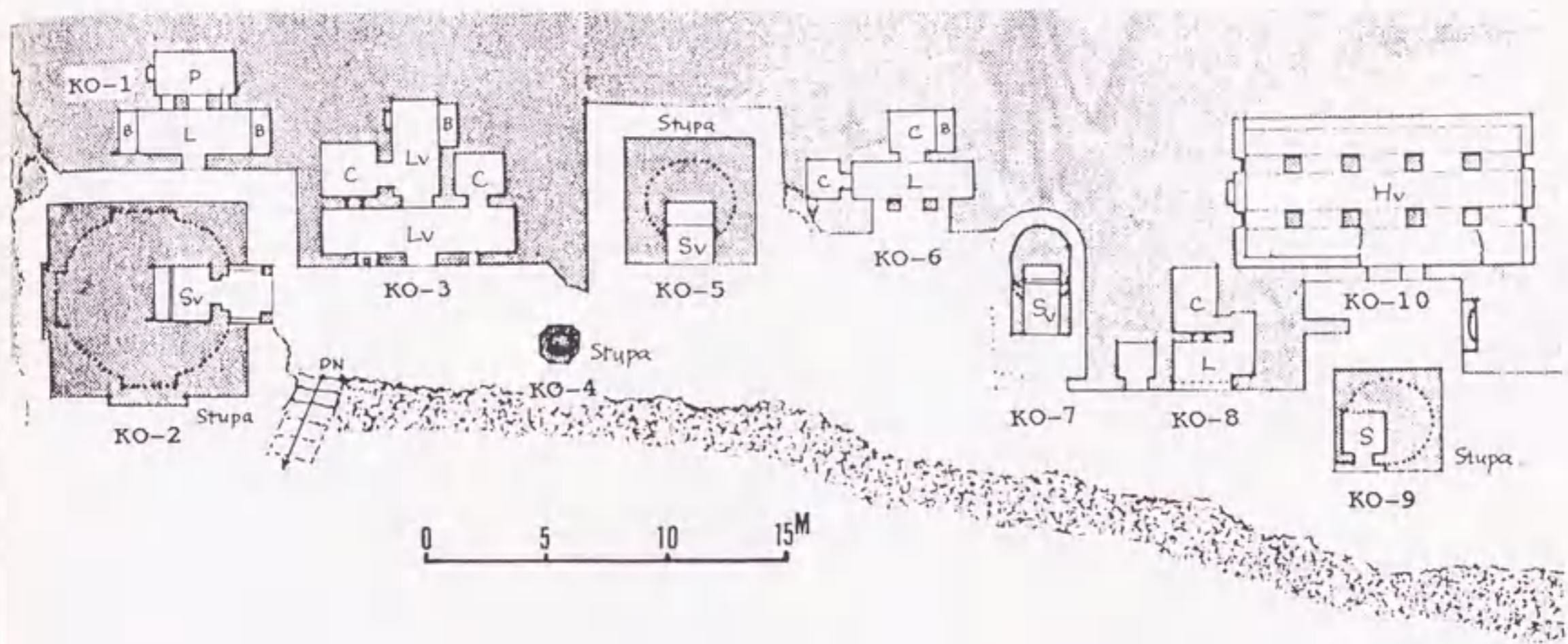


図4 コルヴィ仏教石窟群南面石窟(第1~10窟)平面と配置

- 凡例
- S・・・祠堂
 - H・・・ホール
 - C・・・房室
 - L・・・玄関ロビー
 - P・・・2柱室
 - V・・・列柱ヴェランダ
 - B・・・ベッド
 - N・・・ニッチ
 - v・・・円筒ヴォールト状天井

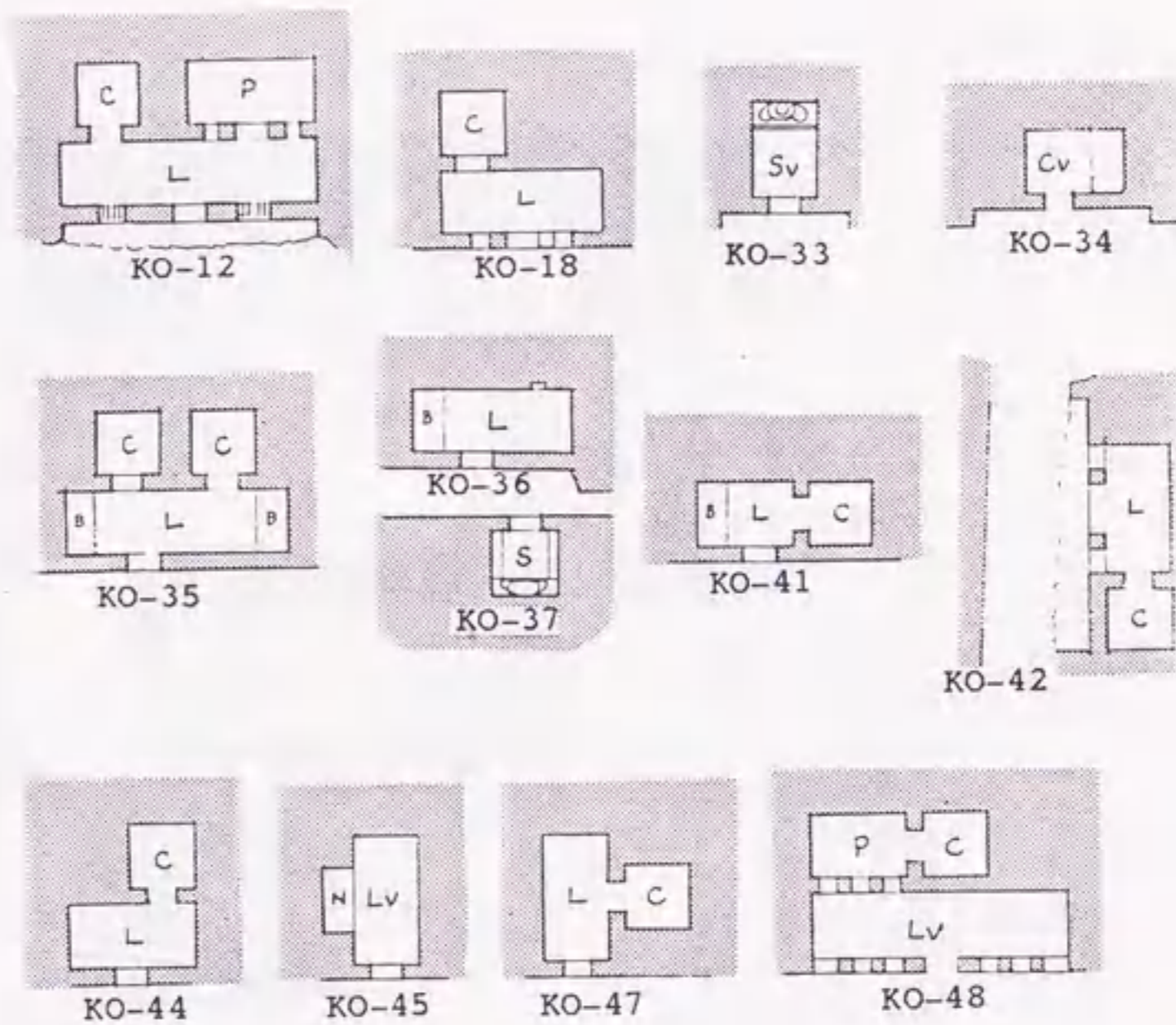


図5 コルヴィ仏教石窟の平面模式図

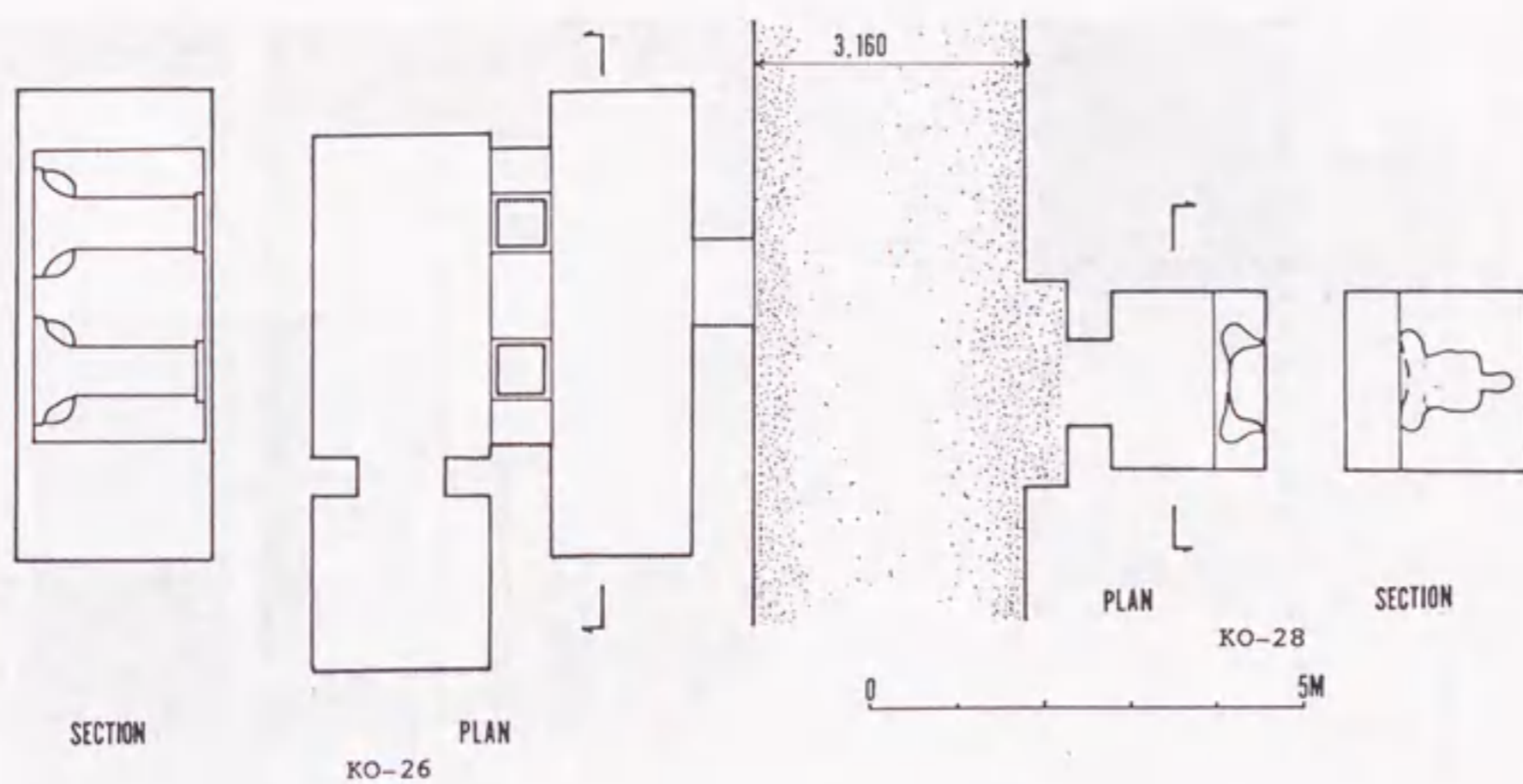


図6 コルヴィ第26窟・第28窟平面実測図

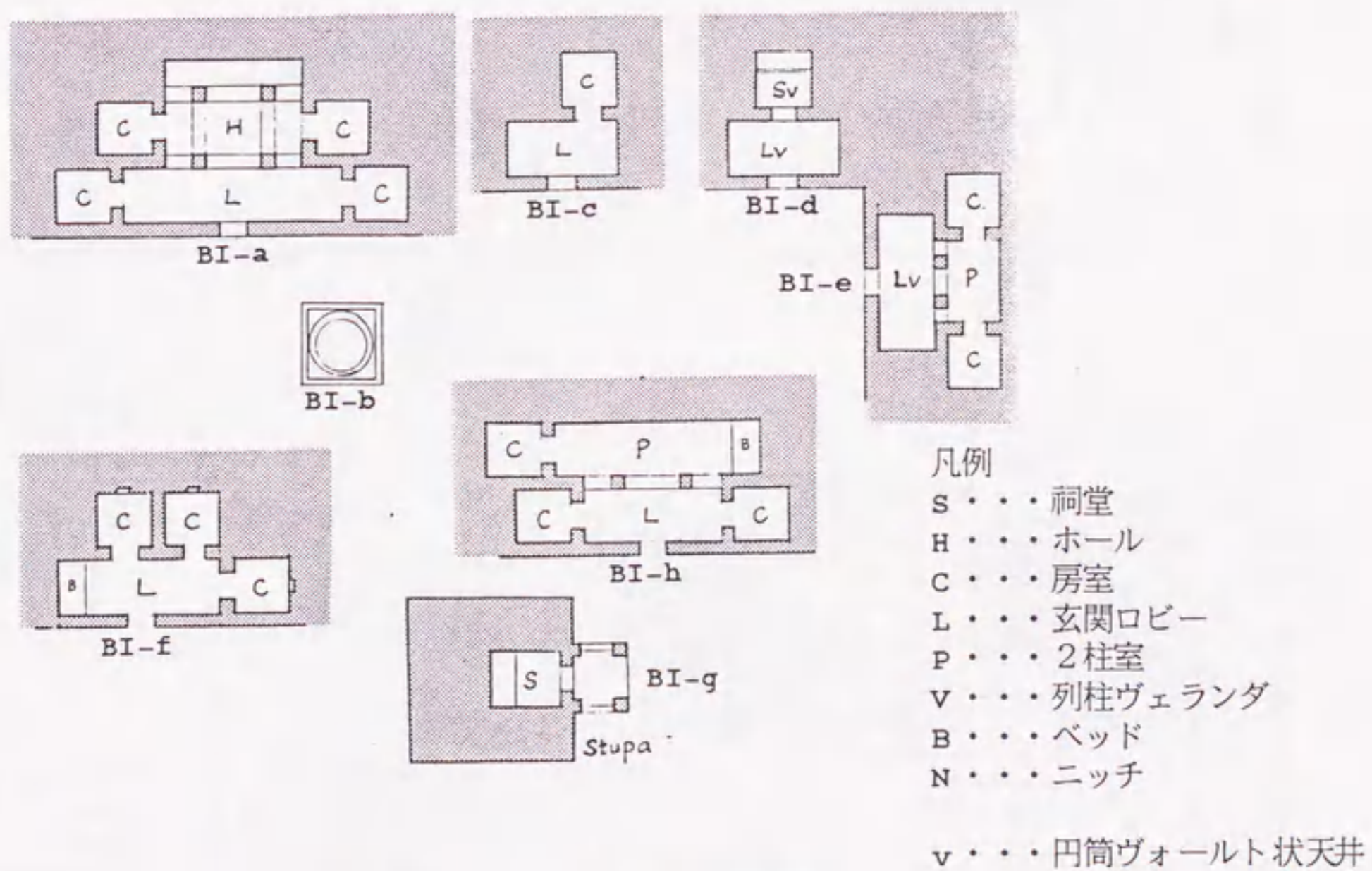
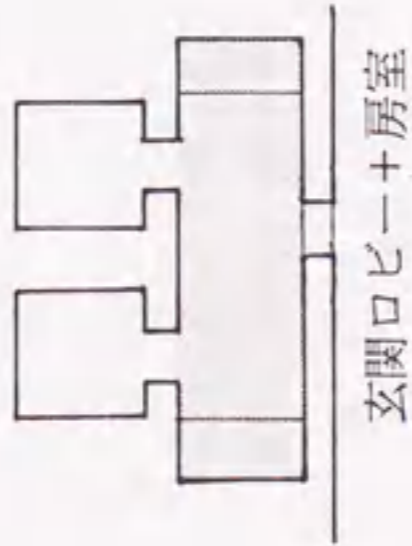
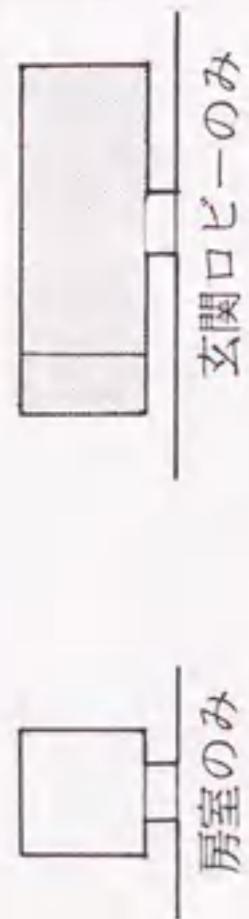
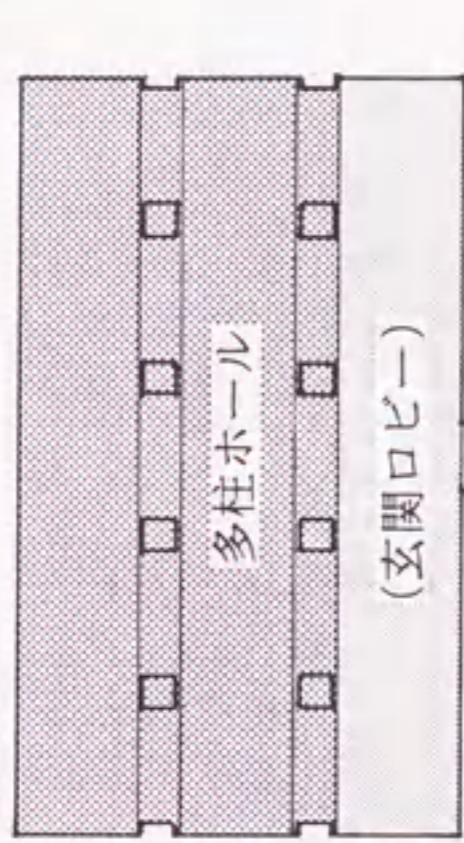


図7 ビンナヤガ仏教石窟の平面模式図

西マールワ地方の僧房窟の平面形式



玄関ロビー+2柱室
→多柱ホール



例：コルヴィ第10窟
多柱ホール

集会ホール

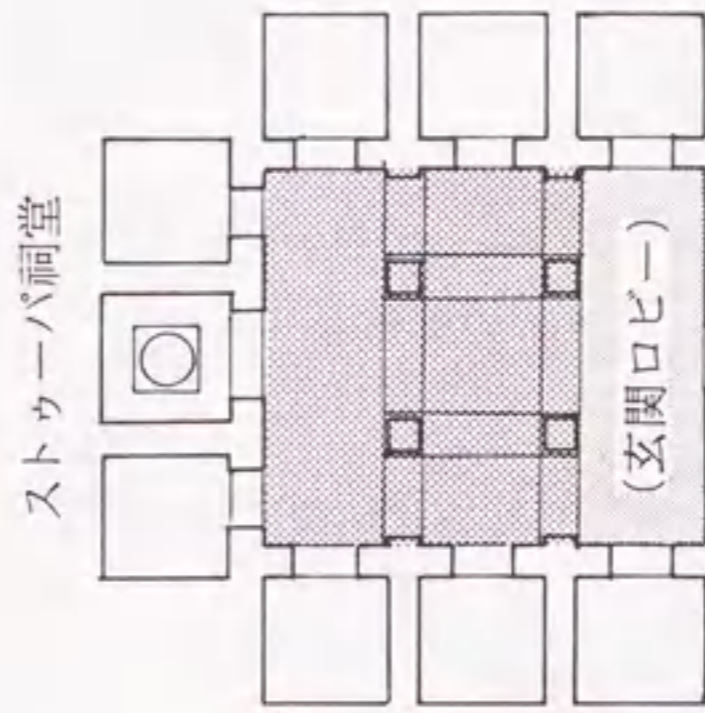
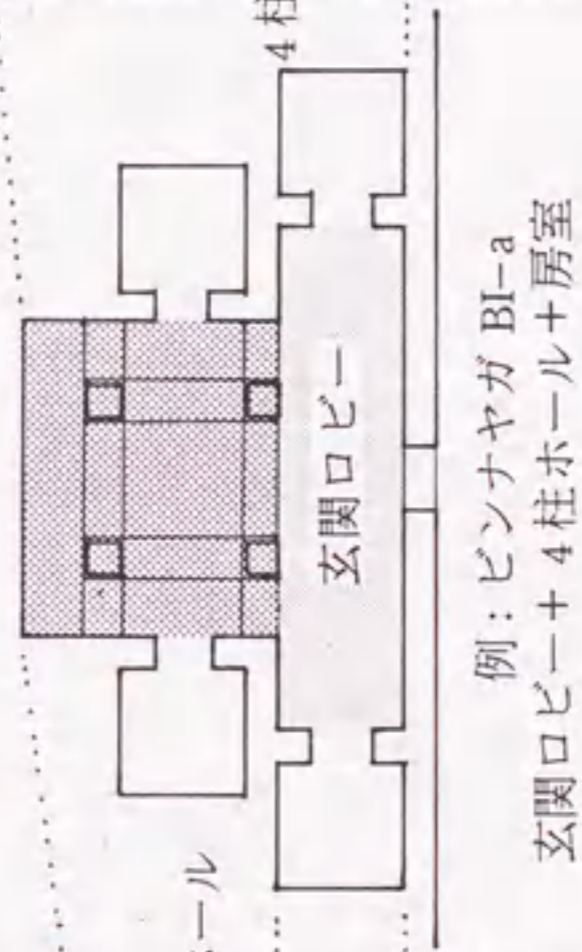
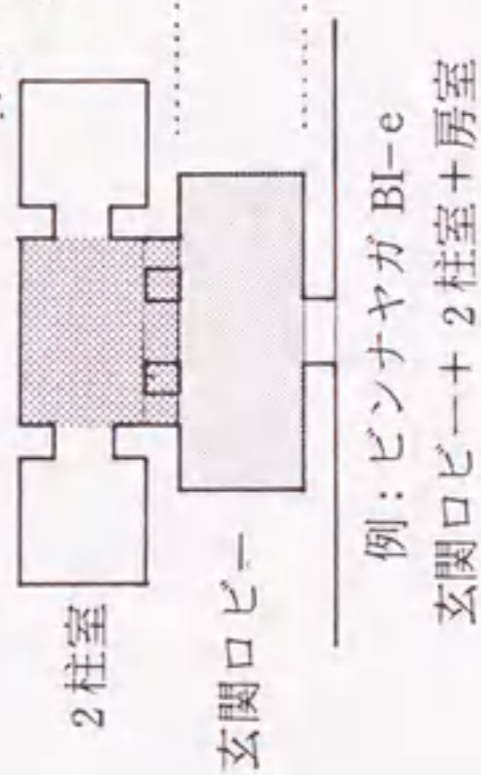
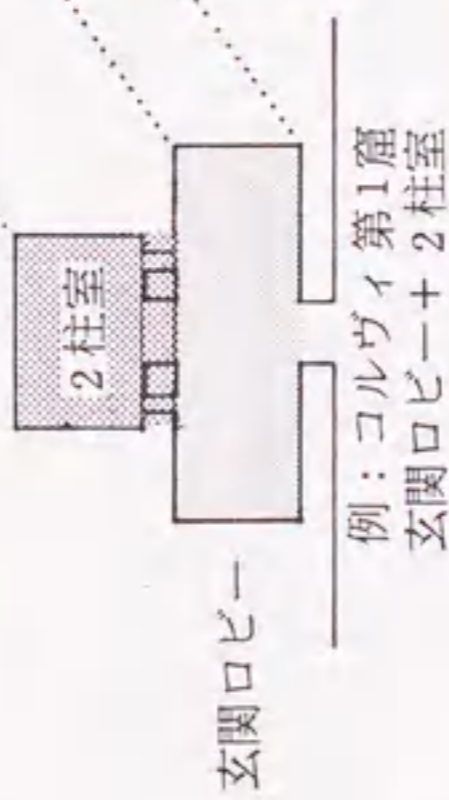


図8 西マールワ地方の僧房窟の平面形式と集会ホールの成り立ち

第Ⅱ部

エローラ仏教石窟の柱と空間

第1章

エローラ仏教石窟の柱のデザインと配列

はじめに

インドの仏教石窟はチャイティヤ窟とヴィハーラ窟とに分かれて紀元前2世紀頃から始まり、発展した。チャイティヤ窟はブッダのシンボルとしてのストゥーパを祀るための石窟である。典型とされるものは列柱によって身廊と側廊とにホールを分割し、右繞礼拝のための繞道を備えている。ホールの天井もヴォールト状であり、抽象的な半球形のストゥーパを祀り、礼拝するためのシンボリックで完成した形式を有していた。一方ヴィハーラ窟は本来比丘が生活するための石窟である。大きなホールとその三側壁から房室を展開するという形式がその最も合理的な形式ではあったが、それはチャイティヤ窟で見られるほど固執されたものではなく、開窟される岩山の状況に合わせて平面形態が調整されたと思われる。それは象徴的な空間を志向したものではなく、比丘が宗教活動を行うための機能上の条件を満たすことが重視されたからであろう。ところが、ブッダ像を中心としたイメージ表現の発展という仏教上の変化は、チャイティヤ窟やヴィハーラ窟の形態に少なからず影響を与えた。紀元後5世紀以降、形式の上ではチャイティヤ窟は存在し続けたが、ストゥーパの前部にブッダ像を刻み出すなど、ストゥーパを祀ることの重要性が減少し、その結果チャイティヤ窟の形式を保持することにも重要性が失われた。逆にヴィハーラ窟の方は、チャイティヤ窟よりは形式にこだわらないその性質のため、イメージ崇拝の発展と無理なく結び付いてブッダ像祠堂を含み、シンメトリー性に対する配慮も加えられることによって象徴的なホール空間を創り出すまでに発展したのである。そうしたヴィハーラ窟空間の変化の一つと考えられるのが様々なデザインを施した列柱である。本研究では、そうした石窟の内部空間の変化を検討するための一つの手段として、その柱のデザインに着目する。

従来の研究では、柱のデザインは石窟の成立年代を考察するための資料として扱い、

本研究のように柱のデザイン・モチーフの違いや配列に着目し、石窟空間の性質を把握するのを目的としているものは、知られる限りにおいて、確認されない¹⁾。

本研究での対象であるエローラ仏教石窟群はエローラの丘の南端から北に向かって開窟された第1窟から第12窟までの12個の石窟で構成されている。同地には仏教石窟の更に北に続いてヒンドゥー教石窟（第13～29窟）やジャイナ教石窟（第30～34窟）も開窟され、大規模なものだけでも30を優に越す数の石窟を有したインドの代表的な石窟群である。その仏教石窟はインドの仏教石窟史上最後に始められたものの一つである。各石窟の平面は多種多様であるが、後に述べる4種類の柱が節度を保って使い分けられ、そこには柱の違いと空間の性質との関係が存在する可能性が考えられるのである。

第1節 エローラ仏教石窟の編年について

本研究は、先に触れたように、エローラ仏教石窟の編年を目的とはしていないが、今後の展開の上において必要な場面も考えられるため、従来の編年についての説と本研究での立場について簡単に触れる。

エローラ仏教石窟の年代に関わる問題は、そのパトロンに関する記録が全くないことから、同地に隣り合って開窟されているヒンドゥー教石窟との関係によって考えられてきた。その中で多くの学者が推定を試みているが、ここでは大きく2つの説を挙げよう。

まず一つはエローラにおいては仏教石窟がヒンドゥー教石窟よりも早期に成立したと考える Fergusson や Burgess²⁾、Brown³⁾そして Kail⁴⁾の説である。南端の第1窟から第5窟までがアジャンターのヴァーカータカ期のヴィハーラ窟に平面形式が類似していること、第6窟から北の石窟がそのヴィハーラ窟の形式からはずれることから、第1窟から北に向かってほぼ石窟番号順に造られ、その後ヒンドゥー教石窟が続いたとするものである。ただし彼らの考えた編年もアジャンターのヴァーカータカ期石窟よりも早期に始まったとする年代設定（A.D. 450-650 又は A.D. 700）も既に受け入れがたいものとなっている。

最近有力視されているのは、エローラではまず第 29, 21 窟を中心としたヒンドゥー教石窟が成立し、その後仏教石窟が開窟されたとする Spink や Malandra の唱えた説である⁵⁾。そのため第 29 窟と第 21 窟に近い建築的特徴をそれぞれ示す第 5 窟と第 6 窟を仏教石窟における編年の最初に位置づけているのが特徴である⁶⁾。特に Malandra は Spink の説を更に検討し、彫像表現の比較や曼陀羅図像の発展に着目し、初期・中期・後期の 3 期に分けている。エローラ各仏教石窟の編年は、初期：第 6, 5, 2, 3 窟 (A.D. 600-)、第 5 右翼, 4 窟 (A.D. 630-)、中期：第 8, 9, 10 窟 (A.D. 650-)、第 10 窟への付加 (A.D. 680-)、後期：第 11, 12 窟 (A.D. 700-)、第 12 窟の完成 (A.D. 730-)、である。なお、図像を持たない第 1 窟は第 2 窟より後⁷⁾、第 7 窟は第 8 窟よりは先で第 5 窟よりは後⁸⁾としているが、それは隣り合う石窟の未完成の度合いの違いや、両者の位置関係を考慮したものである。本研究ではこの Malandra の編年を現状最も妥当なものとして念頭には置いているが、決して確定したものと考えている訳ではない⁹⁾。一つの基準として設定するが、今後の研究の発展と共に変化しうるものとしたい。

なお、第 11, 12 窟が他の第 1～10 窟よりも後期と捉える見方は、その両者の違いの度合い¹⁰⁾から考えて、定説として問題ないと考えられる。

第 2 節 エローラ仏教石窟に見られる柱のデザイン・モチーフと柱の種類

エローラ仏教石窟の柱や付柱のデザインに見られる支配的なモチーフとしては次の 3 種類が挙げられよう。

- a) 蓮華を象った円形装飾¹¹⁾
- b) 葉飾り装飾が口から溢れるように表現された壺¹²⁾
- c) 一般にフルーツが施されたクッション状のもの

そしてこれらのモチーフの有無に着目することによって、柱・付柱のデザインは 4 種類に分類される (図 1a, b, c, d)。1 つ目は先に挙げた a) のモチーフを柱頭と柱身とに上下向き合う形で有する柱であり、以下本章では「蓮華柱」と記述する。これには円形装飾の輪郭のみが表現され、蓮華が表されていないもの¹³⁾も含める。2 つ

目は b) のモチーフを柱頭に有するものであり、以下「壺葉飾り柱」と記述する。3つ目は c) のモチーフを柱頭に有するものであり、以下「クッション柱」と記述する。以上の3つは J. Pereira の示したインド古代建築に見られる柱の分類の5つの「オーダー」によれば、それぞれ Indic, Gangetic, Deccani に相当するものである¹⁴⁾。そして最後の4つ目は a) のモチーフを柱身中央に、b) のモチーフを柱頭に持つもので、以下「コンポジット柱」と記述する。これは Pereira の分類では壺葉飾りを有した柱頭形に重きをおいて Gangetic に分類されているが、ここでは先に挙げた a) ~ c) の柱のデザイン・モチーフを対等に評価し、a)、b) のモチーフの一方のみに着目して分類するよりは一つの特徴を有した柱として扱う必要があると判断した¹⁵⁾。またエローラ仏教石窟では、後述するように、比較的多く見られるのである。

その他に、第11窟と第12窟に限り、特にモチーフは持たないけれど、柱身部分が平滑な面に仕上げられた方形断面の柱（以下、「単純方形柱」と記述¹⁶⁾）が見られる。特に第12窟のものはモールディングを備えた柱基を有している。

さて、列柱表現が石窟で使われる位置は、石窟という形式を考えれば、大きく分けて2つ挙げられる。一つはファサードや祠堂前室の前面等に位置するもので、平坦な壁面にアクセントを与え、その奥の空間が特別なものであることを伝えるため、もしくはその奥の空間を象徴化するために表現される。ファサードでは自然の荒々しい壁面に直線的な柱による人工的な表現を与えることで、それが単なる洞窟ではなく、モニュメントであることを示すのに役立っている。もう一つはホール内側の列柱のように、大きな空間内に刻み出されるもので、一つの空間を分割し、秩序を与えるために表現される。チャイティヤ窟内部で身廊と側廊と区別する列柱はその例であり、右繞礼拝に合わせて空間に秩序を与えたものである。加えて、厳密な意味では柱ではないが祠堂戸口のまぐさを支える表現としての高浮彫の脇柱がある。エローラ仏教石窟でも、以上に挙げた位置以外で柱の表現が見られることはない。

第3節 各石窟の空間構成と柱の配置

<第1窟>

方形ホールの右壁と奥壁から房室を展開するのみの非常にシンプルな形態を有している。ファサードに列柱が存在したことが痕跡から知られるが、柱そのものは完全に崩壊している。

<第2窟> (図2)

ファサードを構成する列柱ヴェランダや列柱を持つ方形の大ホールを有するなど、形態上ヴィハーラ窟として分類される特徴を備えているが、実際には比丘が住むための房室を一切持たず、代わりにホール左右側壁面にブツダ像を5体ずつ並べて刻みだした空間（以下ではブツダ像ギャラリーと記述）を、ホールの床よりかなり高い位置に設けるなど、機能上ではヴィハーラ窟とは言えない。またホールの後廊の床の高さは前廊・左右廊より高く、周列柱内側とほとんど同じ床高である¹⁷⁾。

ファサードの列柱は完全に失われており、そのデザインは今や不明である。ホール内の列柱を構成する柱はすべてクッション柱（写真Ⅱ-1-1）である一方、ブツダ像ギャラリー前面に並んだ列柱を構成する柱・付柱はすべて壺葉飾り柱である（写真Ⅱ-1-2）。ただし、右側のギャラリーの中央2本の柱のみ、同一のモチーフながら、異なるデザインである。

<第3窟> (図2)

平面の規模およびホール内に列柱を有する点、そして前室を介さずにホールから直接祠堂を開ける点は第2窟にほとんど同じであるが、こちらは比丘のための房室を有している点が大きな違いである。ホール内の列柱を構成する柱には、未完成または近代以降に補なわれたものも含まれているが、オリジナルのものはすべて壺葉飾り柱である（写真Ⅱ-1-3）。

<第4窟> (図2)

この石窟は多くが未完成で、実際完成しているのは祠堂および祠堂前室のみである。コンポジット柱が前室前面に使われている。

<第5窟> (図3)

この石窟は列柱のある奥に長い矩形平面のホールを中心に、その奥壁からはブツダ像を収めた祠堂を刻みだし、左右側壁中央からはホール柱間3間分の間口を持つ副ホールを展開し、そこからも房室を開けるといふ平面構成である。そしてホール内の床

には奥に長いベンチ状の台を2本刻み出している¹⁸⁾。更に列柱内の天井は、ベンチの配された範囲に当たる部分がわずかに高くなっている。またホール左側壁最前部には前室を伴った小祠堂を有している¹⁹⁾。

この石窟では3つのデザインの柱が使い分けられている。ファサードに見られる列柱は、ホールの前廊列柱ともいえるものであるが、その柱・付柱は蓮華柱である(写真Ⅱ-1-4)。奥の後廊列柱では柱は蓮華柱であるが、付柱はモチーフを持たない。ホールの手前から奥へと配される各8本の左右廊列柱はすべてクッション柱である(写真Ⅱ-1-5)。一方ホール左右廊に面した副ホール前面の柱は、石窟入口に近い側の付柱のみ無装飾ではあるけれども、残りはすべて壺葉飾り柱である。ホール左側壁最前部の小祠堂前室前面にも柱があるが、柱基のみが遺っているのみで、そのデザインについて知ることはできない。

<第5右翼窟> (図3)

第5窟の正面右に位置し、繞道付きの祠堂を有する石窟であるが、右半分がほとんど崩れ去った状態にある。ただし東側の壁面にそれぞれ付柱が遺っていることから、祠堂前に2本の列柱廊が存在したと判断される。その付柱は共に壺葉飾り柱である(写真Ⅱ-1-6)。

<第6窟> (図4)

第5窟同様ファサード部分が崩れ去っており、完成当時の姿は知ることができない。平面構成は正方形ホールを中心に、奥に祠堂前室と祠堂、左右には房室を有する副ホールを展開したものである。祠堂前室と副ホールの各前面に列柱があるが、その柱・付柱はすべて壺葉飾り柱である(写真Ⅱ-1-7)。そして祠堂前室左右端部には女性像を含んだニッチが存在しているが、そのニッチを枠取る柱はクッション柱である(写真Ⅱ-1-8)。

<第7窟> (図5)

ヴェランダおよび祠堂を持たず、房室のみを展開した大きなホールを有するが、多くは未完成である。そのホールにはちょうど第2、3窟のホール内列柱の四隅に当たる位置にのみ4本の柱が見られるが、実際には左奥の柱のみがオリジナルであり²⁰⁾、残りの3本は近代の後補である。オリジナルの柱は蓮華柱である

(写真 II-1-9)。

<第 8 窟> (図 5)

空間構成は同ジエローラのヒンドゥー教に関わる第 21 窟や第 26 窟に極めて類似している石窟であり、ホールと、祠堂がその中央に刻み出されている祠堂域からなる。ヒンドゥー教窟との違いはホールおよび祠堂域の左側壁から房室を開けている点である。

ホール前面の 2 本の柱と 2 本の付柱は共に壺葉飾りの柱頭を持つが、付柱のみコンポジット柱である(写真 II-1-10)。一方ホールと祠堂域の境の列柱では、内側 2 本の柱はクッション柱であるが、付柱は壺葉飾り柱である(写真 II-1-11)。なお祠堂後方壁面にも列柱が刻み出されているが、未完成である。

ホール右手前方の側壁にブツダ像の小祠堂²¹⁾があるが、その前面を飾る 2 本の柱はクッション柱である(写真 II-1-12)。

<第 9 窟> (図 4)

ファサードを列柱で飾る祠堂のみの石窟であり、奥壁に本尊のブツダ像と 2 体の脇侍を高浮雕で刻み出している。ファサード列柱は柱・付柱共にコンポジット柱である(写真 II-1-13)が、奥壁に刻まれた彫像を枠取っている付柱はすべてクッション柱である(写真 II-1-14)。

<第 10 窟> (図 6)

エローラで唯一ストゥーパを祠る石窟で、大きな前庭(写真 II-1-15)とそれを取り囲む列柱ヴェランダ、そして奥に展開する伝統的な馬蹄形平面を有するチャイティヤ窟部で構成されている。ヴェランダの列柱はすべて柱頭に壺葉飾りのモチーフを持つ柱である(写真 II-1-16)が、付柱の一部および前庭隅部の柱に限りコンポジット柱である(写真 II-1-17)。なお正面のヴェランダの左右両端部にブツダ像の小祠堂(ただし左端部の方は祠堂内部が未完成)があるが、その前面を飾る 2 本の柱はクッション柱である(写真 II-1-18)。チャイティヤ窟本体内部には身廊と側廊とに空間を分割している列柱があるが、身廊前面中央の 2 本のみがコンポジット柱であり、それ以外の柱は八角形断面の蓮華柱である(写真 II-1-19)。

前庭周りは第 2 層も有している。チャイティヤ窓左右両脇に刻まれたボディサット

ヴァ像を収めるニッチの脇柱はクッション柱である。そして前庭の左右に開けられたヴェランダ前面の列柱を構成する柱は完全に失われ、付柱のみ残存しているが、全くデザイン・モチーフを持たない方形断面のものである。

<第11窟> (図7)

3つの層を有する石窟であるが、どの層も完成されていない。第1層はヴェランダとそこから直接開けられた祠堂で構成されている。第2層はヴェランダ中央に小さなホールを介したブツダ像の祠堂を中央に置き、更に3つの祠堂を非対称に展開している。第3層は平面形に関して第12窟の第2層に良く似た特徴を有し、ファサード列柱の中央3間の幅で入口を開ける左右に並んだ列柱のある横長のホールと最奥部に前室を伴ったブツダ像祠堂を持つ。第3層のファサード位置の列柱のみが蓮華柱である(写真Ⅱ-1-20)が、それ以外は、すべて単純方形柱である。

<第12窟> (図8, 9, 10)

第11窟同様、3つの層で構成された石窟であるが、こちらはほぼ完成している。第1層は開放的なホールの奥中央に前室を伴ったブツダ像の祠堂を配し、ホール側壁に沿って房室を開けている。第2層はやや閉鎖的なホールを有しているが、第1層同様、奥中央に前室を伴った祠堂を配し、側壁に沿って房室を開けている。第3層も開放的なホールと前室を伴った祠堂を有するが、房室を全く持たず、ホール側壁に沿ってブツダ像を中心する非常に多くの図像を高浮彫で刻み出している。

3つの各層は非常に多くの柱を有しているが、第1層の、ちょうどこの石窟の入口に当たる中央間の2本の柱のみが壺葉飾り柱である(写真Ⅱ-1-21)。他の柱はモチーフを全く持たないけれども、モールディングを施された柱基を有し、また表面の仕上げもなされた単純方形柱である。

おわりに

(図11)はエローラ仏教石窟各石窟平面上で柱のデザインとその配列について模式的に表したものであり、(表1)²²⁾は表としてまとめたものである。ここでは、その表1を基に若干の解釈を試みてみたい。蓮華柱や壺葉飾り柱そしてコンポジット

柱は、ファサード・副ホール前面・祠堂前室前面などの空間の前面に使われる傾向が見られる。一方クッション柱は祠堂・副祠堂の前面もしくはニッチなどの像彫刻を取り巻く位置に使われている傾向が確認された。つまり空間の内外を仕切る柱として前者が使われ、クッション柱は像彫刻の前面を飾る柱として配されていると考えられるのである。ただしホール内では4種類の柱すべてが使われている。その中でも興味深いのは、平面形で判断すればヴィハーラ窟の流れを汲むといえる第2窟と第3窟が12本の柱で構成されたほぼ規模に等しい列柱ホールを有し、更にそのホールの奥壁にはブツダ像の祠堂を配するという、同様な形態を採りながら、その柱のデザインが、それぞれクッション柱と壺葉飾り柱と、異なっている点である。第2窟は比丘が生活するための房室を持たない代わりにブツダ像ギャラリーに多くのブツダ像を表しているのに対し、第3窟の方はホール側壁から11の房室を有していることから、両者のホール空間の性質には違いがあると考えられるが、それがホールを分割する柱のデザインの使い分けと関連している可能性が指摘できるのである。

註

1) 例えば Stern は柱の形式についての分析を通して、アジャンター仏教石窟の相対的な編年を行い、また Soundara Rajan はエローラ石窟の編年に関して、エレファンタやバーダーミーの石窟との影響関係を示すために柱のデザインの差異に着目することを重視している。Stern, P., *Colonnes indiennes d'Ajanta et Ellora*, Paris, 1972 および Soundara Rajan, K.V., "Keynote Address" Parimoo, Ratan et al., eds., *Ellora Caves, Sculptures and Architecture*, New Delhi, 1988, pp.33-51.

2) Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, 2nd ed., New Delhi, 1988, p.185. それはエローラ仏教石窟の年代を A.D.450-700 としている。

3) Brown, P., *Indian Architecture (Buddhist and Hindu Periods)*, Bombay, 1959. 彼は A.D.450-650 としている。

4) Kail, O. C., *Buddhist Cave Temples of India*, Bombay, 1975, p.118. 彼も Brown 同様 A.D.450-650 と記述。

5)Spink, W., "Ellora's Earliest Phase" *Bulletin of the American Academy of Banares* Vol.1, 1967, pp.11-22. および Malandra, Geri H., *Unfolding a Mandala: The Buddhist Cave Temples at Ellora*, New York, 1993, pp.23-25 & pp.123-126.

6)Malandra は宗教生活には欠かせない水源位置に着目し、第5、6窟の位置がちょうど滝と池のそばである点から、この地最初の仏教石窟として判断した。Malandra, *op.cit.*, p.123. ヒンドゥー教石窟に対しても第27窟・第29窟から開窟されたと考えているが、それも滝と池の存在が最大の根拠となっている。Spink, *op.cit.*, p.11., Malandra, *op.cit.*, p.123. つまり最も条件の良い場所から石窟が計画され、開窟されたという考え方である。

7)Malandra, *op.cit.*, p.124.

8)Malandra, *op.cit.*, p.125.

9)ヒンドゥー教石窟のパトロンとなった王朝や、ボンベイ近郊エレファンタ第1窟、カルナータカ州バーダーミー・ヒンドゥー教石窟の成立年代に関する議論と絡み、複雑である。エローラの初期のヒンドゥー教石窟の後援したのが初期西チャールキヤ朝か、カラチュリ朝かが未だ確定できないからである。初期西チャールキヤ朝に関わる銘を有するバーダーミー第3窟が578年に確定されているが、その石窟に見られる柱のデザインや柱頭部分の女性像がエローラのヒンドゥー教石窟との関係を示すものと考え、更に同じバーダーミーや近くのアイホーレでは仏教石窟が見られるため、初期西チャールキヤ朝がエローラ仏教石窟を後援したと考える説もある。Spink はエレファンタ第1窟のパトロンにはカラチュリ朝の王を考えていることから、エローラの初期のヒンドゥー教石窟のパトロンもカラチュリ朝に比定しているが、Soundara Rajan は現在その証拠が全く見られないことから否定している。Soundara Rajan, *op.cit.*, p.33.

10)まず図像上の明確な違いが報告され、中心的なブツダ像が第2～10窟までが初転法輪倚像であるのに対し、第11、12窟のブツダ像は降魔成道坐禅像である。また姿勢の違いのみならず、顔の表情も異なっているという。Mitra, D., *Buddhist Monuments*, Calcutta, 1971, p.182. and p.186. また、第11、12窟と非常に類似した石窟構成を有したヒンドゥー教の第15窟にはラーシュトラクータ朝 Rashtrakutas の王 Dantidurga (活動期 A.D.735-757) の銘があり、エローラの地が以前のカラチュリ朝もしくは初期西チ

ャールキャ朝に支配されていた時代からラーシュトラクータ朝支配へ変遷した時代に第 11 窟、12 窟が造られたとも考えられているのである。本章内で示す表 1 だけを見ても、第 11、12 窟が他の仏教石窟とは、使われる柱についても大きく異なることが判るであろう。

11) 開いた蓮華の花を真上から見たもので、円花文（ロゼット）とも呼ばれている。

12) プールナガタ purnaghata と呼ばれ、豊穡のシンボルとされている。英語では vase of plenty や pot-and-foilage と記述される。満瓶と記述されることも多い。

13) この蓮華の刻まれていないものについては Pereira は circle-and -tongue と呼んでいる。empty medallion もしくは hour-glass pattern と記述される場合もあり、統一された呼称はない。

14) J. Pereira はその著書 (*Elements of Indian Architecture*, Delhi, 1987) の中でインド古代建築で見られる柱を対象として、次の 5 つの「オーダー」に大きく分類している。

A. Indo-Persepolitan

B. Indic

C. proto-Gangetic

D. Gangetic

E. Deccani

彼の分類は、特にモチーフの有無に関係なく柱の柱身部分の面取りの仕方に着目したもの（Indic）と柱頭のモチーフに着目したもの（Indic 以外の 4 つのオーダー）とを混在させて体系立てている。したがって、Pereira の分類では単なる八角柱も、蓮華の円形装飾を柱身に有する柱も同じ Indic に分類されており、本研究で柱の冠するデザイン・モチーフと空間の関係を考察する場合には後者の柱の特徴を生かせない等の問題が考えられた。そのため拙稿「エローラ仏教石窟の柱のデザインと位置」（平成 5 年度日本建築学会東海支部研究報告集、第 32 号、1994 年 2 月、pp.749-752.、以下では支部報と記述）では前述の Pereira の 5 つの「オーダー」をもとに議論を進めたが、本章以降では、本研究の目的を越えた細かな彼の分類にはよらず、デザインを中心となるモチーフを重視し、それにちなんだ呼称にそれぞれ変更したのである。

なお Pereira は更にそのモチーフの形の変化に対して細かな分類を示している。例

えば Gangetic に対しては以下の通りである。呼称からも判るように、柱頭モチーフの発展度合いによって細分している。

- Gangetic → • Embryonic Gangetic
- Developed Gangetic
- Standard Gangetic
- Reduplicated Gangetic

K. V. Soundara Rajan (*Indian Temple Style: The personality of Hindu Temple*, New Delhi, 1972, p.82) は石窟に関わる柱の形には北インド系と南インド系の大きく2つのタイプがあるとした。一つは ghata-pallava type (ghata は壺, pallava は葉飾り) と呼ばれるもので、もう一つは the plain massive square-cum-octagonal type であり、柱身の真ん中部分が面取りされた四角断面柱である。後者はエローラ仏教石窟では見られない。そしてデカン地方ではこの北・南インドの2つのタイプがそれぞれ変質して、更に2つのタイプが見られたとした。一つは柱頭部分にフルートを施した ghata と pallava を有しているが、柱身の下半分がマッシヴな四角断面を有するもので、アジャンター・ヴァーカータカ期石窟やエローラで見られたとした。つまり本章における「壺葉飾り柱」はこれに当たる。もう一つは南デカンのタイプとされたもので、柱身下半分はマッシヴな四角柱ではあるが、その上にクッション状柱頭を有するもので、本章における「クッション柱」である。ただし彼はそのクッション状のモチーフについては、kumbha (これも同じく壺を意味する言葉) としており、クッションという語で表現することには否定的である。なお、本章で示した「蓮華柱」に相当するものは、the plain massive square-cum-octagonal type に含まれている可能性も考えられるが、明確に分類されていない。また本章における「コンポジット柱」については分類の対象として全く扱われていない。

このように柱のデザインの呼称は、モチーフを由来まで遡って名付けられたものや、形をそのまま表したものなど、モチーフの捉え方の違いに起因してまちまちである。本章ではモチーフと空間との関係を考察するのが目的であるため、特徴的な柱のモチーフの有無や組合せでシンプルに分類したが、モチーフそのものの由来を含めて、別の機会に改めて整理検討する必要があると思われる。

15) 支部報においても Pereira の分類に従って壺葉飾りに重きをおいて Gangetic に分類した。

16) 支部報では無装飾式と記述したものである。

17) このような祠堂前方の後廊部分のみ床の高さを変えている例は他にアジャンター第 11 窟に見られる。ただしこの石窟はエローラ第 2 窟とは異なり、房室を有している。

18) 非常に良く似た例は他にボンベイ郊外のカンヘリー第 11 窟にあり、エローラとカンヘリーとの関係を示す例としても考えられている。これらの台の使用法に関しては、座禅を組むためのものであるとも、食事をするためのものであるとも言われるが、確定されるまでに至っていない。またバーグ第 5 窟やラージャスターン州コルヴィ第 10 窟なども類似した特徴を有するが、こちらの方はベンチ状の台が列柱と結びついている。

19) Malandra は、本来第 5 右翼窟に対をなすように第 5 左翼窟の計画があったが、隣の第 6 窟との位置関係を考慮したため、放棄され、その代わりに本来単なる房室を開けるはずだったホールの左側壁最前部にこの小祠堂を造ったのではないかと考えている。Malandra, Geri H., "Ellora's Buddhist Chronology: Transition and Eclecticism in Caves of the Early Middle Period" Parimoo, R. et al. eds., *op.cit.*, p.149. しかし前註のように、エローラ第 5 窟と非常に似た特徴を持つカンヘリー第 11 窟においても、そのヴェランダ左端部にのみブッダ像を祠った小祠堂を有していることから、小祠堂の存在はこのタイプのホールの機能と関係したものであると考える方が妥当と思われる。どちらも入口を入れてすぐの左側にのみ造られており、右繞礼拝と関係したものかも知れない。

20) Burgess, J., *Report on the Elura Cave Temples and the Brahmanical and Jaina Caves in Western India*, Archaeological Survey of Western India, Vol. 5, Varanasi, reprint, 1971, p.7. および plate 14.

21) Malandra は 8A 窟と番号付けしている。

22) この表は Malandra の与えた相対的な編年に基本的に従った石窟順で作成したが、未完成もしくは図像を一切持たない第 1, 7 窟については、第 1 節にも示したように、正確なポジションが明らかでないため、第 10 窟の後に挿入した。

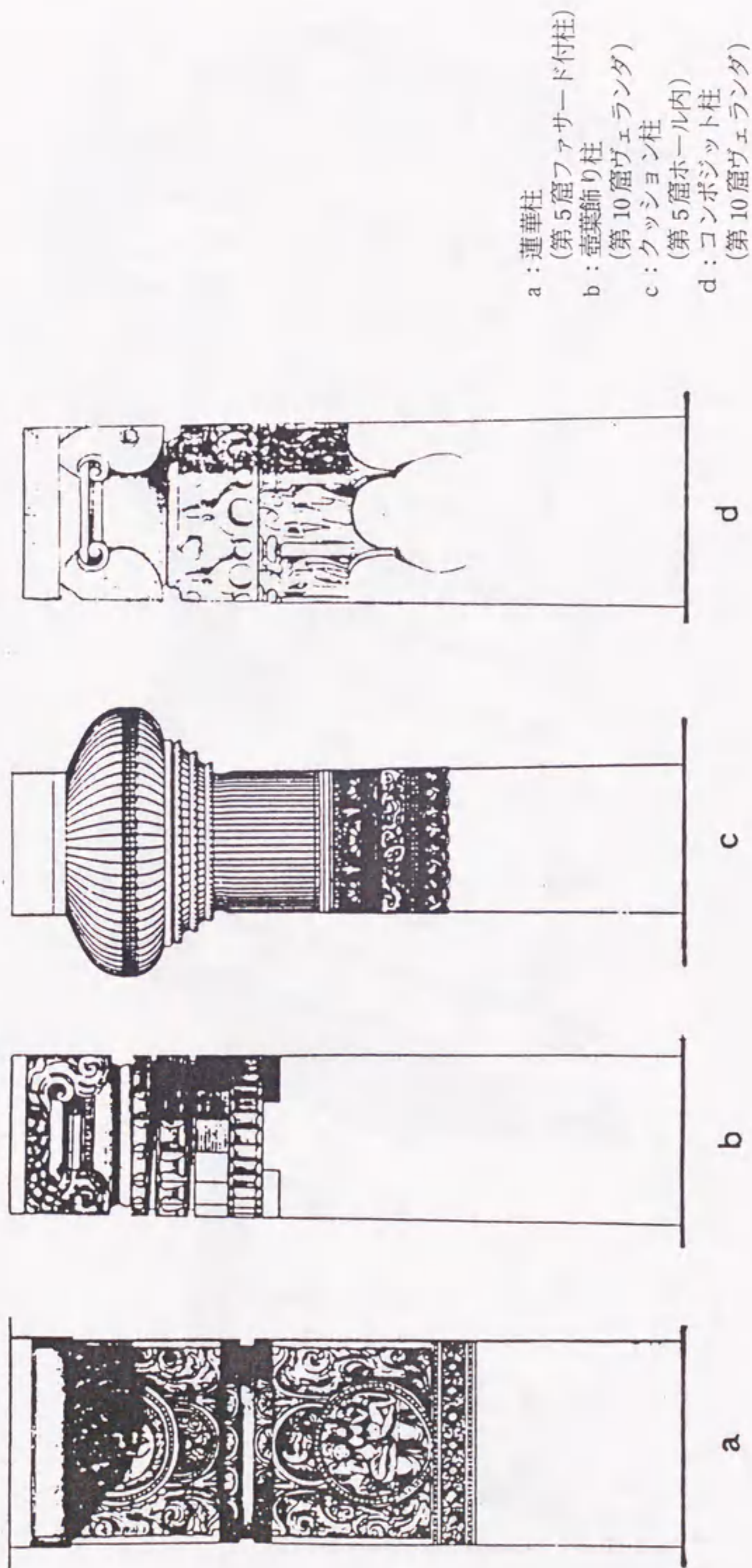


図1 エローラ仏教石窟で見られる柱のデザイン

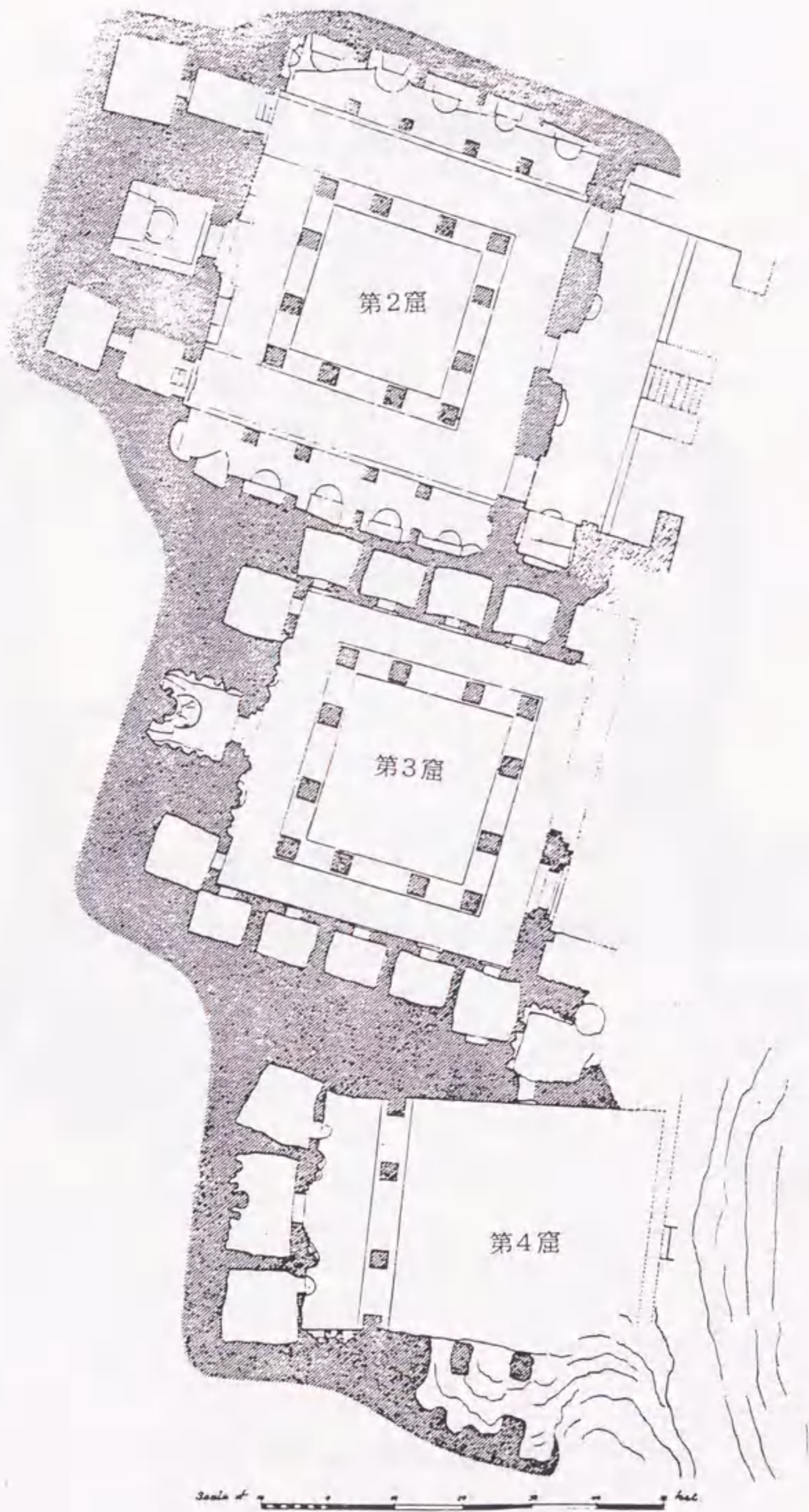


図2 エローラ第2窟, 第3窟, 第4窟平面図

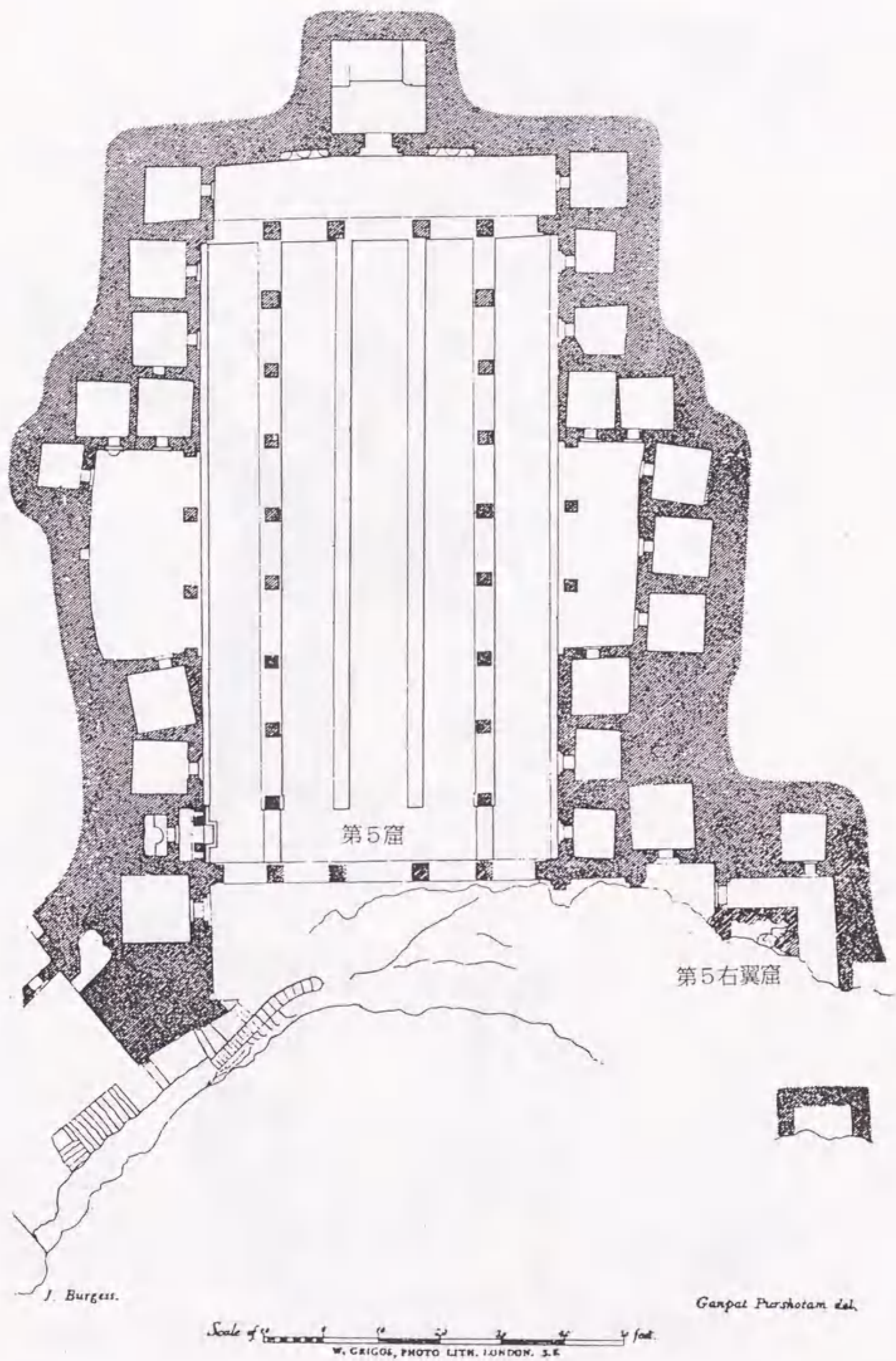


図3 エローラ第5窟，第5右翼窟平面図

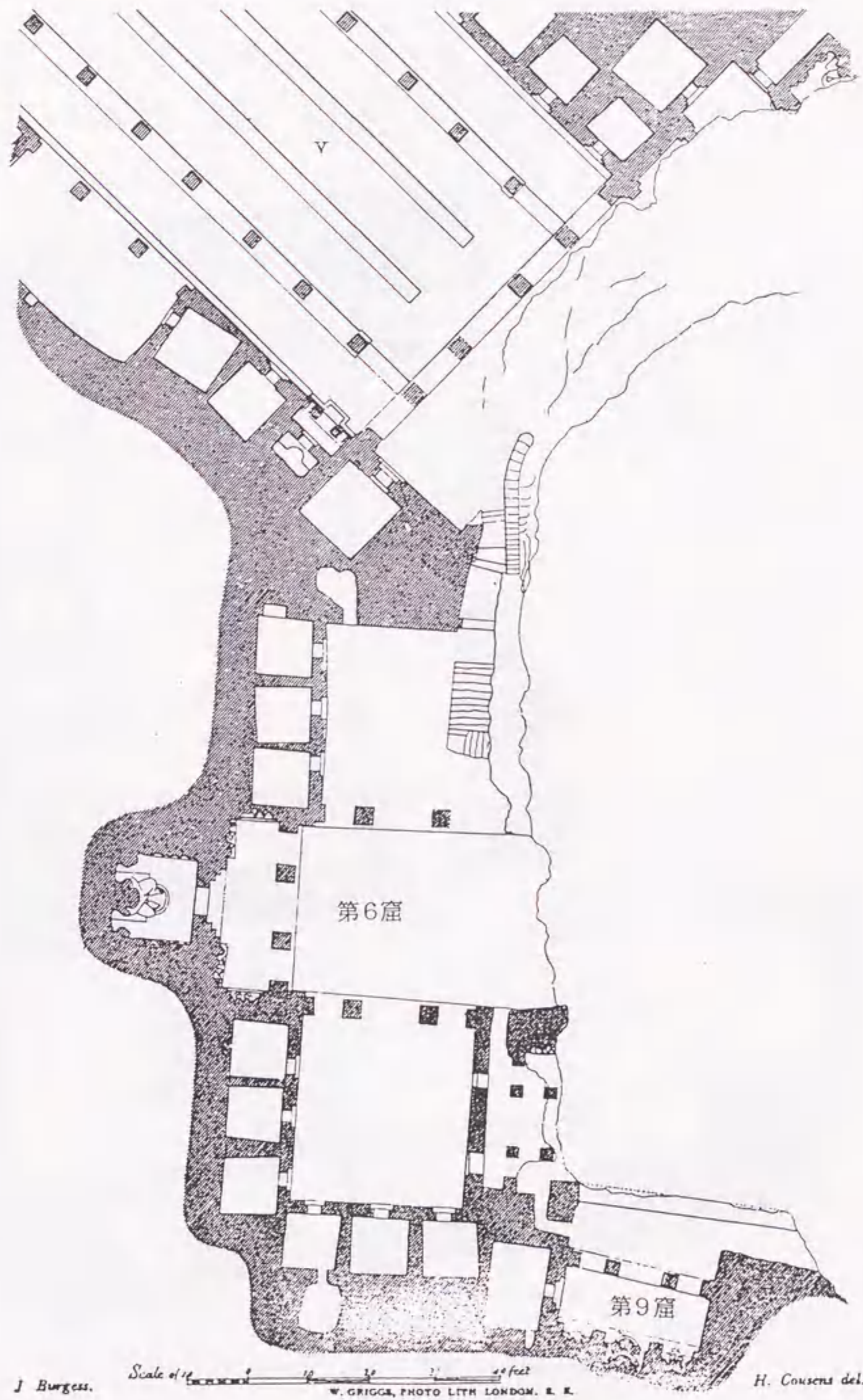


図4 エローラ第6窟, 第9窟平面図

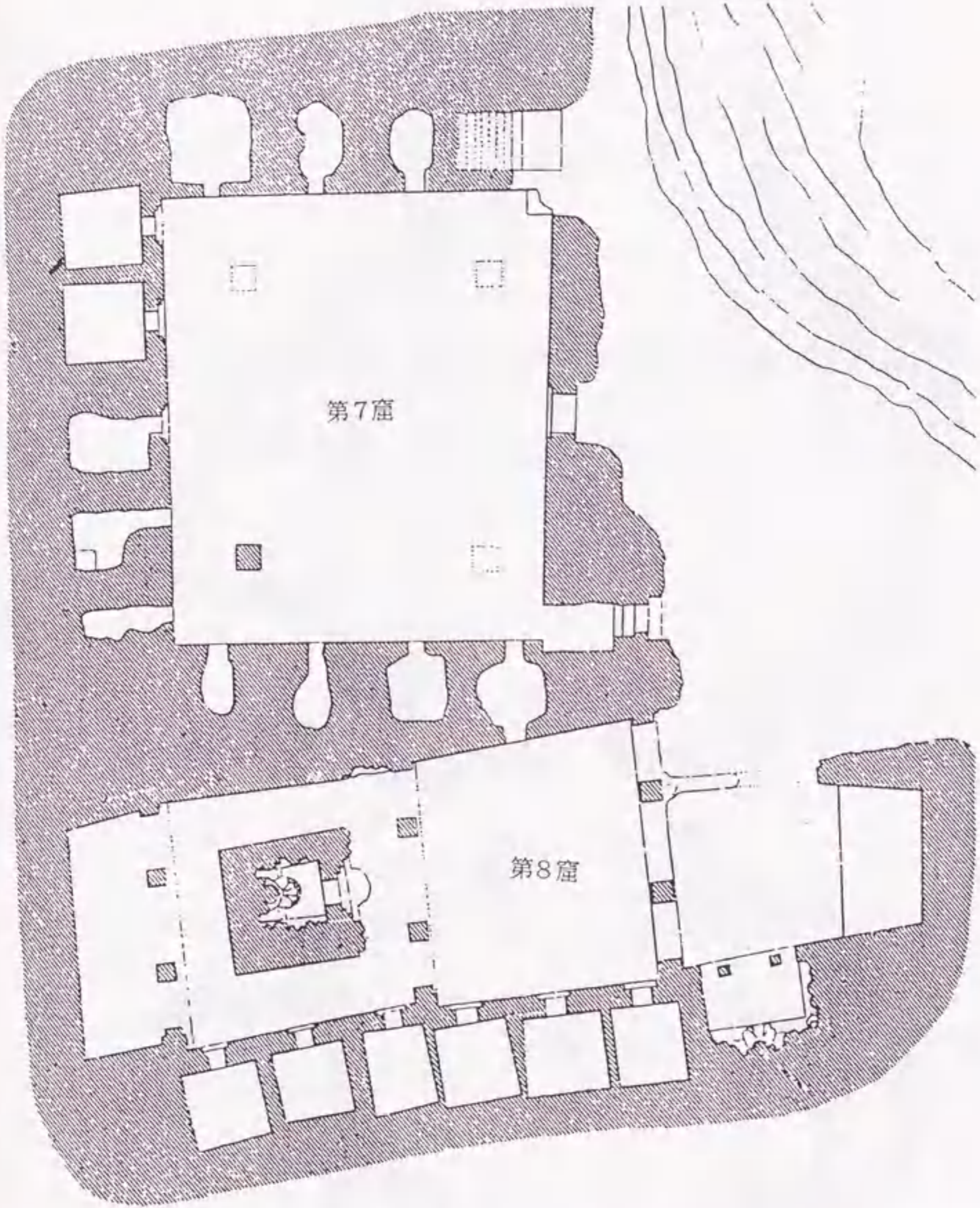
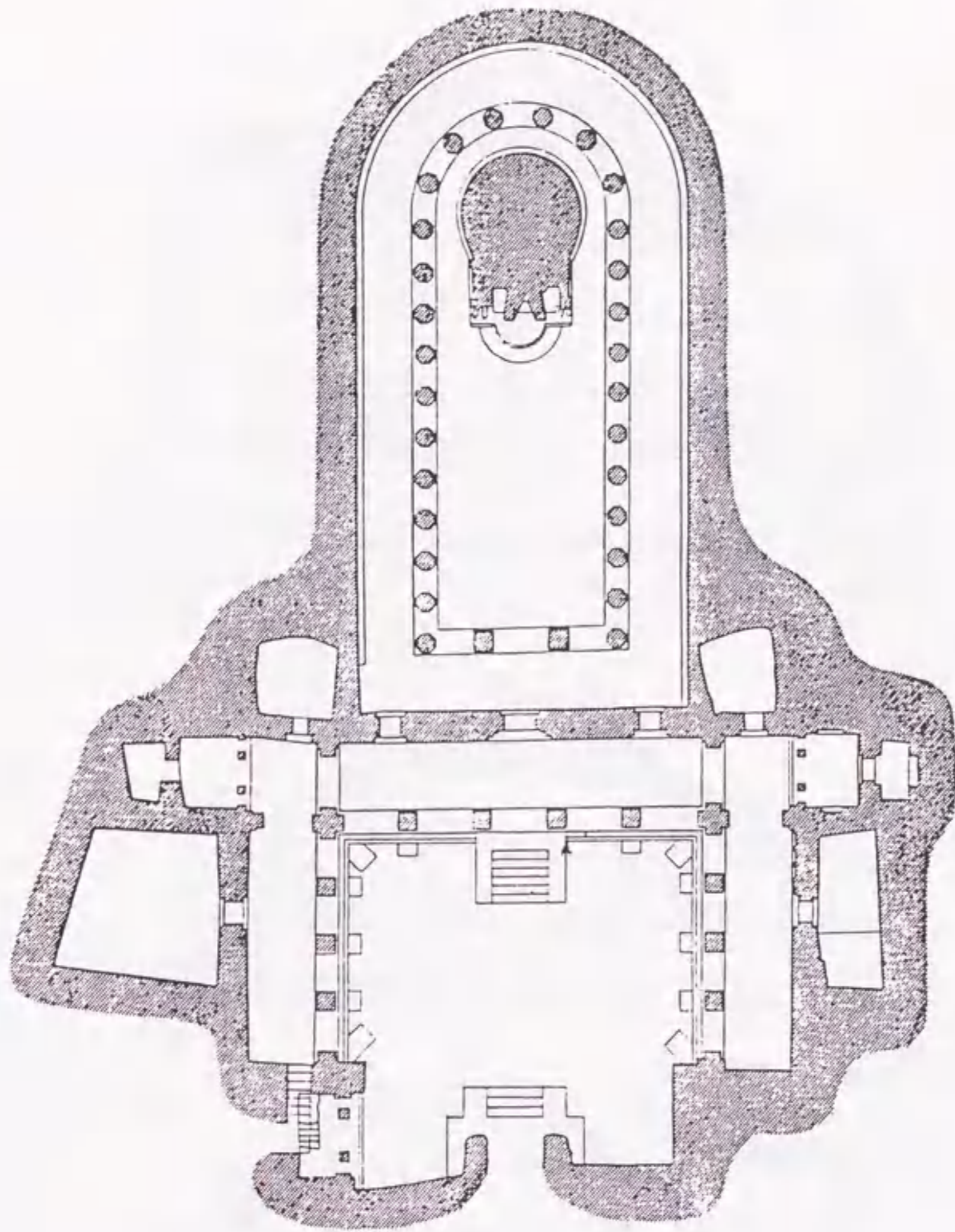
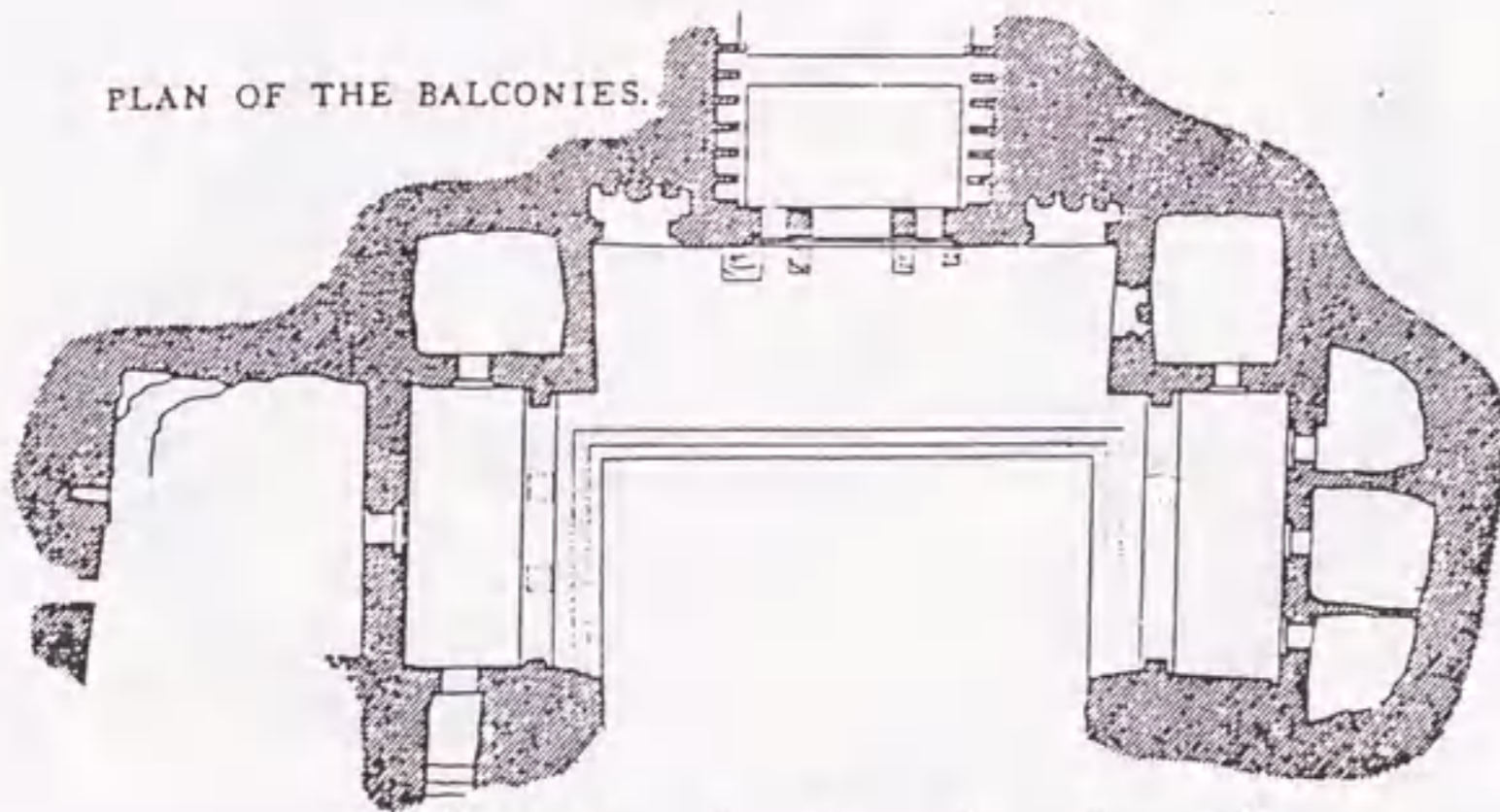


図5 エローラ第7窟, 第8窟平面図



PLAN OF THE BALCONIES.



Scale of 0 10 20 30 feet.

W. GRIGGS, PHOTO LITH. LONDON, S. E.

Ganpat Purshottam Del.

図6 エローラ第10窟平面図

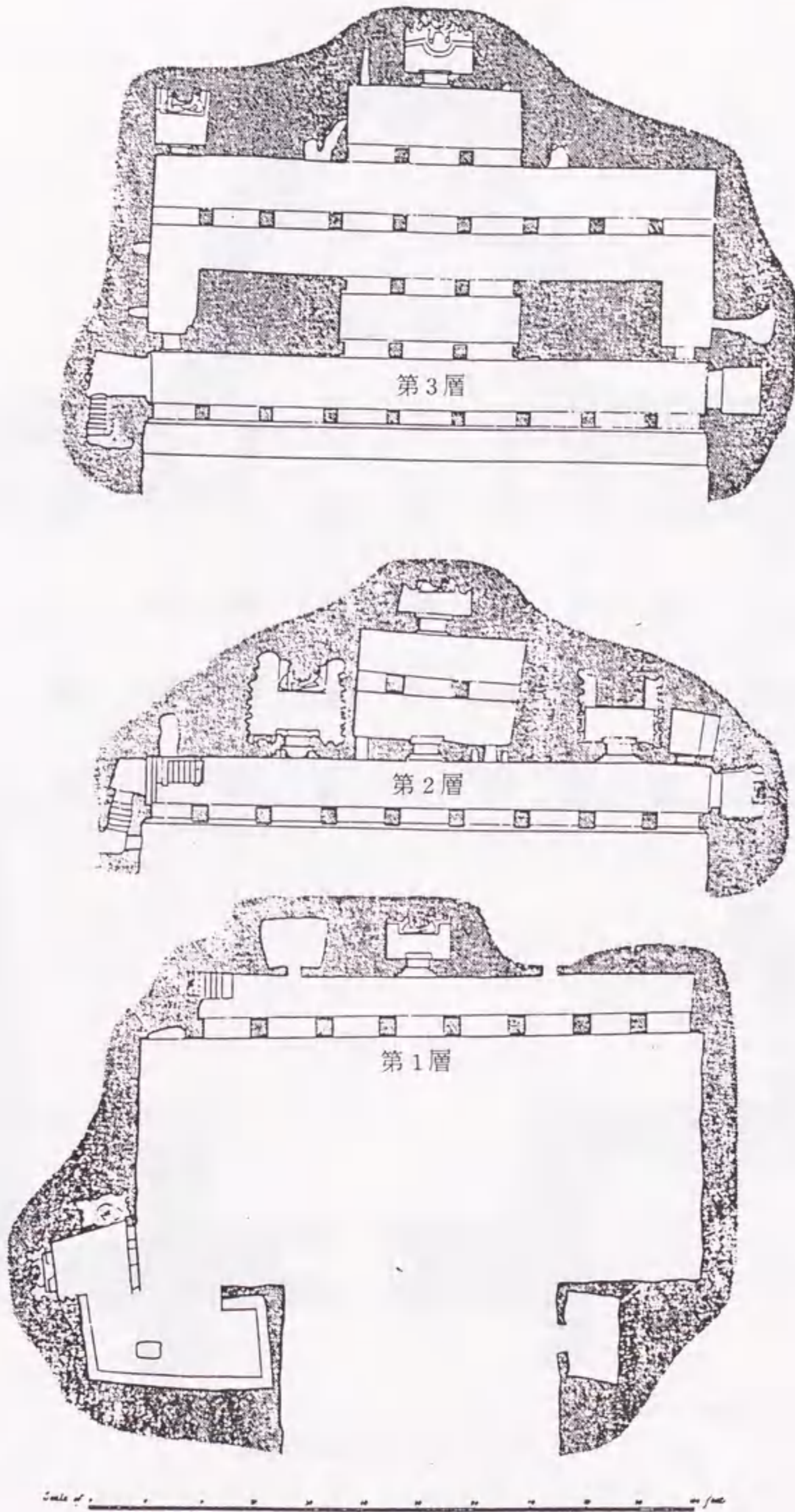
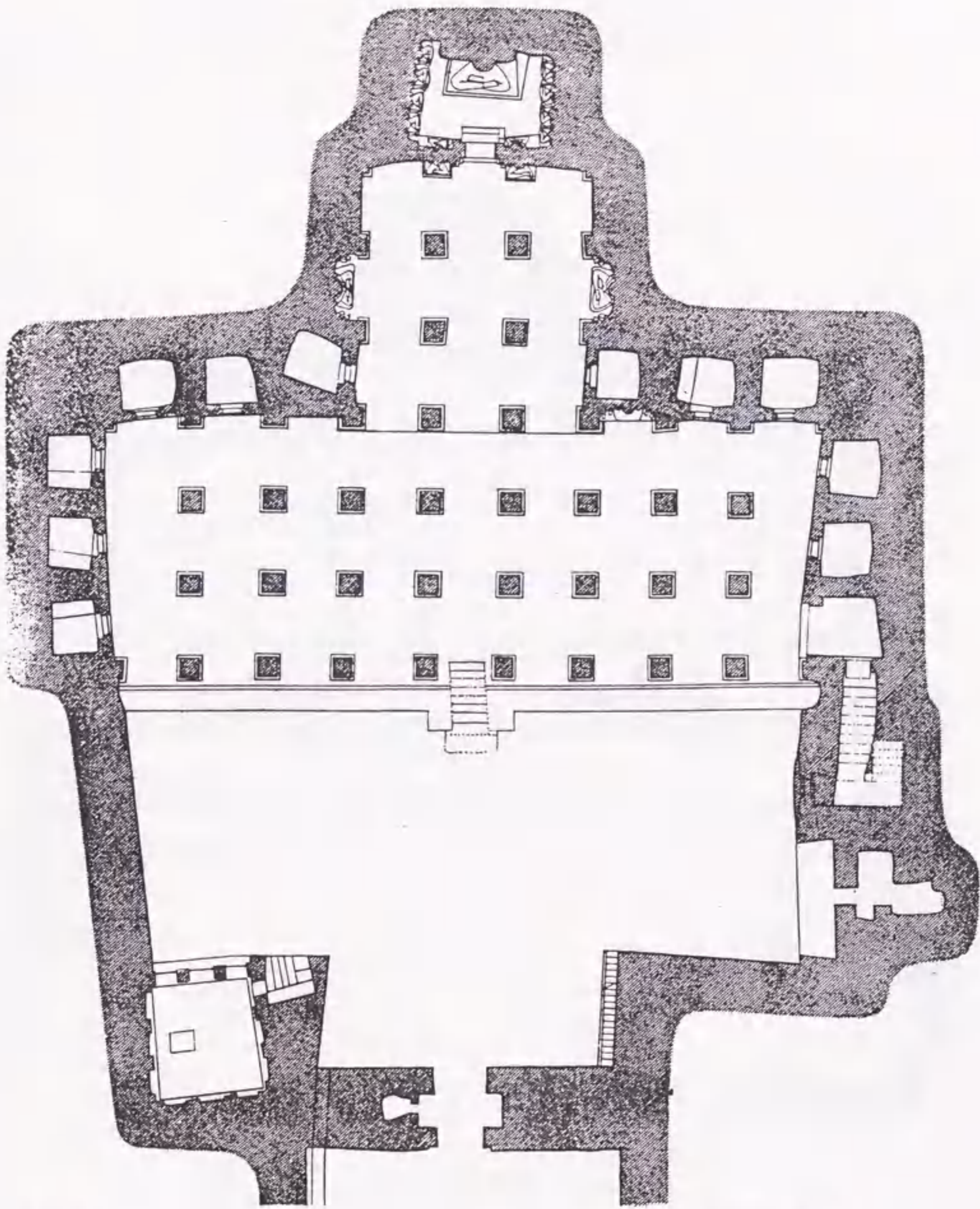


図7 エローラ第11窟第1層・第2層・第3層平面図



J. Burgess.

Ganpat Purshotam del.

Scale of feet.
 W. GRIGGS, PHOTO LITH, LONDON, S. E.

図8 エローラ第12窟第1層平面図

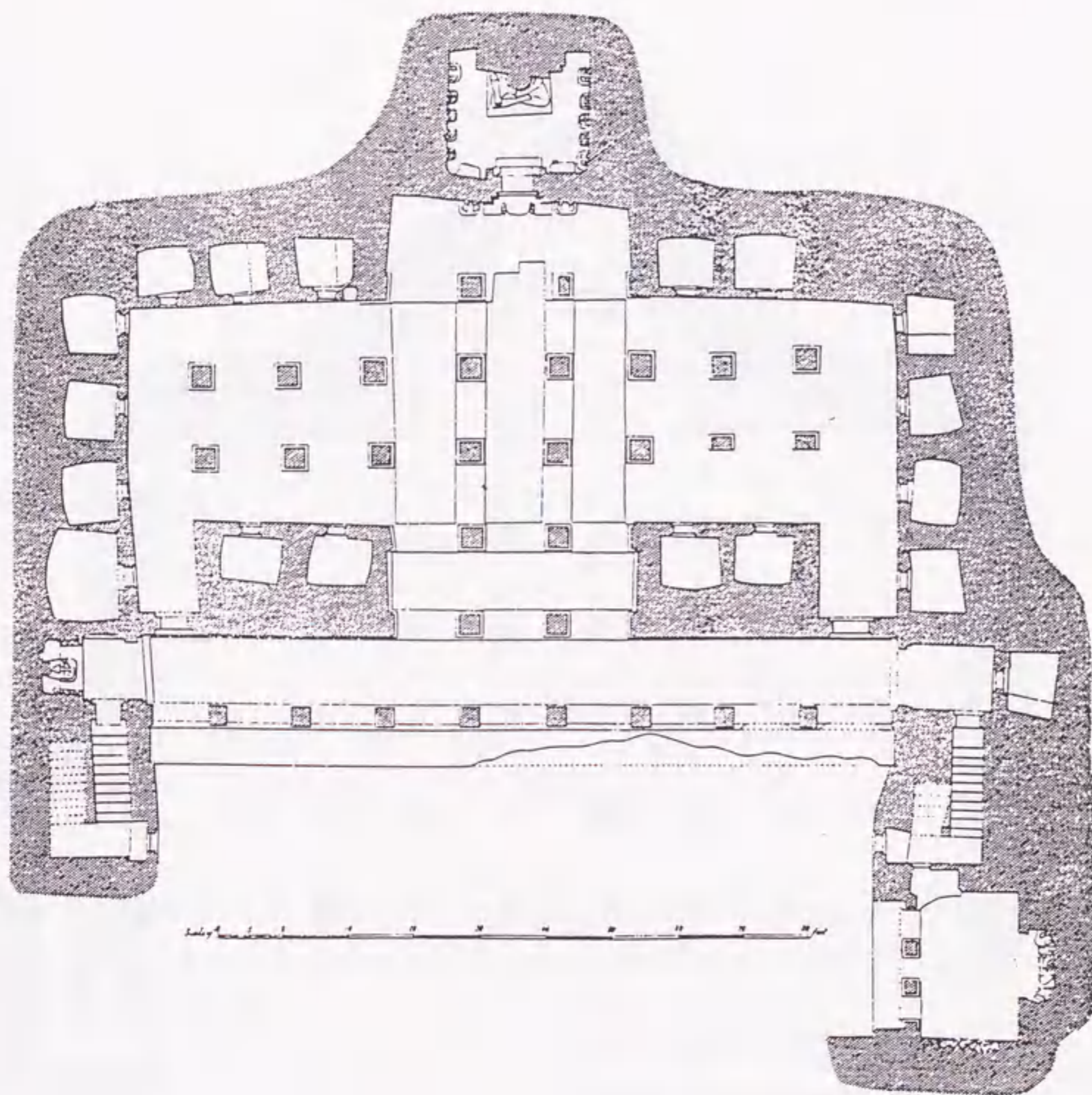


図9 エローラ第12窟第2層平面図

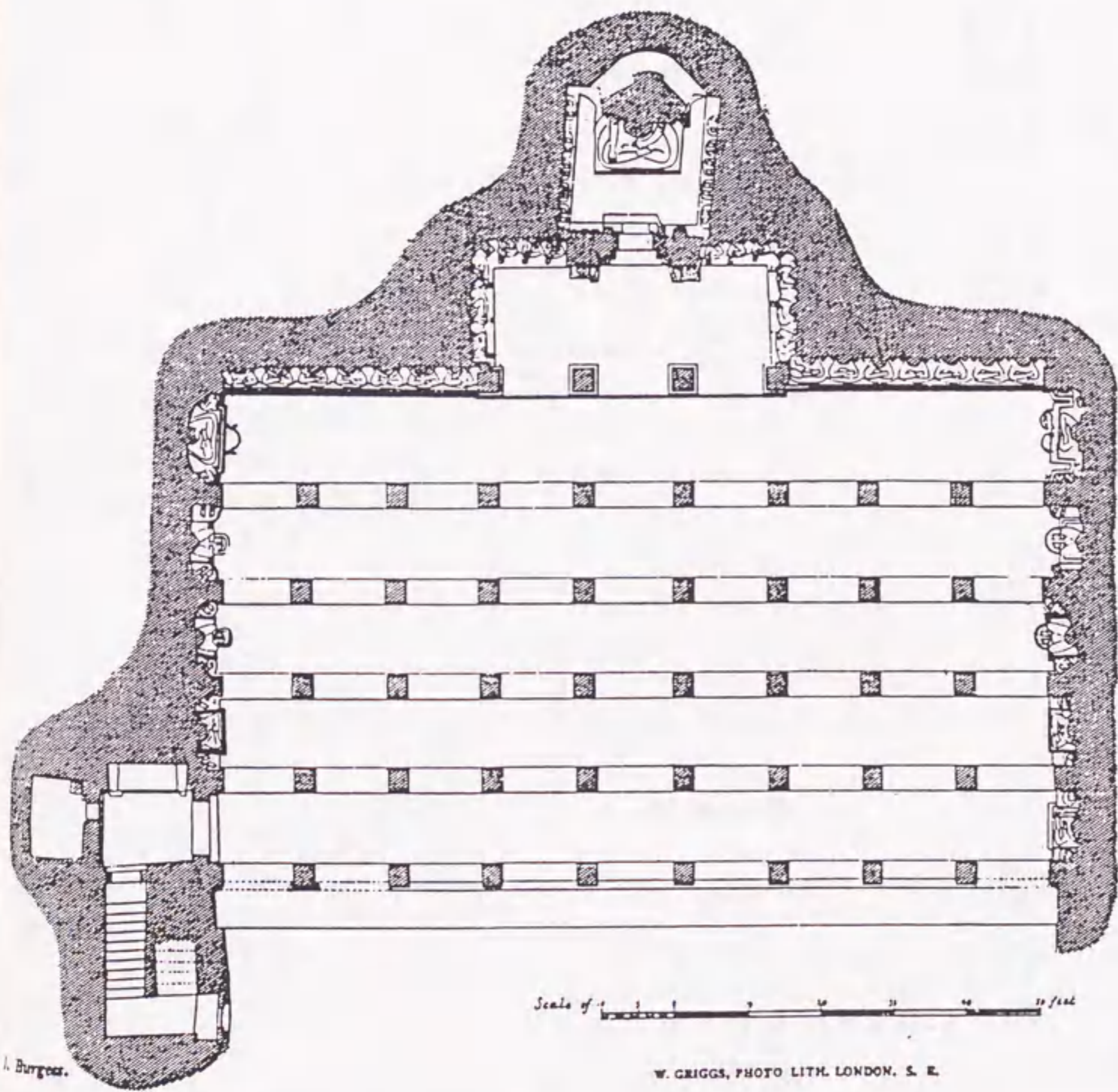


図10 エローラ第12窟第3層平面図

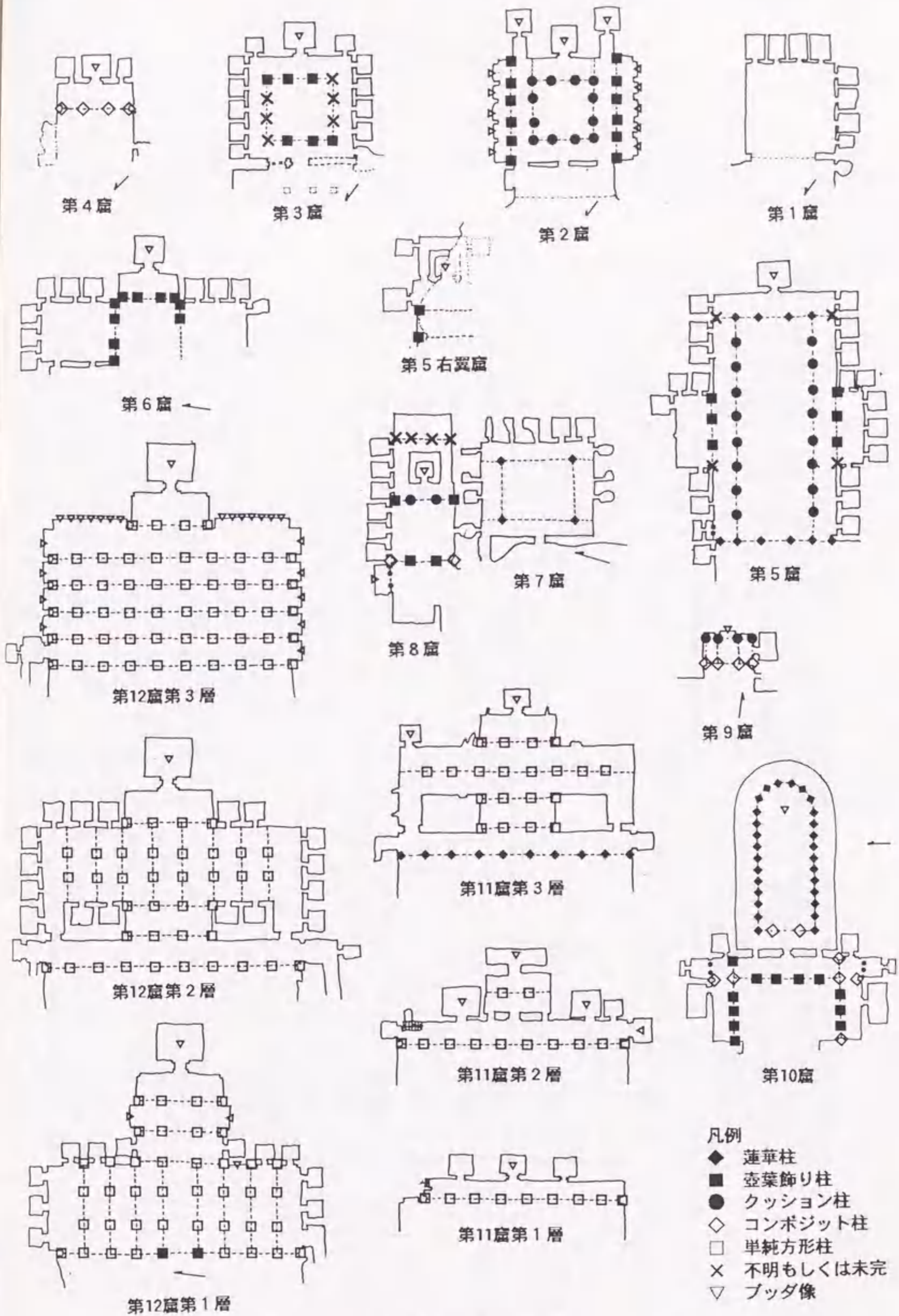


図11 エローラ仏教石窟各窟の柱のデザインと位置

表1 エローラ仏教石窟各窟の柱のデザインと位置

位置	アサート (クエラダ)		ホール内		副ホール 前室	主ホール 前室	副ホール 前室 またはニツチ	石窟入口	窟入口
	柱	付柱	柱	付柱					
石窟	柱	付柱	柱	付柱	柱	付柱	柱	付柱	柱
第6窟	?		—		壺	壺	ク*1	—	ク
第5窟		蓮	ク	蓮	壺*2	—	?	—	—
第2窟	?		ク		—	—	壺*3	—	ク
第3窟	?		壺		—	—	—	—	—
第5右翼窟	?	壺	—		—	?	壺	—	—
第4窟	?		—		—	コ	—	—	—
第8窟	壺	コ	—		—	ク	ク*4	—	—
第9窟	コ		—		—	ク*5	—	—	—
第10窟	下層	壺	コ	コ	—	—	ク*7	—	—
	上層	?	?	—	—	—	ク*9	—	—
第1窟	?		—		—	—	—	—	—
第7窟	—		—	蓮*10	—	—	—	—	—
第11窟	1層	単	—		—	—	—	—	—
	2層	単	—	単	—	—	—	—	—
	3層	蓮	—	単	—	—	—	—	—
第12窟	1層	壺*11	—	単	—	—	—	—	—
	2層	単	—	単	—	—	—	—	—
	3層	単	—	単	—	—	—	—	—

凡例 蓮=蓮華柱 壺=壺葉飾り柱 ク=クツシヨシヨ柱 コ=コンポジション柱 単=単純方形柱
 ?=未完もしくは崩壊による柱形不明 ー=柱無し

備考 *1: 祠堂前室左右端部の女性像ニツチの脇柱。 *2: ただし奥の、つまり東側の付柱のみで、西側の付柱は未完成であるのか、無
 装飾である。 *3: ホール左右ブツダ像ギヤラリーの前面柱列。 *4: ブツダ像を収めたホール右前方の空間的な小祠堂。 *5: この
 石窟の主なる崇拜対象であるブツダ像及び菩薩像の左右を採取る付柱。 *6: 身廊前室中央2本のみ。 *7: 正面ペランダの左右端部の
 小祠堂。 *8: 第十一窟や第十二窟に見られる単純方形柱とは異なる持ち送りを有し、またベースを持たない。 *9: チャヤティヤ窓面
 脇の菩薩像を収めたニツチ。 *10: ホールには4本の柱しか持たない。 *11: 8本ある柱の中央2本のみ。

第2章

エローラ仏教石窟の柱のデザインの由来と空間

はじめに

第1章ではエローラ仏教石窟で見られる柱について、そのデザイン・モチーフに着目して蓮華柱、壺葉飾り柱、クッション柱、そして蓮華柱と壺葉飾り柱を組み合わせたコンポジット柱の4種類に分類し、第1～12窟の平面において、それらの柱が節度をもって配されている点を述べた。本章では、その配列を理解するための一つの視点として、柱のデザイン・モチーフの由来に着目し、石窟空間との関わりについて考察する。

第1節 エローラ仏教石窟の柱のデザイン・モチーフの由来

第1章でエローラ仏教石窟の柱や付柱を4種類に分類した。そして、その分類は次の3種類のモチーフに着目してなされたものであった。a) 蓮華を象った円形装飾、b) 葉飾り装飾がその口から溢れ出るように表現された壺、そしてc) 一般にフルートを有するクッション状のもの、である。本節では、それらのデザイン・モチーフの由来について、仏教石窟に関わるものを中心に述べる。

1-1. 蓮華柱

蓮華柱のデザインの由来は古代インドのヴェーダの時代以来、ストゥーパや菩提樹などの、聖なるものを取り囲んでいる欄楯 *vedika* つまり柵の直立材だと考えられている¹⁾。欄楯は世俗世界から聖なる区域を分けるという役割を担っている²⁾。そしてそこに表されている大きく開いた蓮華は、超越した状態もしくは超越した誕生のシンボル³⁾、または太陽の表象⁴⁾ともいわれるなど、様々な意味を有しているのだが、欄楯以外でも崇拝対象を祠る祠堂の天井部分やムーン・ストーンと呼ばれる祠堂入口前の踏み台に欄楯のデザインに見られるような、丸く開いた状態の蓮華が見られること

から考えれば、それはその場所で生まれ変わることのできる、実際には、気持ちを改めるべき「聖」なる空間を示すシンボルだと考えられる。

このデザインの柱が最初に石窟に現れるのは、知られる限りにおいて、A.D.2c.初のサータヴァーハナ朝 Satavahanas に関わるマハーラシュトラ州ナーシク Nasik 仏教石窟第3窟においてである(写真Ⅱ-2-1)。そのファサードを構成している列柱ヴェランダの両端部の付柱のデザインとして、上下端部には半円形の、そして中央部分には完全な円形の、蓮華を象った円形浮彫が施されている。それは c.1c.B.C. から見られるマディヤ・プラデーシュ州バルフト Bharhut やサーンチー Sanchi のストゥーパに使われた欄楯や、同じサータヴァーハナ朝の支配下にあったアーンドラ・プラデーシュ Andhra Pradesh 州アマラーヴァティー Amaravati 大ストゥーパの欄楯(c.A.D.2c.)等の直立柱とほとんど同じ装飾構成を採っている。

さて、ナーシク第3窟の後、蓮華柱のデザインはほぼ中央部分より上の部分のみ彫刻が施され、下半分は平坦なまま残され、更に蓮華浮彫に花びら等の細部が施されない輪郭のみの簡略形を採るようになった⁵⁾(図1)。幾人かの学者は、そのデザインから「砂時計 hour glass」パターンと称している⁶⁾。これはナーシクの第3窟以外の石窟を含めた西デッカ地方のジュンナール Junnar、クダー Kuda、カンヘリー Kanheri などの c.A.D.2c. に属するとされるコンカン Konkan 地方の仏教石窟群で非常にポピュラーなデザインとなった。ただし興味深いのは、これらの例のすべてが付柱としてのみ現れている点である。その理由として考えられるのは、原形であると思われる欄楯の直立柱が、一本一本の柱としては認識されずに、聖と俗を分ける境界面として理解されたため、面表現のみが石窟に写されたのではないか、ということである。またジュンナールのガネーシャ・レナ Ganesha Iena のチャイティヤ窟では、付柱ではなく、ホールへの主入口の敷居にこの「砂時計」パターンが見られるが、これも空間と空間を分けている一種の境界面部分での表現である。更には、エローラの場合のように独立した柱のデザインとして石窟に現れるのは 6c.以降であり⁷⁾、その場合でも決して例は多くないのである。以上のことから、蓮華柱のモチーフは特に柱と関わるものではなく、聖と俗とに空間を分け、聖域を囲む境界面を示すものであると考えられるのである。なお、エローラのヒンドゥー教石窟では第27窟の特殊な例を除き蓮

華柱は見られない⁸⁾。

1-2. 壺葉飾り柱

この柱の特徴であるモチーフは、欄楯の直立柱が原形とされる蓮華柱以上に、本来柱とは関係のないものである。壺とその口から溢れ出る草花の表現、すなわち *purna ghata*⁹⁾ は「豊かさ」を示す吉兆のシンボルであるという¹⁰⁾。そしてそれは豊穰と繁栄の女神ラクシュミー *Lakshmi* の壺とも同一視されている¹¹⁾。仏教では八宝の一つで、ブッダを象徴するという¹²⁾。建築とこの吉兆のシンボルとの本来の関係は、アマラーヴァティー(図2)やナーガルジュナコンダのもの(写真Ⅱ-2-2)に代表される、アーンドラ・プラデーシュ州の2~3c.に属するストゥーパを飾っていた大理石スラブ(c.2c.)から窺うことができる。それには今や完全に崩壊している大ストゥーパ本体のかつての姿を表現しているとされるストゥーパの浮彫が刻まれているのであるが、そのストゥーパの入口部分の両脇には蓮華がその口から溢れ出るように表現された小さな壺が表されている。インドでは現在でも新しい住居の主入口の両脇に壺を置く慣習があるのだという。これには内部空間に吉兆をもたらすように、との意味が込められている。更に6c.はじめの成立とされる文献には入口を装飾するためのものとして、卍 *svastika* やミトゥナ *mithuna* (男女のカップルを表した像) や矮人像 *gana* などと共に、この壺葉飾りが挙げられているという¹³⁾。したがってこのモチーフは柱より、特に入口部分と関係が深いと考えられるのである。

さて、柱とこの壺葉飾りモチーフとの出会いを示す最初の柱の遺構はマハーラシュトラ州ベドゥサー *Bedsa* 仏教石窟チャイティヤ窟(c. 1c. B.C. 半ば)の入口ヴェランダの柱と思われる¹⁴⁾ (写真Ⅱ-2-3)。ここではアショーカ王柱をモデルとしたベル形柱頭を有する柱の、その柱基部分に壺が表されている。ただし葉飾り表現は付随していない。初期チャイティヤ窟で見られる表現に実際の木造建築細部を真摯に写した部分が多いため、この壺形柱基も当時使われていた木造建築の習慣に由来するデザインではないかという説もあった¹⁵⁾。木の柱の下端部が直接地面と接触するとその部分から腐食したり、白蟻などの被害を受けるので、そのために柱を壺から立てるという習慣があったのではないかというのである。しかし、ハンティントン女史 *S. L. Huntington* も指摘しているように¹⁶⁾、当時インドで造られていた素焼きの壺では柱

からの荷重を支えられないだろうから、後に葉飾り装飾を付けるようになった吉兆として置かれた壺の、石窟に応用された最初期の形と考えるのが妥当と考えられる。

いずれにしても、以上のように一つの石から刻み出される石窟表現を通じて、入口に単独で置かれていたシンボルとしての壺と柱は組み合わせられた。そして、先の「砂時計」パターンの付柱同様、紀元後二世紀前後の西デカン地方の仏教石窟群で共通に見られるファサード列柱のデザインとなったのである。更に付け加えるならば、ナーシクやジュンナールなどでは、アショーカ王柱の柱頭を意識したベル形のフルートが省略され、上下逆さまではあるが、柱基部分の壺とほとんど同じ形として表現されるようになった。こうして柱頭部分にも「壺」の形が現れることとなったのである¹⁷⁾。

さて、残存する建築及び石窟の例で、このエローラで見られるような柱頭部分の上向き壺と葉飾りのモチーフが見られるようになるのはグプタ期になってからである¹⁸⁾。最初の例として考えられているのは、ジャイナ教石窟ではあるが、マッディヤ・プラデーシュ州ウダヤギリ Udayagiri 第1窟(5c.初め)のポーチの柱である¹⁹⁾(写真II-2-4)。葉飾りはないが上向き壺のみが柱頭に表される柱もほぼ同時代、同じウダヤギリやその近くのサーンチーで見られること、更にマールワ地方をグプタ王朝の支配下に含めたチャンドラグプタII世(c.A.D.375-413)以降に発行されたグプタ王朝のコインの図柄として壺葉飾りが採用されていることから、ウィリアムズ女史 J. G. Williams はこの両地を含むマールワ地方が上向きの壺と葉飾りを柱頭として有する柱の発祥地であることを示唆している²⁰⁾。そしてその後、そのグプタ帝国の広大な領土支配を背景にして、この壺葉飾りモチーフの柱頭はグプタ期に建てられた寺院の共通の特徴となり、中世以降もデカン地方クリシュナ Krishna 川以南を除く²¹⁾地域では広く寺院建築に使われる柱の定番の装飾モチーフとなるのである。

仏教石窟においてこのモチーフが見られるのは、5c.後半のアジャンターのヴァーカータカ期の石窟からである。しかし第6窟下層入口脇柱を除けば、このモチーフの柱が現れるのは、スピंक氏 W. Spink の唱えるアジャンター開窟作業中断説²²⁾に従うならば、その中断後(A.D. 475年以降)の石窟に集中している。少なくともこの壺葉飾りのモチーフを冠した柱が使われない時期がアジャンターにはあった²³⁾ことを

意味している。またオーランガバード Aurangabad 仏教石窟でも同様に使われない時期があったと考えられる²⁴⁾。一方、エローラでは、仏教石窟のみならず、ヒンドゥー教石窟にも見られるようになるのである。壺葉飾りのモチーフは全インド的な吉兆の伝統モチーフであり、広く、また古代以来の総ての時期において認めうるが、そのモチーフを柱と結びつけた形で用いるかどうかは、開窟に当たった建築家や職人もしくはパトロンとなった政治勢力によって左右されたのではないだろうか。このモチーフが建築のどの部分に表されるのかについて場所、時代、歴史的背景を基に整理することにより、把握することが可能であろう。

1-3. クッション柱

この柱の顕著な特徴は柱頭に見られるクッション状の要素である。これが実際に現れるのは、壺葉飾り柱の最初の例として前述したベドゥサー石窟群のチャイティヤ窟の同じ柱であるという²⁵⁾ (写真 II-2-3)。その柱では、アショーカ王柱のスタイルから由来すると考えられるベル形部分の上に置かれる直方体形のケースのようなものの内側に、フルートを側面に有する円盤状の要素が見られるのである。この円盤状の要素はミロバランという果実にちなんだアーマラカ amalaka を示しているという。また蓮華や睡蓮の実と関係する²⁶⁾とも、復活と関連した様式化された果実²⁷⁾とも説明されている。果実ということから生命の根源を想像させ、またそれらの有する豊富な栄養素からエネルギーを意味するとも考えられる。

さて、ベドゥサーで見られたような柱頭に小さなアーマラカを持つ柱は後のナーシクやカールラー (共に c.A.D. 2c.) などの仏教石窟のヴェランダを飾り続けることになったが、その円盤状の部分が後に誇張され、柱頭を支配する特徴になるまで膨れ上がるような予兆は全くと言ってよいほど無い。ただし、このタイプの柱のアショーカ王柱スタイルとしての最大の特徴であるベル形状の柱頭要素が細く小さくなったものが、エローラのクッション柱のクッション状要素の下に必ず見られる構成要素である。通常フルートが施された、上端部分のくびれた円筒状要素の原形であるとも見られているのである²⁸⁾。つまり、クッション柱全体を形づくっている基本的な構成要素は、このベドゥサーのアーマラカが初めて現れたとされる柱に既に共通のものが見られると考えることができるのである。

一方、レリーフ表現の中にはしばしばクッション状の柱頭を有した柱が現れている。例えばマトゥラーの欄楯（c.A.D. 2c.）に施されたレリーフパネルを粹取っている柱の表現はクッション状柱頭を有している（写真Ⅱ-2-5）。注目すべきはそのクッションの上の装飾で、まるでアショーカ王柱のように背中合わせの動物（この場合はグリフィン又は羽のあるライオン）が描かれているのである。この例から考えれば、アショーカ王柱の柱頭のベル形からクッション形は由来する可能性も示されるのである²⁹⁾。また同じく前出のアマラーヴァティーのレリーフ・ストゥーパ（c.A.D.2c.）の入口部分の表現にはクッション状のものを柱頭部に有する柱が見られる。そしてこの柱もライオンを載せているのである。ただしこれらの例はクッション状の部分しか持たない柱であり、エローラのクッション柱に見られるような、クッション状モチーフの下に繋がる構成要素を有していない。しかしながらこのクッション状のモチーフに関しては最初から常に柱の柱頭部分に出現し、蓮華や壺が元来柱とは無関係に成立していたと考えられるモチーフと大きく異なっている。

さてエローラのクッション柱と直接関係したデザインの柱が出現するのはアジャンター仏教石窟後期窟の時代（5c.後半）になってからである³⁰⁾。第2窟のヴェランダの柱（写真Ⅱ-2-6）や第19窟チャイティヤ窟のポーチの柱など、アジャンターの例はまだクッション状の部分は柱身断面制限され小さいままだが、クッション状の部分以下の要素についてもほぼ同じ構成を有しているのである。そして有名なアジャンターの壁画に表現されている建築の柱のほとんどがこれまたクッション柱なのであり（図3）³¹⁾、クッション柱のデザインは木造の柱のデザインであるとする説が出てくるのである。ウィリアムズ女史³²⁾やポドゥヴァル氏³³⁾はアジャンター第6窟下層窟祠堂入口や第20窟ホール入口に使われたクッション柱によって支えられたマカラ・トーラナのデザインが木造起源であるとし、特にウィリアムズ女史はアジャンター地方で一般に行われていた世俗の木造建築からのデザインであると示唆した。更には、アジャンターの壁画に見られるこのデザインにきわめて近い柱が7c.から本格的な歴史の始まる南インドのヒンドゥー教寺院では一般的に見られる柱のデザインなのである（写真Ⅱ-2-7）が、G・ジュヴォーデブリエユ氏はそれを全くの木造起源だとした³⁴⁾。つまりアジャンター地方の5c.末当時の木造の柱と

南インドとの木造の柱とはほぼ同じクッション柱のデザインであったということになり、裏を返せば、このデザインはインドで広く一般に使われていた木造の柱のデザインであったと見なされるのである。

無論、先にも触れたように、その元となった木造の柱のデザイン自体がアショーカ王柱を基としていたことはあり得ることである。しかしながらモチーフがかなり抽象化しており、蓮華柱や壺葉飾り柱とは異なり、独立した具体的なシンボルがみえてこない。アーマラカは北インドのヒンドゥー教寺院の尖塔シカラ *sikhara* 頂部に採用されているシンボルでもある。尖塔が天と地を繋ぐ宗教上の宇宙軸としての柱を象徴であると言われることも多いことから判断すれば、石窟の場合に同様なアーマラカを柱頭に持った柱を適用したのは天井と床の空間に宗教上の宇宙を表現する一つの手段だったかもしれない。ただしその場合も空間を支える「柱」がデザインの根元にあったと思われる。

蓮華柱や壺葉飾り柱との違いのもう一つは、その両者が蓮華や壺葉飾りといったシンボルが先行しているがために、柱にそれをデザインする際に自由度が高く非常に多くのヴァリエーションが見られるのに対して、クッション柱のデザインは、無論プロポーションの違いやフルートの有無等の細かい差異はあるけれども、ほとんど同じパターン配列を有している点である。このことは既にデザインが固定していた伝統的な木造の柱の形式をそのまま石に置き換えたと考える根拠として見ることができる。石窟に採用した際、このデザインにとって重要だったのは、それが有しているシンボルではなく、「柱」そのものであったと考えられるのである。

さて、アジャンターで現れたクッション柱は 6c. 前半になりカラチュリ朝に関わるとされるヒンドゥー教シヴァ派の寺院であるジョゲシュヴァリ石窟、そしてエレファンタ石窟においては最高に発展し、先の尖塔上のアーマラカを意識したのか、クッション部分は柱身断面にその大きさが制限されないで大きく膨らんだ。そしてエローラでは 6c. 後半のヒンドゥー教石窟を経て、7c. には仏教石窟の柱としても採用されることになるのである。しかし、ラーシュトラクータ朝の支配 8c. 以降に属するとされる第 11, 12 窟では、蓮華柱や壺葉飾り柱が見られる一方で、クッション柱は全く見られない。8c. 以降のエローラの仏教石窟では、こうした柱のデザインに関する変化

のみならず、基本的な石窟の構造において変化が見られることもあり、開窟に関わった建築家や職人が大きく入れ替わった可能性が考えられる。

1-4. コンポジット柱の位置づけ

壺葉飾り柱を基本とし、柱身部分に蓮華柱のモチーフの浮彫を施した柱をコンポジット柱として本論文で定義したが、なぜ異なるモチーフが組み合わせられたかについて考えてみたい。

蓮華柱は欄楯を由来とし、聖なる空間と俗の空間を分かつ境界面の表現であり、そして壺葉飾り柱はある特定の空間へ吉祥を呼び込む壺を由来とし、入口に関係した表現であった。ところが、立体的に建築を刻み出した丸彫りのものでないならば、寺院として石窟の形式を採った場合、外と内の境界面は石窟のファサード面のみであり、その部分は通常石窟の内部空間への唯一の入口ともなっているのである。言い換えれば、石窟に見られる列柱の場合、外と内の境界と入口とが共通する場所に造られることが普通であり、その列柱に使われるデザインとして2つの意味を有すように考慮されたとしても不思議ではない。したがって、ここではコンポジット柱の扱いについては、独立した由来を有する柱と考えるのではなく、蓮華柱と壺葉飾り柱の特徴の両面を備えたものとして捉えている。

第2節 エローラ仏教石窟の柱のデザインと空間

2-1. 3種類の柱と空間

前節でエローラ仏教石窟で見られる蓮華柱、壺葉飾り柱、クッション柱の3種類の柱の由来を考察した。その中で重要に思われるのは蓮華柱や壺葉飾り柱が空間を支える構造的な柱から直接由来しないと考えられた点である。

蓮華柱は、途中「砂時計」パターンと呼ばれる簡略形は存在するなど浮き彫り密度の高低や時代的な違いは存在したけれども、その全体的な輪郭に関して言えば、ストゥーパ欄楯のデザインからエローラ仏教石窟に至るまでほとんど変化が無いと言ってよい。それは、既に一つのスタイルが定着していた欄楯の直立材そのものがデザインの基本となっていたためと考えられる。ただし、それは空間を支える柱のデザインと

して使われたのではなく、ほとんどが付柱のデザインとして現れたように、欄楯を意識した2次元的表現として使われ、レリーフ的性質の強いものといえるだろう。オーランガバードやエローラの仏教石窟では形の上では独立柱としても現れることとなったが、この場合も彫り出された四角断面の柱の柱身各側面に、それぞれ聖なる空間の境界を示す欄楯のデザインをレリーフとして刻み加えたものであるといえよう。

壺葉飾り柱の場合は、壺葉飾りのモチーフが柱基から柱頭へ移動したり、また刻まれる壺葉飾り自体についても時代や場所によって表現が異なっている。それは、意味の上では建築空間に関係するけれども、デザインの上では実際の建築空間の構造とは全く関係しない壺から由来することと関係すると思われる。つまり壺葉飾りを有した柱には原形はなく、壺葉飾りを柱のモチーフとして適用する際の形の自由度が大きかったためと考えられる。例えば第12窟第1層ではファサード中央の柱間、つまり主門口を形成する2本のみが壺葉飾り柱で、その他の総ての柱は無装飾な単純方形柱であるのだが、その2本の壺葉飾り柱は基本的な輪郭は単純方形柱であり、柱頭付近に壺葉飾りのレリーフが付け加えられたものと見なされるのである（写真Ⅱ-1-21）。まるで、入口部分に当たる単純方形柱に、壺葉飾りが後から「置かれた」かのようなのである。壺葉飾りは伝統的に入口に置かれる吉兆のシンボルであった。柱のデザインが先にあったのではなく、入口部分と結びついた柱に壺葉飾りモチーフが刻まれた結果として生じたといえるのである。

一方、クッション柱の場合は、特に世俗で使われていた木造の柱が由来だと考えられた。つまり、蓮華柱や壺葉飾り柱とは異なり、柱としてのデザインである。その柱のデザインに含まれるクッション形モチーフに代表される構成要素が単独で表現されることはほとんど無く、秩序を保って組み合わせられ、一つの柱のデザインとして完成している。またエローラでのこの柱はクッション状部分の断面が柱身断面より大きい場合が多く、彫り出す際には最初からこのデザインの柱を彫るつもりでなければ実現できない（写真Ⅱ-1-11）。まさに柱を3次元的に「彫刻」する作業が要求されるのである。それは立体的な偶像を刻み出す際と同じような繊細なプロポーション感覚が必要とされたであろう。つまり蓮華柱や壺葉飾り柱の場合とは異なり、基本となる方形柱を刻み出した後から施すことのできる2次元的なレリーフ表現では生み出せない

デザインなのである。それは木造建築で使われていた構造的な柱そのものが様式化し、石窟における彫刻表現へ写されたといえるのである。

以上のように、エローラで見られた以上の3タイプの柱は、様々なレベルで形式化されたデザインが、柱と様々に結びついた結果として成立した。石窟の場合は構造的な制約がほとんど無いに等しいため、柱に関係のあるデザインであっても無くても、それが直接的に柱の表現と関わる事が可能なのである。そして、そのような柱によって空間を表現しているのが、石窟の特色の一つと言えるのかも知れない。

2-2. 蓮華柱・壺葉飾り柱とエローラ仏教石窟の空間

前述したように、蓮華柱の由来は聖なる空間の囲い、すなわち欄楯の直立材であった。さてエローラで蓮華柱が見られる石窟は第5窟、第7窟、第10窟、第11窟の4窟である。その内、第10窟チャイティヤ窟内部の身廊と側廊とに分けている列柱として使われている点には注目すべきである。聖なるストゥーパを祠った身廊は比丘達の集会ホールとして機能し、側廊は世俗の人々が右繞礼拝する通路であるとされる³⁵⁾が、その両空間の境界に蓮華柱が使われているのである。そして、この第10窟とほぼ同時代とされるマッディヤ・ブラデーシュ州サーンチーの、石窟形式ではなく地上に建設されたチャイティヤ堂(第18寺院)でも、同じく身廊と側廊を分ける列柱に、このエローラの蓮華柱に当たるデザインの柱が使われているのである。したがって、エローラ仏教石窟が成立した7c.中頃には、チャイティヤ窟(堂)の身廊と側廊とを分ける柱のデザインとして使われていたことが考えられるのである。

さて、第5窟ではファサード位置と後廊位置に使われている。その第5窟の特徴は、大ホール内側に2列の長いベンチ状の台が設けられ、列柱によって囲まれた空間のベンチの配された範囲の天井部分のみ幾分周囲より高めてあり、一つの独立した空間を成すように扱われているのである。また第11窟第3層では、第5窟と同じように、蓮華柱がファサードの位置に使われている。第11窟の第3層は残りの2つの層と比べてホールの空間が広く、房室も多く計画されていたと考えられ³⁶⁾、一般には世俗の人々に関わらない、比丘達のための宗教空間の成立が目的だったと考えることが可能である。またホールの左隅にブッダ像を取めた小祠堂を有していること、更に第5窟の最大の特徴であったベンチ状の低い台に関しても、ホール列柱の足下を繋いだ低

い台に表されていると見なせば、第 11 窟第 3 層は、未完成ながらも、第 5 窟同様の機能を有したホールとして計画されたと考えられる。

第 7 窟ホール内では平面上で矩形を成すように配された 4 本の蓮華柱のみである。そしてホール側壁からは房室のみが掘られている。この場合もその 4 本柱で囲まれた部分が、ベンチ状の台などの特徴は持たないけれど、第 5、11 窟と同様の機能を有するホールであった可能性も考えられるのである。

一方、壺葉飾り柱の由来は、入口に置かれた吉兆の壺であり、その入口を入った内部空間に吉兆をもたらすように、との意味が込められていた。そして実際エローラ仏教石窟の第 6、5、10、12 窟ではファサード位置のヴェランダ列柱および主ホールから展開する副ホール前面、つまり外部もしくは主となるホール空間に面する位置に、また第 2 窟ではブツ像ギャラリーの前面列柱に壺葉飾り柱が使われており、由来の壺の意味が意識され、その柱を入口とした内側の空間に吉兆が訪れるように適用されているとすることができよう。ただし第 3 窟のみはホール内部を巡る列柱に使われている。エローラでの他の石窟では外部と内部の接する面に使われていることを考慮して判断すれば、列柱によって囲まれた空間とその周囲の空間とは内と外の関係にあると見なすことができる。つまり、第 3 窟の列柱によって囲まれた部分は吉兆を呼び込むべき重要な空間であると考えられ、何らかの宗教儀式に結びついていた可能性があるかと判断できよう。

蓮華柱と壺葉飾り柱の両面の性質を有するコンポジット柱は第 8、10 窟では共に、内側 2 本が壺葉飾り柱であるファサード列柱の端部に当たる付柱として現れている。内側 2 本が壺葉飾り柱で端部の 2 本がコンポジット柱であるということは、この列柱は基本的に壺葉飾り柱による列柱であり、外から内側に向かって吉兆をもたらすように意図された配置と考えられる。一方、もう一つの同じ第 10 窟のチャイティヤ窟内部の、身廊と側廊とを分ける列柱では、身廊前面中央の 2 本のみがコンポジット柱である。この列柱の場合、30 本総てが蓮華柱で、2 本のみ壺葉飾り柱の要素を身廊入口部分に加えたと見なすことができる。つまり、このチャイティヤ窟内部の列柱は基本的には蓮華柱によるものと見なすことができる。つまり身廊部分の空間を他の空間とは区別する列柱であり、そして身廊前面のみが身廊空間と外とが接触する位置と

して設定されていると考えられるのである。このように、同じコンポジット柱であっても、ファサード部分の列柱に使われるものでは壺葉飾り柱の性質が強く、内部の列柱に使われるものでは蓮華柱の性質が強いといえよう。

第4、9窟では空間の前面列柱にコンポジット柱のみが使われている。つまり、以上の議論に基づけば、これらの石窟では、蓮華柱の性質と壺葉飾り柱の性質が等しく関係していると見なすことが可能である。第4窟と第9窟は共に奥壁中央にブツダ像を配した列柱廊のみの石窟である。このコンポジット柱のみの列柱は外部から内部へ吉兆を呼び込む位置でありながら、外部と内側の聖なるブツダ像の祠られた空間とに境界をつくっているものと捉えることができよう。

2-3. クッション柱とエローラ仏教石窟の空間

クッション柱はインドの木造建築の柱の普遍的なデザインに由来していることが考えられた。つまりこの柱は荷重を支える構造的な柱の写しとして捉えることができ、そこには柱で支えられた建築部分の写しも行われていると考えられる。

さて、エローラ仏教石窟ではクッション柱の多くが主祠堂・副祠堂の前室列柱およびニッチ脇の付柱などの、像彫刻が表現される前面位置に現れている。第8窟では、独立して刻まれた主祠堂戸口直前の2本の柱がクッション柱である。また同じ第8窟ホール右前方に設けられた三尊形式のブツダ像を収めた空間的な大きなニッチ前面に表された2本の柱は、付柱ではないクッション柱である。また第10窟下層の正面ヴェランダ左右端部に設けられた副祠堂の前室前面の2本の柱もクッション柱である。以上の例から判断すれば、これらのクッション柱は、祠堂（もしくは主なる彫像）の前方に立つ2本の木造の柱であり、祠堂・ニッチの存在との関係で考えれば、祠堂入口前に差し掛けられた庇を支持する柱と考えられる。日本建築に当てはめて言うならば、仏堂の向拝の柱に相当するものである。これは構築的なヒンドゥー教寺院建築の場合で一般的である、祠堂入口前にポーチを形作り、2本の柱でその屋根を支える形式に良く似ている。つまり、エローラ仏教石窟では石窟の形式によって、構築的なポーチ（庇）を石の中に写ししたものと見えよう。

ニッチの脇柱として使われるものは、例外なくクッション柱である。第6窟祠堂前室の左右端部の女性像を含んだニッチ（写真Ⅱ-1-8）、第10窟上層チャイティヤ窓

両脇の菩薩を収めたニッチが挙げられる。また第9窟の奥壁に並んで刻まれた三尊形式のブッタおよびボディサッタヴァ像をそれぞれ枠取っている柱も、第1章で提示した表1では主祠堂前室前面位置に分類したけれども、これも見方を変えれば巨大なニッチの脇柱と見なすことが可能であり、そして同様にクッション柱が使われている。つまり、像彫刻を収める入れ物を装飾する建築的な表現として、木造の柱のデザインであるクッション柱が門もしくはポーチの柱として使われている。そしてニッチを小さな祠堂の一形態と考えれば、こちらも祠堂の入口の前に付属した木造のポーチ（もしくは庇）をレリーフ表現で写したものと見える。

第2窟の場合、ホール内側の列柱としてクッション柱が使われており、像彫刻を収めたニッチの脇柱としてではない。ところが、第2窟のその列柱内の空間の床高はホール奥の主祠堂後の後廊部分の床高と同じ（共に前・左右廊より600mmほど高い）であり、祠堂、後廊そして列柱内空間は、一つながりの空間として意図されたものと考えられるのである。つまり、第8窟の場合の祠堂前方2本のクッション柱によるポーチの構成が更に強調され、ホール空間全体を像彫刻に関わる礼拝空間としたものと捉えることができるのである。それはヒンドゥー教寺院で見られた空間構成の変遷で、当初は小さな方形平面の単純な祠堂とポーチであったものが、後になり広いマンダパ mandapa を祠堂前方に付加し、大建築へと発展していったその状況に通じるところがある。つまり、第2窟では構築的なマンダパがホール内に実現されていると見なされる。

このようにクッション柱のほとんどが像彫刻を収めた祠堂入口前やニッチに使われている。このことを考慮すれば、そこには彫像を飾る建築的表現のイメージが反映されている可能性が考えられる。アジャンター壁画に見られる説話表現の多くでは、説話内容の中心人物が表されている場所の多くがクッション柱によって支えられたポーチ状の建築部分である点は、この地方の傾向を考える上において示唆的である。アジャンター壁画で見られる建築は、すべてが高貴な人物像と共に描かれており、宮殿建築 palace の表現と考えられている³⁷⁾。つまり、クッション柱は世俗で使われていた柱の中でも、特に宮殿建築で使われたデザインの柱から由来しているといえるのである。そこから仏教においても高貴な存在であるブッタ像をはじめとする彫像を含む

建築として、クッション柱を使った宮殿建築の表現が応用されたのであろう。

ではなぜクッション柱は彫像表現と関係しているのかについて少し見方を変えて考えてみたい。まず、彫像を収めるための小さなニッチの場合、彫像と共にニッチを枠取るクッション柱も同時に計算されて、デザイン構成がなされ、完成されたと考えられる。つまり彫像を彫刻することと柱を彫刻する作業が同時に進行していた可能性が高いのである。それは本格的な祠堂に含まれる彫像とクッション柱の場合でも同様の指摘ができる。第2窟の各部分の完成状況を整理すると、祠堂内部とホール内部のクッション柱はほとんど完成しているのに対し、ホール周囲の壺葉飾り柱は半分が未完成である。また第3窟では祠堂が完成しているのに対して、ホール内部の壺葉飾り柱はほとんどが完成していない。このことから言えるのは、エローラ仏教石窟ではまず崇拝中心である祠堂から完成されていく傾向にある点であり、そしてクッション柱も祠堂の作業と平行して刻まれているのである。つまり、クッション柱で枠取られた彫像を収めるニッチを完成させる作業と同じように進められているとも考えられ、クッション柱は彫像を表現することと一体として計画されているともいえる。先に述べたように、エローラのクッション柱の特徴は、立体的な偶像を刻み出すような、繊細なプロポーション感覚を必要としたと考えられる点である。クッション柱を刻み出す手は、彫像を刻み出す手と同じである可能性も考えられるのである。そこに彫像と関連した位置にクッション柱が使われる理由を見つけることができよう。

第5窟では像彫刻に関係のないホール内側にクッション柱による列柱が見られる。このホールでは、蓮華柱がファサード位置と後廊に使われ、後廊とホール空間が区別されていると考えられるため、ホール空間に属しているクッション柱は後廊奥に刻まれた祠堂のブツダ像との関わりは、第2窟の場合と違い、希薄である。つまり、第5窟のクッション柱の位置は単純に像彫刻とポーチの関係だけでは説明できない。ではなぜクッション柱が使われているのであろうか。この場合考えなければならないのが、第5窟の平面形の原形と考えられているヒンドゥー教に関わるエローラ第29窟との類似である³⁸⁾。この第29窟の平面は大きな十字形ホールの奥にリングア祠堂を有する構成で(図4)、すべてクッション柱による列柱がホール全体を支えているのである。そしてホール入口から奥の祠堂へ向かって並んでいる様は第5窟に非常に類似し

ている。つまり、第5窟のホールの列柱は第29窟の列柱表現を踏襲したものと考えられるのである。ただし、第5窟の場合は柱のすべてがクッション柱ではない。蓮華柱、壺葉飾り柱が使われているのである。それは主に世俗と結びついた偶像崇拜のためのみのヒンドゥー教寺院とは異なり、仏教に関わる第5窟の場合には、祠堂の他に、理屈の上では世俗から離れた比丘のための空間があるため、機能による空間の分割が行われ、それが柱のデザインの使い分けに表されているとも言えるのである。

おわりに

本章ではエローラ仏教石窟で見られる蓮華柱、壺葉飾り柱およびクッション柱のそれぞれのデザインの由来を把握し、それを基にエローラ仏教石窟の空間構成についての考察を試み、結果として柱のデザインの配列には一定の傾向が見い出された。蓮華柱は空間の境界を示す位置、壺葉飾り柱は内部空間に吉兆を呼び込む位置、すなわち入口位置、そしてクッション柱は像彫刻と関わる祠堂・ニッチの入口を飾るポーチとしての位置であった。ただしこれはエローラ仏教石窟の成立した時期における傾向であると考えべきである。なぜなら、ここでは柱のデザインによってのみ空間に関する議論をしたのみで、例えば図像配置等の図像学的な空間分析による方法もエローラの空間形態の成立を捉える手段として考えられるからである。またやや時代的に先行すると考えられているアジャンターやオーランガバードの5c.末以降の仏教石窟およびエローラのヒンドゥー教石窟の柱のデザインと配列を更に検討することによって、柱のデザインと配列の関係はより明確になるであろうし、また時代的変遷をもそこには見出せるかも知れない。また、本文中で少し触れた、石窟の完成度の違いは、石窟内での重要性の違いを示すと共に、石窟製作に関わった技師や職人等の活動をも写している可能性がある。今後の研究に期待したい部分である。

註

1)Pereira, J., *Elements of Indian Architecture*, Delhi, 1987, p.25. なお Pereira はこの蓮華柱を、

インド全土で見られる面取り柱 (Indic order と名付けている) のヴァリエーションの一つ (neo-Indic) として考えている。

2) Rowland, B., *The Art and Architecture of India: Buddhist, Hindu, Jain*, Harmondsworth, 1953, p.79.

3) Huntington, S. L., *The Art of Ancient India: Buddhist, Hindu, Jain*, New York, 1985, p.74.

4) Havell, E.B., *Indian Architecture: its psychology, structure and history*, London, 1913, p.14.

5) Nagaraju 氏はこの蓮華柱デザインの簡略形の起源を欄楯ではなく、紀元前からのバージャー Bhaja 仏教石窟群等で見られる 4 角断面の柱の、その中央部分のみを 8 角断面になるように面取りした際に生ずる半円形の輪郭であるとしている。Nagaraju, S., *Buddhist Architecture of Western India*, Delhi, 1981, p.94, n.24. このタイプの面取り柱はオリッサ Orissa 州ウダヤギリ・カンダギリ Udayagiri ・ Khandagiri 石窟群 (起源後 1 世紀) でも見ることができるが、筆者はバージャーの例も、オリッサ州の例も、その起源としてストゥーパ等に使われる欄楯が起源であろうと考えている。なお Pereira は 1c. B.C. に前述のオリッサ州ウダヤギリ・カンダギリ石窟群と、グジャラート州カーティアーワール半島 Sana の仏教石窟の、東西両インドで発生したようであると記述している。Pereira, *op.cit.*, p.22.

6) Nagaraju, S., *op.cit.*, p.90. や Dhavalikar, M.K., *Late Hinayana Caves of Western India*, Poona, 1984, p.9. 等。なお、Pereira は circle-and-tongue pattern と称している。Pereira, *op.cit.*, p.25.

7) ラージャスターン州コルヴィ仏教石窟には「砂時計」パターンを有する柱が見られるが、年代は未確定である。石窟ではなく構築された石造の寺院では、同じラージャスターン州ムクンダッラ Mukundarra のシヴァ寺院の柱に、このデザインが施されている例がある。

8) エローラ第 27 窟のヴェランダ列柱の付柱として見られるのみである。ただしこの石窟がヒンドゥー教石窟であったかどうか、実際には明確ではない。

9) punna ghata, purna kalasa, purna kumbha 等とも記述される。また英語では vase of plenty, pot-and-foilage 等として記述される。

10) Coomaraswamy, A.K., *History of Indian and Indonesian Art*, Indian ed., Delhi, 1972, p.65.

- 11) Havell, E.B., *Ancient and Medieval Architecture of India*, London, 1915, p.153.
- 12) Das, D. Jithendra, *The Buddhist Architecture in Andhra*, New Delhi, 1993, pp.27-28.
- 13) Agrawala, P.K., *Gupta Temple Architecture*, Varanasi, 1981, p.110.
- 14) Pereira は壺葉飾り柱を Gangetic order として定義しているが、ベドゥサー仏教石窟チャイティヤ窟のヴェランダのタイプは proto-Gangetic order と呼び、最初の例をパールフト Bharhut・ストゥーパのトーラナのレリーフに見られるものとジャガヤペッタ Jagayapetta としているが、ベドゥサーの例とほぼ同じ時代のものである。
- 15) Brown, P., *Indian Architecture (Buddhist and Hindu Periods)*, Bombay, 1959, p.23.
- 16) Huntington, *op.cit.*, p.102.
- 17) Pereira は Proto-Gangetic order から Gangetic order への変化の経緯については何も記していない。
- 18) Pereira はこの壺葉飾りの柱頭はアショーカ王柱に見られるベル形柱頭から由来したものであり、そのベル形をポットを逆さにしたものと解釈した。Pereira, *op.cit.*, p.33.
- 19) Williams, *The Art of Gupta India (AGI)*, Princeton, 1982, p.49. と Pereira, *op.cit.*, p.23. なお、Pereira は壺葉飾りのデザインについて非常に細かな分類を行っているが、ここではすべて同じ壺葉飾りとして扱っている。
- 20) Williams, *op.cit.*, p.49.
- 21) アーンドラ・プラデーシュ州西部アランプル Alampur の初期西チャールキヤ朝 Early Western Calukyas に関わる c.A.D.7-8c. のヒンドゥー教寺院では柱頭モチーフとして使われている。この場所は同時代的に南北インドの寺院様式が共に見られ、壺葉飾り柱を有する寺院がいわゆる北型シカラを有するものである点は興味深く、なお、装飾モチーフとしてはインドの南北を問わず使われていたようであり、初期チョーラ朝の後期 c.A.D.11c. のヒンドゥー教寺院の外壁面を飾る代表的な装飾の一つ kumbhapanjara は壺葉飾りモチーフを適用したものである。
- 22) Spink, W.M., 'Bagh: A Study.', *Archives of Asian Art* 30, New York, 1976-77, pp.53-84. など。
- 23) Williams, J., 'Vakataka Art and Gupta Mainstream' Smith, Bardwell L. ed., *Essays on Gupta*

Culture, Delhi, 1983, p.219.

24) オーランガバードでは第1窟と第3窟、そして第8窟及び第9窟でこの壺葉飾り柱が見られるけれども、第2、5、6、7窟では全く見られない。

25) Brown, P., *op.cit.*, p.12., Pereira, J., *op.cit.*, p.22., Harle, J.C., *The Art and Architecture of the Indian Subcontinent*, Harmondsworth, reprinted, 1990, p.54. 及び Tadgell, C., *The History of Architecture in India: From the Dawn of Civilization to the End of the Raj*, New Delhi, 1990, p.50.

26) Havell, *op.cit.*, p.61.

27) Tadgell, *op.cit.*, p.301, glossary.

28) Pereira, *op.cit.*, p.22.

29) Coomaraswamy は北部インドのグプタ期と中世初期の石窟及び構築的寺院の柱の柱頭に関する記述の中で、リブのあるクッション状柱頭と壺葉飾り柱頭の2つをその時代十分に発達した形式として挙げたが、前者についてアショーカ王柱の柱頭とアーマラカの両方に関連したもの、そして後者に関しては欄楯と述べている。

Coomaraswamy, A.K., *op.cit.*, p.98.

30) Pereira はアジャンター第7窟がその最初のヴァリエーションとしている。そしてバグ Bagh やオーランガバード、エローラ、エレファンタと、クッション状部分を発達させたとして記述している。 Pereira, *op.cit.*, p.23.

31) K. Krishna Murthy はアジャンター壁画で見られる柱はすべてクッション形柱頭を有するものであるとし、有名な ghata-Pallava (vase-and-foilage capital) すなわち本研究における壺葉飾り柱は全く見られないとしている。 Krishna Murthy, K., *Early Indian Secular Architecture*, Delhi, 1987, p.93.

32) Williams, J., 'Vakataka Art and Gupta Mainstream.' Smith, Bardwell L. ed., *Essays on Gupta Culture*, Delhi, 1983, p.220.

33) Poduval, J., 'The Asmakan Cave Doorframes of Ajanta and Their Distant Relatives in Upper Bundelkhand' Parimoo, Ratan et al. eds., *The Art of Ajanta: New Perspective*, New Delhi, 1991, p.243.

34) Jouveau-Dubreuil, G., *Dravidian Architecture*, Varanasi, Second reprint, 1972, p.24.

35) Havell, E.B., *The Ancient and Medieval Architecture of India*, New Delhi, 1915, p.73.

36) 第 11 窟第 3 層は未完成の部分が多く、実際には房室を一つも完成させていないが、非常に特徴の似ている完成した第 12 窟第 2 層の平面から類推し、多くの房室がホール側壁から開けられる予定だったと考えられるのである。

37) V.S. Agrawal は全く残らないグプタ期の宮殿建築をトレースすることのできる唯一の史料としてアジャンターの壁画を位置づけている。Agrawal, V.S., *Gupta Art*, Lucknow, 1948, p.24.

38) エローラ第 29 窟の平面形自体はボンベイ近郊のエレファンタ Elephanta 第 1 窟の平面形を更に進歩させたものと考えられている。Spink, Walter M., "The Great Cave at Elephanta: A Study of Sources" Smith, Bardwell L. ed., *op.cit.*, p.252. また、Huntington は左右に張り出しを持った長堂形の平面やクッション柱扱い方の類似から、エローラ第 5 窟はエレファンタ第 1 窟との強いつながりがあるとした。Huntington, S.L., *op.cit.*, p. 268.

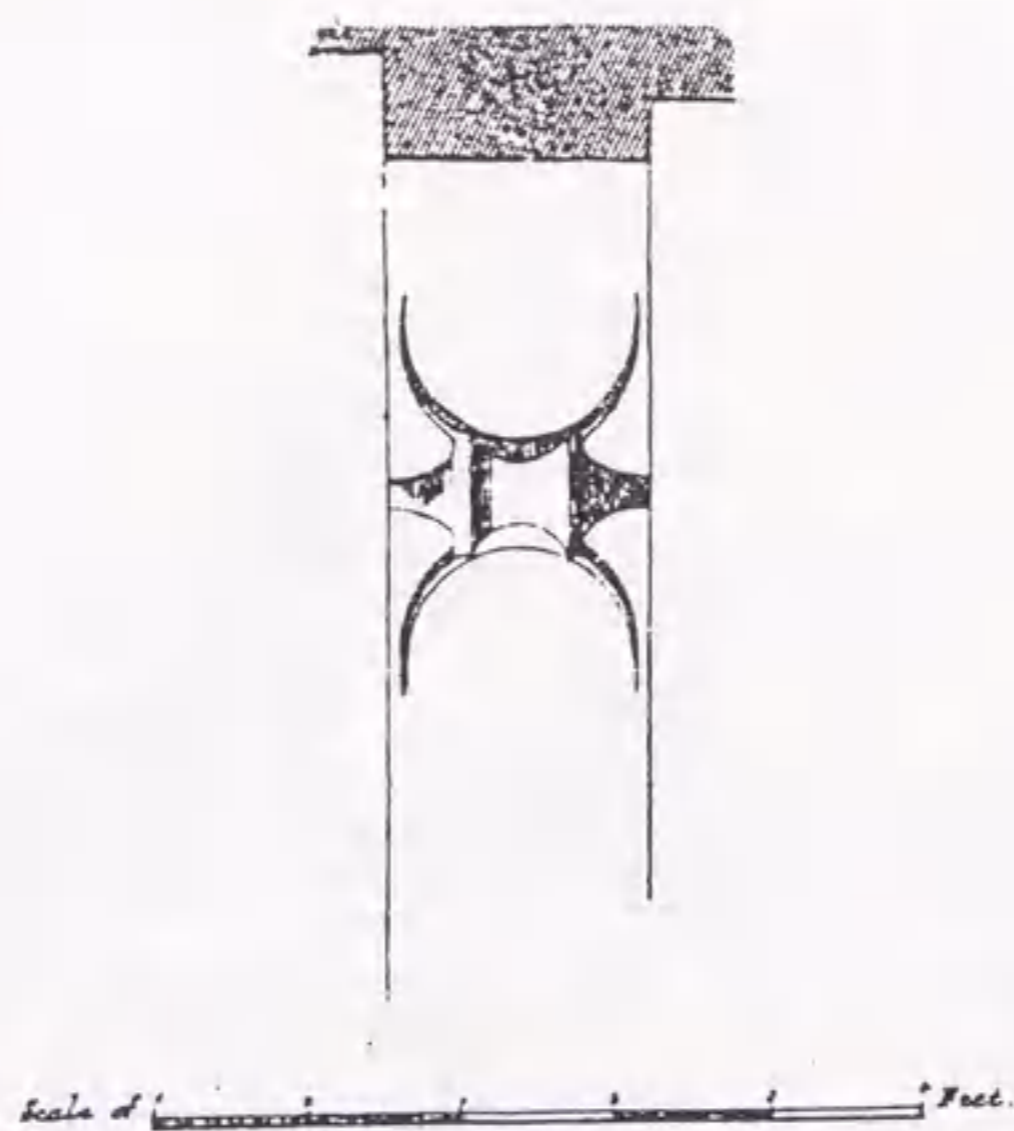


図1 「砂時計」パターン (クダー第6窟)

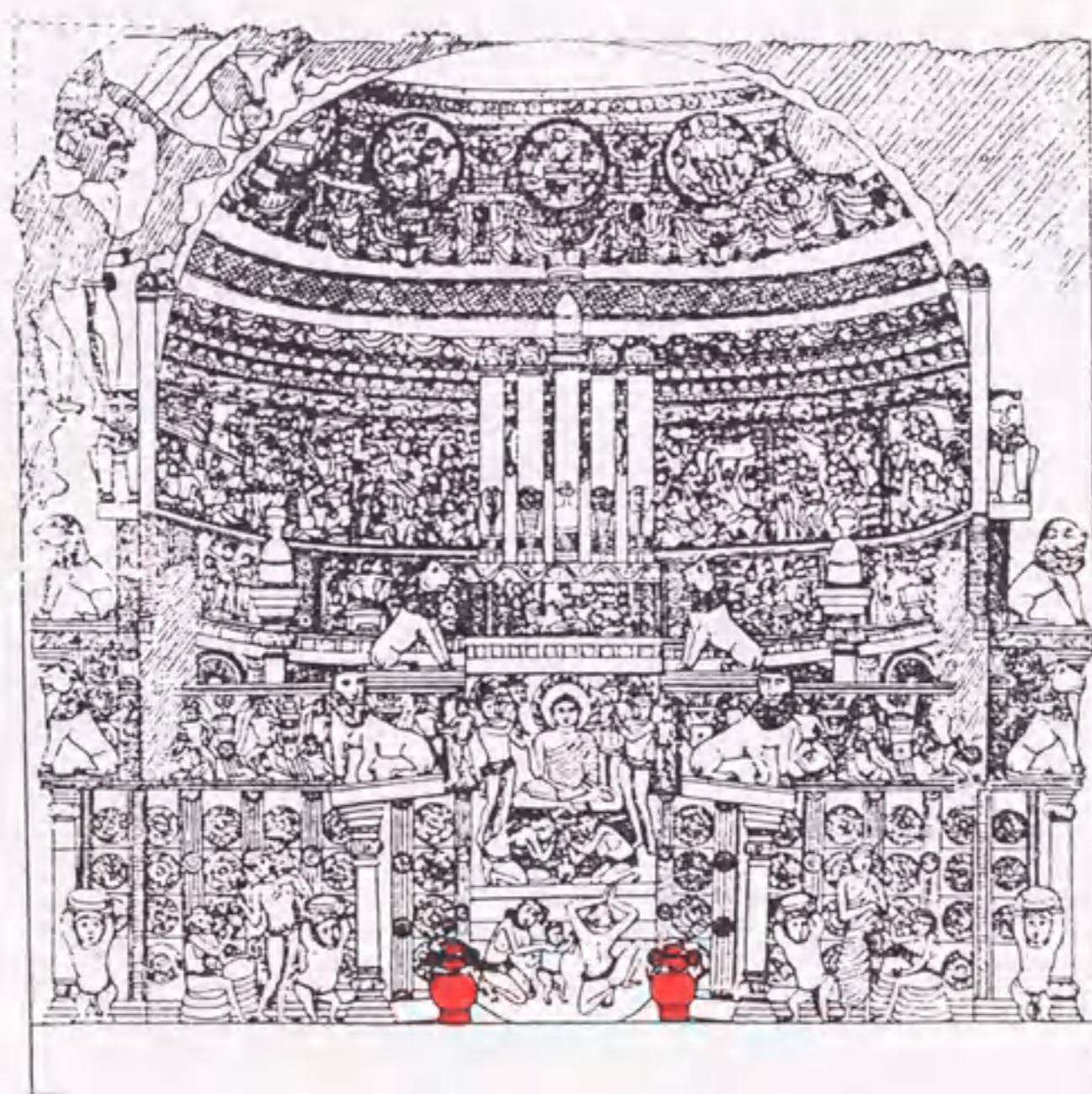


図2 アマラーヴァティー・ストゥーパのレリーフ
(赤く塗られた部分が壺葉飾り)

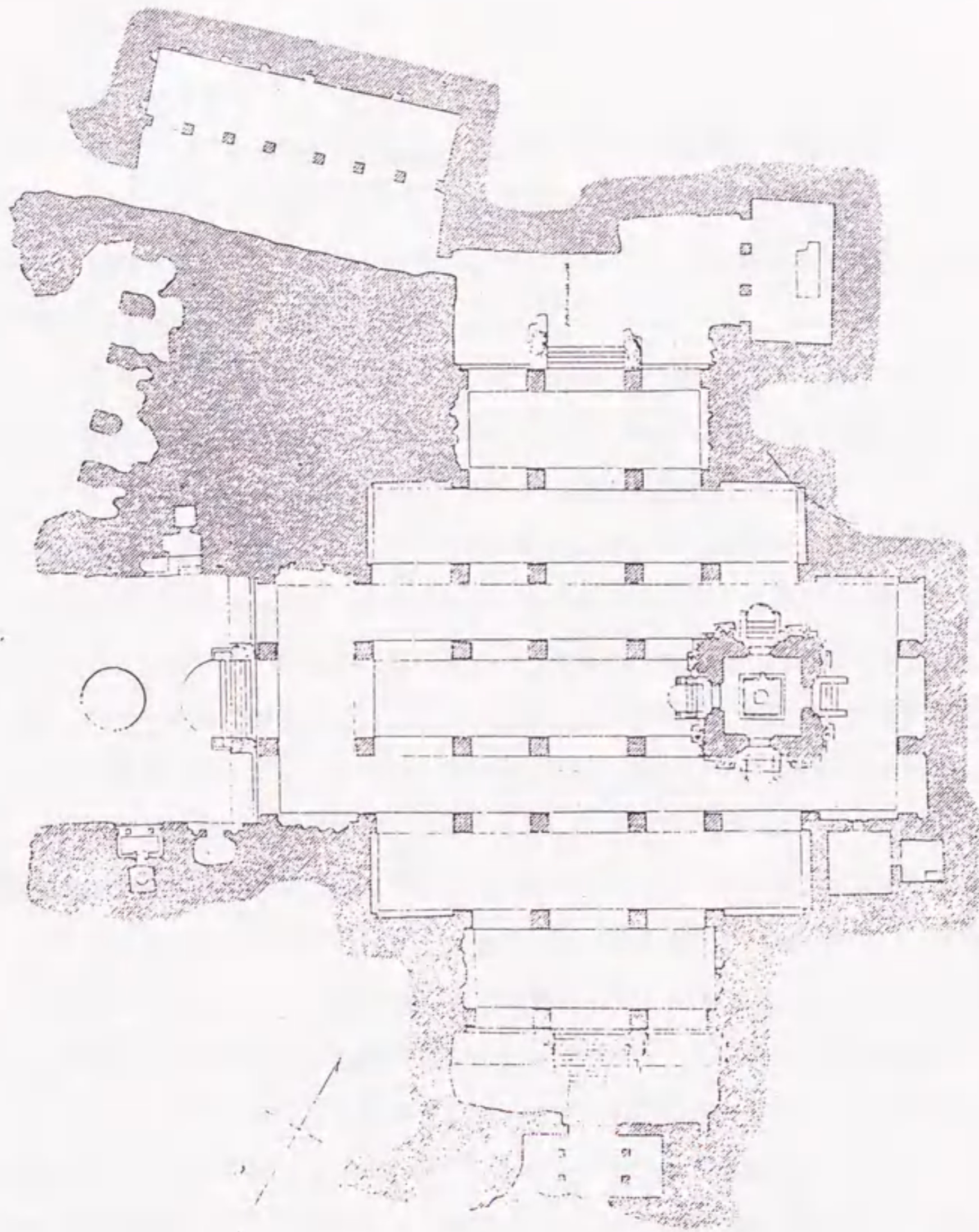


Jayram Raghoba, } Del.
H. Conzuma }

W. GRIGG PHOTO LITH. LONDON, S. E.

J. Burgeu.

図3 アジャンター第一窟壁画からの一場面



J. Burgess.

Scale of 1/4 inch = 1 foot
 W. GRIFFIN, PHOTO LITH. LONDON. S. E.

図4 エローラ第29窟（ヒन्दウー教石窟）平面図

結

1. 本論文の成果と意義

本論文では、インドの後期仏教石窟のうち、第I部では従来ほとんど取り上げられていなかった西マールワー地方の5つの仏教石窟群を、第II部では西デッカン地方の代表的な石窟群である7-8c.に年代づけられるエローラ仏教石窟を取り上げ、石窟という形式で造られる形態の特徴を考察した。

第I部の成果として先ず挙げられるのは、西マールワー地方の仏教石窟群では、チャイティヤ窟やブッダ像祠堂等の崇拜対象を祠る石窟、集会ホールそして僧房という、それぞれ目的の異なった小さな石窟の組合せで構成される伽藍の存在が認められたことである。特に第2章で扱ったダムナール仏教石窟の個々の石窟は従来インド後期仏教石窟の典型とされてきた西デッカン地方の仏教石窟とは大きく異なる「特異な」平面形を有すると記述されていたが、ほぼ隣り合う複数の石窟を一つの伽藍としてまとめて考えれば、仏教建築群としては逆にオーソドックスなものさえ見なすことが可能となるのである。こうした石窟の組合せについては、本論文中では扱えなかったが、インドの北西に当たるアフガニスタンのバーミヤン仏教石窟¹⁾や中国のキジル石窟等でも同様の組合せが確認されており²⁾、西マールワー地方の仏教石窟と西北インド及び中国庫車地方の仏教石窟との類似した面を示している。また、アーンドラ・プラデーシュ州ナーガルジュナコンダ等で見られる構築された仏教伽藍とも類似している。第1章では西マールワー地方の仏教石窟のパトロンであった可能性のある政治勢力の一つとしてシャカ族カールダマカ家系を取り上げ、この王朝がナーガルジュナコンダの仏教伽藍のパトロンであったイクシュヴァーク朝と関係がある点に触れたが、そうした歴史的背景と西マールワー地方の仏教石窟で見られる伽藍の成立と関連したことかも知れない。そして西マールワー地方の仏教石窟と他地域の仏教建築との伽藍構成に関する類似を考えると、西デッカン地方、特にアジャンター周辺におけるブッダ像祠堂を有したヴィハーラ窟の形式の成立は地方的な傾向であったとさえ見なされるの

である。無論、ビハール Bihar 州ナーランダ Nalanda 遺跡やオリッサ Orissa 州ラトナギリ遺跡等では中庭周囲に房室を並べ、奥に祠堂を配したヴィハーラ形式の僧房建築がほとんどであり、アジャンターで見られるものと同じコンセプトの下で成立した建築も非常に多く、典型の一つからはずす訳にはいくまい。したがって本論文では、インドの仏教石窟のもう一つの典型として西マールワー地方で見られた小さな石窟による組合せによる伽藍を捉える必要のある点が示されたといえよう。

第Ⅰ部の成果として挙げられるもう一つは、ダムナール仏教石窟群以外の西マールワー地方の4仏教石窟群の平面形式について検討した第3章で示されたように、この地方のチャイティヤ窟ではストゥーパを空間内に祠った建築的原形を持たなかったと指摘された点、そしてダムナール仏教石窟群の第7窟や第11窟、コルヴィ第10窟・第15窟で見られた集会ホールと見なされる4柱ホールや多柱ホールが、玄関ロビーと2柱室という構成をもったこの地方の僧房窟の一つのタイプを基本として成立した可能性が考えられた点である。後者の点については、ダムナール仏教石窟の成立年代について明確な解答が得られていないという大きな課題はあるが、もしダムナール仏教石窟の成立が西デッカ地方の仏教石窟、例えばアジャンターの後期仏教石窟の成立より先行するとしたならば、ダムナール第7窟の4柱ホールとその奥壁からストゥーパを含んだ祠堂を展開した平面が、アジャンター第1、2、16、17窟などの、ブツダ像祠堂を奥壁に備えたヴィハーラ窟形式の石窟の平面の原形に位置づけられる可能性も示されるのである。

第Ⅱ部のエローラ仏教石窟の柱のデザインと空間に関する研究は、西マールワー地方の仏教石窟とは異なり、多くの歴史学的・美術史学および宗教史学的研究が既に多く為されているという背景のもと、柱のデザインに着目して、そのデザイン・モチーフの由来と石窟空間との関わりを共時的な立場で検討した一つの試論である。その第Ⅱ部で得られた成果は、少なくともエローラ仏教石窟では、蓮華柱、壺葉飾り柱、そしてクッション柱という柱のデザインの違いによって石窟空間内では使い分けが行われ、前二者は内側と外側の境界部分に使われ、クッション柱はブツダ像などの図像を収めた空間の前面を飾るポーチに相当する位置に使われる傾向が確認されたことである。そして今後アジャンターやオーランガバード仏教石窟等の石窟の形態を検討す

る際にも、柱のデザインと空間との関係性を評価するためのひとつの視点が提示されたといえよう。

また石窟に関わる柱は、同じ柱の形を採ってはいても、それが有するデザイン・モチーフの由来が柱ではないもの（例えば壺葉飾り柱に対する吉兆の壺葉飾り）と柱そのものであるもの（クッション柱に対する世俗で使われていた木造建築に使われていた柱）とに分けられるということが指摘された。そして後者のクッション柱の場合、現実に陸上に造られていた構築的な建築の表現を、装飾として石窟空間内への写したものと捉えることができる。

2c. 以前の前期仏教石窟のチャイティヤ窟ではチャイティヤ堂として成立していた木造建築空間全体が石窟空間の装飾として写しとられていた。また本論文第I部第3章では、西マールワー地方の仏教石窟のチャイティヤ窟ではストゥーパ周囲で積極的な空間表現がなされていない点から、この地方ではストゥーパを空間内に祠る建築的原形がなかったことが指摘された。建築構造的な制約のない彫刻によって生み出される石窟空間では、建築とは全く無関係なものから建築と関係のある柱、そして建築空間そのものまで、建築と様々なレベルに関わる原形（西マールワー地方のチャイティヤ窟内の空間表現のように原形のない場合を含めて）が形式的に写された結果が集積され、全体的な空間表現として成立していることが指摘されるのである。つまり建築表現の有無を問わず成立しうる空間を有する石窟においては、建築は空間表現をするためのデザイン・モチーフの一つであるということもできるのである。

インド建築の形態上の特徴の一つである自己相似性はヒンドゥー教寺院建築の構成や設計を貫く根本原理の一つと捉えられている³¹。壺葉飾りがそのまま単独で表現されたり、柱頭モチーフとして建築の一部として使われたりする例のように、一定のデザイン・モチーフが、建築構造とは無関係に成立しうる彫刻手法により、様々なレベルで建築と関わった形で、繰り返し表現されたとするならば、その結果得られる全体的な形態は自ずと自己相似形を示すことにつながるのではないかと思われる。つまり、建築そして柱のような建築部材さえデザイン・モチーフとして形式化して表現されうる石窟空間の性質と、インド建築の形態的特徴である自己相似性とは無関係とは思われないのである。

2. 今後の研究の展望について

インドの仏教石窟は、序でも述べたように、後期に限ってもまだ多くの対象が存在する。ボンベイ郊外のカンヘリー仏教石窟の後期に属する石窟には、西マールワー地方の仏教石窟で見られるストゥーパの形に類似したものが見られるなど、検討すべき点が残っている。西マールワー地方と西デッカ地方との中間地点に位置するバーグ仏教石窟は、現在アジャンターの後期仏教石窟との関わりにおいてのみ説明されているが、西マールワー地方の仏教石窟との関係においても説明され得るし、逆に西マールワー地方の仏教石窟を通して考察した方が、より正確な評価ができる可能性もある。そして本論文では扱えなかった西マールワー地方の仏教石窟と西北インド・バーミヤン石窟や中国のキジル石窟等との形態に関する比較検討は、インドー中国間の文化の交流を示すことが期待される。

また第Ⅱ部で行った柱のデザインと配置の関係を読み解く作業は、少なくとも、エローラ石窟と同じ地域に成立したアジャンター・オーランガバードの石窟群でも検討される必要があり、それによって、より全体的な視点から後期仏教石窟の形態を捉えることが可能となると思われる。また同ジエローラのヒンドゥー教・ジャイナ教石窟に対して同様な視点で検討することにより、仏教石窟の空間との類似や差異が明確になり、さらにインドの宗教建築に普遍的な特徴の一つとして柱と空間の関係を位置づけることが可能となろう。今後の課題である。

註

- 1) 「バーミヤン— 1969年度の調査—」名古屋大学, 1971, p.19ではバーミヤン仏教石窟群の坐仏, 八角・円堂, 方形堂, 長方形堂のそれぞれを中心とした小規模な石窟のまとまりの存在が挙げられ, 「洞群」として記述されている。
- 2) 宿白『キジル石窟の形式区分とその年代』中国文物出版社+平凡社「中国石窟シリーズ—キジル石窟—」第一巻, 1990, pp.162-172.
- 3) キルティ・トリヴェディ「ヒンドゥー寺院; フラクタルな宇宙モデル」『SD』1988年11月, pp.69-80.

写真



写真 1-2-1 ダムナール仏教石窟南群概観 第13窟付近から西



写真 1-2-2 ダムナール仏教石窟南群概観 第10窟から東



写真 1-2-3 ダルマナータ寺院



写真 1-2-4 ダムナール第7窟ファサード



写真 1-2-5 ダムナール第7窟ホール内部



写真 1-2-6 ダムナール第7窟祠堂内ストゥーパ



写真 1-2-7 ダムナール第7窟祠堂前の天井



写真 1-2-8 ダムナール第9窟ファサード



写真 1-2-9 ダムナール第9窟ホール内部



写真 1-2-10 ダムナール第11窟ファサード



写真 1-2-11 ダムナール第11窟
ホール内部



写真 1-2-13 ダムナール第12窟ファサード



写真 1-2-12 ダムナール第12窟列柱廊



写真 1-2-14 ダムナール第12窟
チャイティヤ窟ホール内部



写真 1-2-15 ダムナール第12窟列柱廊
左廊列柱



写真 1-2-16 ダムナール第12窟列柱廊
左廊・後廊ファサード



写真 1-2-17 ダムナール第12窟列柱廊
左廊から右廊を見る



写真 1-2-18 ダムナール第12窟列柱廊左廊ブツダ像



写真 1-2-19 ダムナール第12窟列柱廊後廊
ヴォールト状天井を有する房室



写真 1-2-20 ダムナール第12窟列柱廊右廊
ブツダ像付ストゥーパ



写真 1-2-21 ダムナール第12窟列柱廊
後廊東隅



写真 1-2-22 ダムナール第13窟ファサード



写真 1-2-23 ダムナール第13窟内部



写真 1-2-24 ダムナール第14窟中庭を上から見る



写真 1-2-25 ダムナール第14窟中庭入口

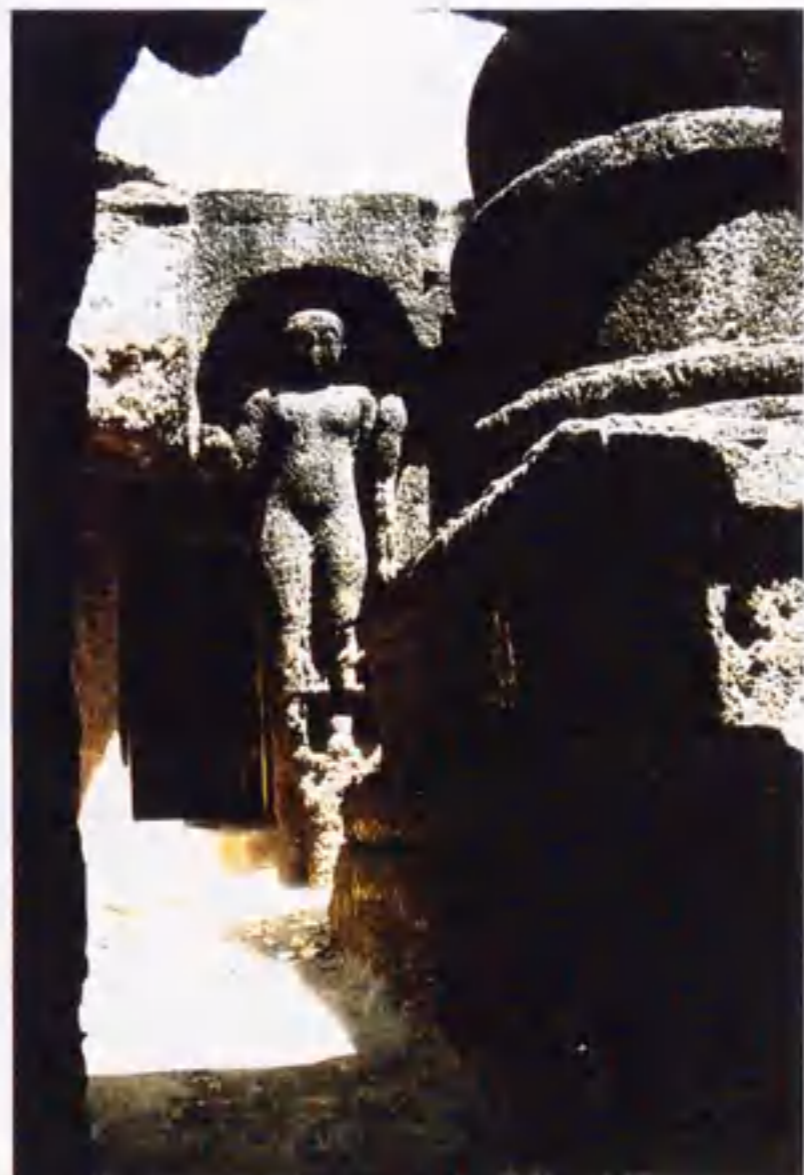


写真 1-2-26 ダムナール第14窟中庭内側



写真 1-2-27 ダムナール第14窟ブツダ像祠堂



写真 1-2-28 ダムナール第14窟
繞道西壁ブツダ立像



写真 1-2-29 ダムナール第10・11・12窟ファサード



写真1-3-1 ボラトゥンガル仏教石窟群北面概観



写真1-3-2 ボラトゥンガル PO-a
ファサード



写真1-3-4 ボラトゥンガル PO-fホール内部



写真1-3-3 ボラトゥンガル PO-a
ホール内部



写真1-3-5 ボラトゥンガル南面僧房窟ヴェランダ



写真1-3-6 ケジャディア・ホープ仏教石窟群西面概観



写真1-3-7 ケジャディア・ホープ KB-e 概観



写真1-3-8 ケジャディア・ホープ KB-e
中庭奥壁石窟内部



写真1-3-9 ケジャディア・ホープ KB-f内部



写真1-3-10 コルヴァイ仏教石窟群南面概観



写真1-3-11 コルヴァイ第2窟丘の下から見る



写真1-3-12 コルヴァイ第2窟全体



写真1-3-13 コルヴァイ第2窟
ボーチ・ブツ像祠堂



写真1-3-14 コルヴァイ第5窟



写真1-3-15 コルヴァイ第9窟(ストゥーパ)
第10窟(奥)



写真1-3-16 コルヴァイ第4窟



写真1-3-17 コルヴァイ北面丸影りストゥーパ



写真1-3-18 コルヴァイ第7窟
ストゥーパ側面



写真1-3-19 コルヴァイ第7窟
ストゥーパ正面



写真1-3-20 コルヴァイ第33窟



写真1-3-21 コルヴイ第10窟
ホール内部



写真1-3-22 コルヴイ第15窟ファサード



写真1-3-23 コルヴイ第15窟ホール内部



写真1-3-24 コルヴイ第35窟玄関ロビーとベッド



写真1-3-25 コルヴイ第45窟



写真1-3-26 ピンナヤガ仏教石窟群概観（BI-g付近）



写真1-3-27 ピンナヤガ仏教石窟群概観（BI-gより西）



写真1-3-28 ピンナヤガBI-gストゥーパ形祠堂



写真1-3-29 ビンナヤガBI-g
ストゥーパ形剎堂ポーチ



写真1-3-30 ビンナヤガBI-g ストゥーパ形剎堂側面



写真1-3-31 ビンナヤガBI-b 東から見る



写真1-3-32 ビンナヤガBI-d
女界口 内部



写真1-3-33 ビンナヤガBI-d 剎堂



写真 I-3-34 ピンナヤガ BI-a 4柱ホール



写真 I-3-35 ピンナヤガ BI-f 玄関ロビー内部



写真 I-3-36 ピンナヤガ BI-e 内部



写真 I-3-37 コルヴィ
第2窟(奥)と第3窟(右)



写真 I-3-38 ピンナヤガ BI-a と BI-b

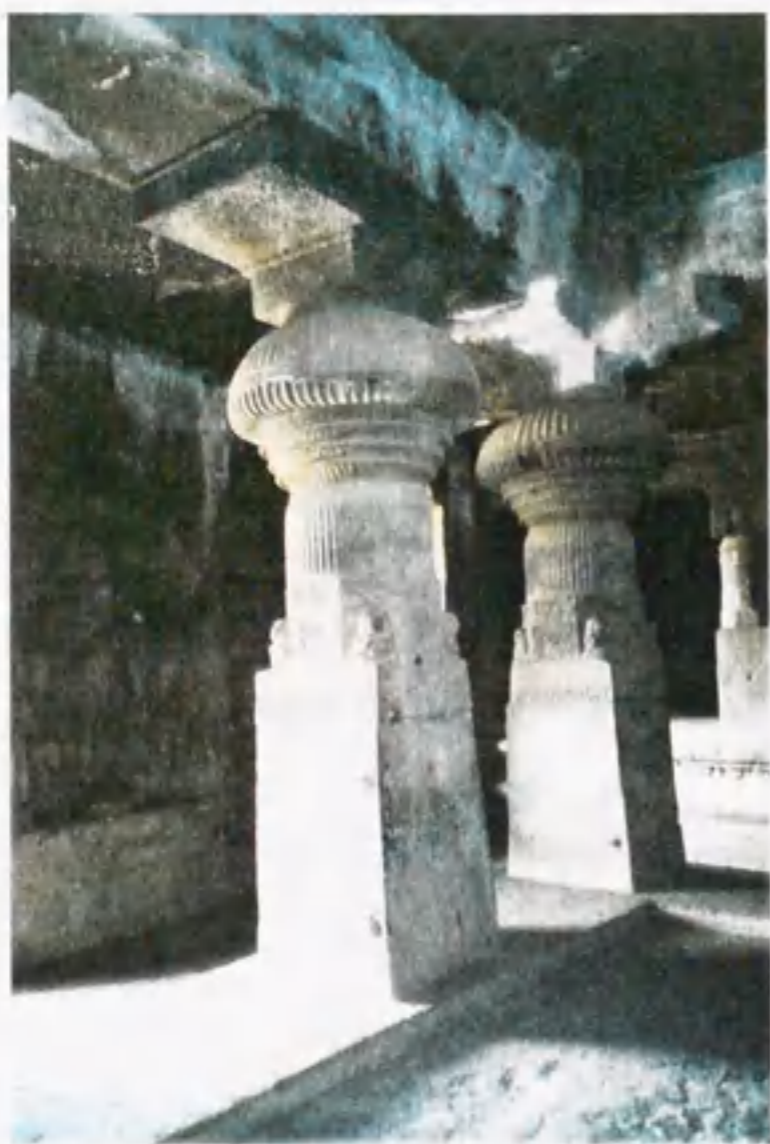


写真 II-1-1 エローラ第2窟
ホール（クッション柱）



写真 II-1-2 エローラ第2窟
ブツダ像ギャラリー前面
（壺葉飾り柱）



写真 II-1-3 エローラ第3窟
ホール（壺葉飾り柱）



写真 II-1-4 エローラ第5窟
ファサード付柱（蓮華柱）



写真 II-1-5 エローラ第5窟ホール
(クッション柱)



写真 II-1-6 エローラ第5右翼窟
列柱廊付柱 (壺葉飾り柱)



写真 II-1-7 エローラ第6窟
祠堂前室前面 (壺葉飾り柱)



写真 II-1-8 エローラ第6窟
祠堂前室右端ニッチ
(クッション柱)



写真 II-1-9 エローラ第7窟ホール
(蓮華柱「砂時計」パターン)



写真 II-1-10 エローラ第8窟ホール前面
(壺葉飾り柱とコンポジット柱)



写真 II-1-11 エローラ第8窟祠堂域前面
(クッション柱と壺葉飾り柱)



写真 II-1-12 エローラ第8窟ホール右手前方
ブッダ像小祠堂 (クッション柱)



写真 II-1-13 エローラ第9窟
ファサード (コンボジット柱)



写真 II-1-14 エローラ第9窟内部
奥壁付柱 (クッション柱)



写真 II-1-15 エローラ第10窟前庭概観



写真 II-1-16 エローラ第10窟ヴェランダ



写真 II-1-17 エローラ第10窟ヴェランダ
(コンボジット柱: 壺葉飾り柱)



写真 II-1-18 エローラ第10窟ヴェランダ
ブツダ像小祠堂前室前面（クッション柱）



写真 II-1-19 エローラ第10窟
チャイティヤ窟内部
（手前：コンポジット柱、奥：蓮華柱）



写真 II-1-20 エローラ第11窟第3層
ファサード（蓮華柱「砂時計」パターン）



写真 II-1-21 エローラ第12窟第1層
（手前：壺葉飾り柱、奥：単純方形柱）



写真 II-2-1 ナーシク仏教石窟第3窟
列柱ヴェランダ付柱



写真 II-2-2 ストウパ大理石スラブ
(ナーガルジュナゴンダ)
National Museum, New Delhi 所蔵



写真 II-2-3 バドゥッサー 仏教石窟
チャイティヤ窟



写真 II-2-4 ウダヤギリ第1窟



写真 II-2-5 欄楯レリーフ (マトウラー)
Lucknow State Museum 所蔵



写真 II-2-6 アジャンター第2窟ヴェランダ



写真 II-2-7 Kodumbalur,
Muchkundeswarar Temple
外壁付柱
(南インドのヒンドゥー
教寺院の一例)

あとがき

本論文の数編は、以下のように既に発表したものを、一部改編し、加筆・修正したものである。

- 第I部第2章 「ダムナール仏教石窟の平面と伽藍の基本構成
—インドの後期小乗仏教石窟の形態に関する研究(1)—」
日本建築学会計画系論文集 第460号 1994年6月
- 第I部第3章 「西マールワー地方の仏教石窟の平面形式
—インドの後期小乗仏教石窟の形態に関する研究(2)—」
日本建築学会論文集委員会に投稿中
- 第II部第1章 「エローラ仏教石窟の柱のデザインと配列
—エローラ仏教石窟の柱と空間に関する研究(1)—」
日本建築学会計画系論文集 第484号 1996年6月、掲載決定

本研究にあたって、小寺武久博士には、名古屋大学在学中のみならず、インド留学期間中においてさえも、終始かわらぬ御指導と励ましを賜った。また、片木篤博士、佐藤彰博士、丹羽和彦博士からは、貴重な御助言を多数いただいた。そのほか、インド政府奨学生として1994年9月から一年間御世話になったインド、マディヤ・プラデーシュ州ウジャイン市のヴィクラム大学インド古代史・文化・考古学科では教授スシラ・パント博士をはじめとする多くの方々から西マールワー地方の仏教石窟遺跡の調査および研究の進展に関して御助言および御配慮をいただいた。記して、深謝の意を表すものである。



inches
1 2 3 4 5 6 7 8
cm
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

